

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。皿形土器の出土が目立つ。墨書土器・金属製品を多く出土し、特に青銅製の帯金具も出土している。竈内からは小型瓶(No19)が伏せた状態で出土し、支脚として使用したものと思われる。

所見 柱穴・壁柱穴の状況から考えて拡張住居と考えられ、竈の作り替えも住居跡拡張ごとに行われたと考えられる。

皿形土器が、床面直上から覆土下層にかけて出土していること等から平安時代の住居跡と判断される。掘立柱建物群に近接し集落内で大型な住居に類すること、また、帯金具のような特殊な遺物を出土する事などから、集落内で特殊な位置にある竪穴住居跡と考えられるだろう。

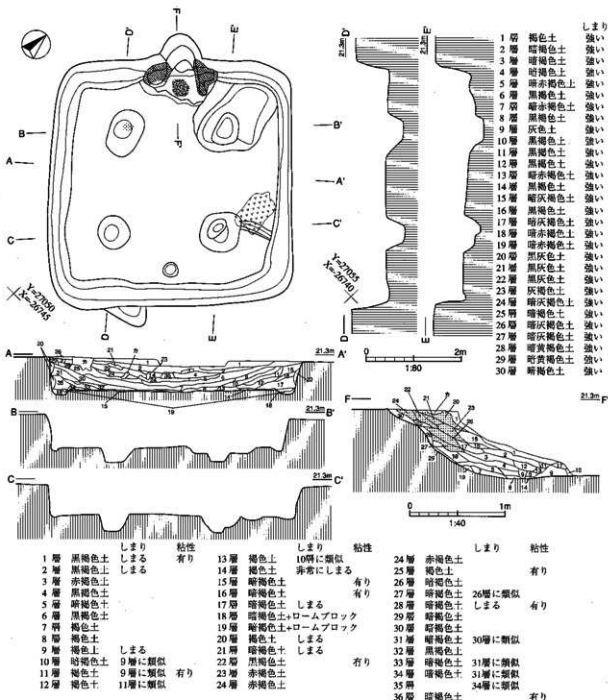


図140 A179

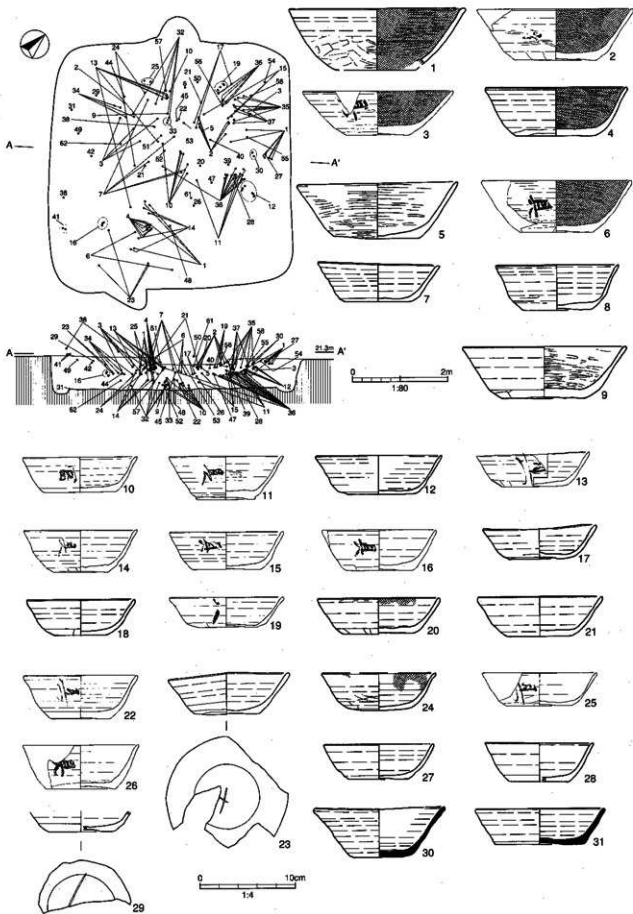


图141 A179(2)

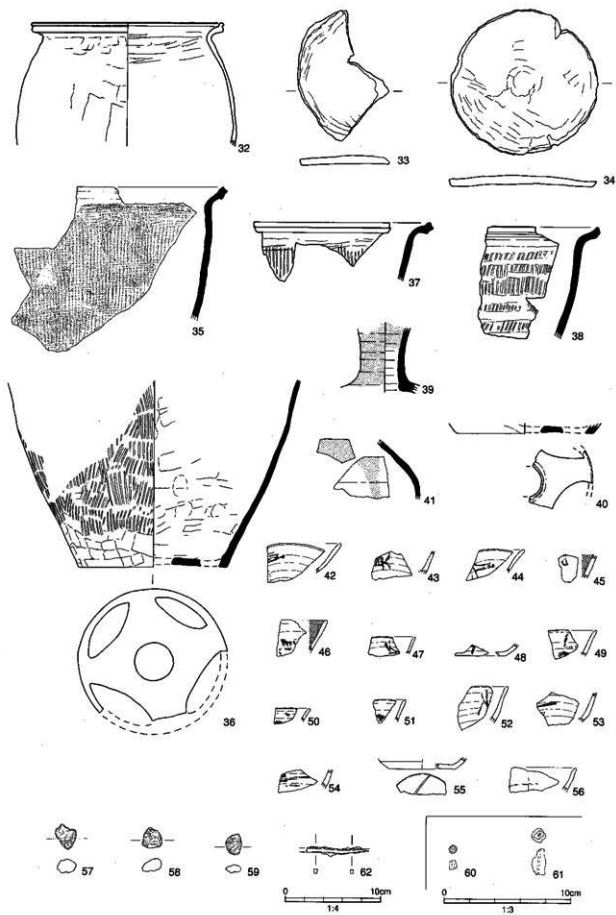


图142 A179(3)

表86 A179遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	186×(83)×65 ロクロ成形 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下半ヘラ削り後踵らにヘラ磨きを加える 内面 ヘラ磨き	橙褐色	砂粒含	4/5	内黒
2	土師器 坏	162×84×55 ロクロ成形 底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ヘラ磨き	橙褐色	砂粒 雲母含	3/4	内黒 体部外面 墨書「具」
3	土師器 坏	(158)×66×(47) ロクロ成形 底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ヘラ磨き	橙褐色	砂粒 雲母含	2/3	内黒 体部外面 墨書「具」
4	土師器 坏	(150)×82×(52) ロクロ成形 底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ヘラ磨き	褐色	砂粒 雲母含	2/3	内黒
5	土師器 坏	169×88×60 ロクロ成形 底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り後全体に丁寧なヘラ磨き を加える 内面 ヘラ磨き	橙褐色	砂粒 雲母含	2/3	
6	土師器 坏	(158)×77×(55) ロクロ成形 底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り後全体に丁寧なヘラ磨き を加える 内面 ヘラ磨き	橙褐色	砂粒 雲母含	1/2	内黒 体部外面 墨書「具」
7	土師器 坏	129×70×43 ロクロ成形 底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	完形	
8	土師器 坏	130×72×48 ロクロ成形 底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	2/3	
9	土師器 坏	(179)×86×55 底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ヘラ磨き	青	砂粒 雲母含	2/3	内面ス付着
10	土師器 坏	120×74×38 ロクロ成形 底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	略完形	体部外面 墨書「富」
11	土師器 坏	(120)×60×46 底部胎土を貼り付け台状をなす 体部下端にくびれを もつ 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	明褐色	砂粒 雲母含	2/3	体部外面 墨書「具」
12	土師器 坏	(132)×80×41 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	暗橙褐色	砂粒 雲母含	2/3	内面器面 剥離多
13	土師器 坏	119×70×37 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	2/3	体部外面 墨書「具」
14	土師器 坏	120×57×45 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	略完形	体部外面 墨書「具？」
15	土師器 坏	120×70×40 ロクロ成形 回転糸切り後回転ヘラ削りと思われる 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	明褐色	粗砂粒 雲母含	完形	体部外面 墨書「具」 器面磨耗
16	土師器 坏	120×70×43 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	明褐色	赤色土粒 砂粒 雲母含	3/4	体部外面 墨書「具」
17	土師器 坏	119×74×32 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	暗褐色	砂粒 雲母含	3/4	

18	土師器 坏	114×56×38 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	橙褐色	赤色粒 砂粒 雲母含	4/5	
19	土師器 坏	120×(63)×32 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	暗赤褐色	砂粒 雲母含	1/2	墨書「具?」 体部外面
20	土師器 坏	(128)×72×38 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	暗褐色	粗砂粒 赤色土粒 含	1/2	口縁部タール状 付着物
21	土師器 坏	130×60×42 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	1/2	
22	土師器 坏	(120)×62×46 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	褐色	砂粒 雲母含	1/2	墨書「具」 体部外面
23	土師器 坏	127×68×44 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	青	砂粒 雲母含	2/3	器面磨耗 線刻「メ」 体部外面
24	土師器 坏	(120)×68×40 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 口縁端 部で強く外反 体部下半に丸みをもつ 外面 口縁～体部下半ナデ 体 部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	1/2	タール状付着物
25	土師器 坏	(120)×68×35 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 薄手の 作り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	暗褐色	砂粒 雲母含	1/3	墨書「具」 体部外面
26	土師器 坏	(122)×(72)×47 ロクロ成形 回転糸切り 底部より急傾斜で立ち上 がる 外面 口縁～体部上半ナデ 体部下半ヘラ削り 内面 口縁ナデ	褐色	砂粒 雲母多含	1/2	墨書「具」 体部外面
27	土師器 坏	(115)×(62)×37 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	1/2	
28	土師器 坏	(114)×(63)×41 ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り	橙褐色	赤色粒 砂粒 雲母含	1/2	口縁内面 タール状付着物
29	土師器 坏	一×(70)×(22) ロクロ成形 回転糸切り後外周回転ヘラ削り 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	明褐色	砂粒含	底部片	底部 線刻
30	須恵器 坏	138×50×53 ロクロ成形 回転ヘラ削り? 底部小さく口縁に向けて 開く 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	茶褐～ 黒褐色	雲母 粗砂粒含	略定形	
31	須恵器 坏	136×93×38 ロクロ成形 回転糸切り後ヘラ削り 全体ナデ	灰 青	粗砂粒 小石多含	4/5	
32	土師器 甕	(200)×一×(130) 口縁受け口状 上端をつまみ上げて段をなす 外面 凹線状の調整 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半ヘラ削り 内面 口縁ナデ	橙褐色	粗砂粒 多含	口縁片	
33	土師器 甕	一×長軸(133)×短軸(94) 甕の底部を打ち抜き円形に加工したものか? 外面 ヘラ削り後ナデ 口縁ヘラナデ 内面 ナデ	暗褐色		底部片	
34	土師器 甕	一×154×一 甕の底部を打ち抜き円形に加工したもの 外面 ヘラ削り 内面 ヘラナデ	暗褐色	粗砂粒含	底部片	
35	須恵器 甕	一×一×一 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半タケキ 内面 口縁ナデ 一部に指痕残	砂褐色～ 茶褐色 暗褐色	粗砂粒含	口縁片	

36	須恵器 瓶	-X 155×(198) 輪横み 外面 胴部タタキ 下端ヘラ削り 内面 胴上半ナデ 一部に指廻り痕	灰褐 普	粗砂粒含 	1/2 以下	多孔
37	須恵器 壺	-X-X- 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半タタキ 内面 口縁ナデ	灰褐 普	粗砂粒 雲母含	口縁片	
38	須恵器 壺	-X-X- 口縁外反し通部立ち上がる 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半タタキ後ナデ	灰黒褐 普	粗砂粒 雲母含	口縁片	
39	須恵器 長頸壺	-X-X-(68)ロクロ成形 頸部上部に向けてやや開く	緑灰 良	粗砂粒 黒色粒 多含	頸部片	内外面 自然釉
40	須恵器 瓶	-X(140)X- 多孔の中央部円形 周囲木の葉型4個の5孔と思われ 外面 胴下端ヘラ削り 底部中央ナデ 内面 胴下端ナデ	暗褐 良	砂粒含	底部片	
41	須恵器 長頸壺	-X-X- 長頸壺の胴(肩)部と思われる	砂灰褐 の灰 普	黒色粒 褐色粒 含	胴部片	自然釉
42	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 外面 口縁・体部下ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 口縁ナデ	暗褐褐 普	砂粒 雲母含	口縁片	墨書「具」 体部外面
43	土師器 坏	-X-X- 外面 胴下半ナデ 下端ヘラ削り 内面 胴下半ナデ	褐 普	砂粒含	体部片	墨書「具」 体部外面
44	土師器 坏	-X-X- 外面 口縁・体部下ナデ 内面 ナデ	橙褐 普	砂粒 雲母含	口縁片	墨書「具」 体部外面
45	土師器 坏	-X-X- 外面 胴部ナデ後踵らにヘラ磨き 内面 胴部ヘラ磨き	橙褐 普	砂粒含	体部片	墨書「口」 体部外面 内黒
46	土師器 坏	-X-X- 外面 口縁ナデ 内面 口縁ヘラ磨き	暗褐 普	砂粒 雲母 赤色粒 含	口縁片	墨書「具」 体部外面 内黒
47	土師器 坏	-X-X- 全体ナデ	橙褐 普	砂粒含	口縁片	墨書「具」 体部外面
48	土師器 坏	-X-X- 外面 胴下半ヘラ削り 底縁ヘラ削り 内面 ナデ	砂褐 の橙褐 普	砂粒 雲母微含	底部片	墨書「口」 体部外面
49	土師器 坏	-X-X- 内外面ナデ 器面磨耗	橙褐 普	砂粒含	口縁片	墨書「口」 体部外面
50	土師器 坏	-X-X- 内外面ナデ	褐 普	砂粒 雲母含	口縁片	墨書「口」 体部外面
51	土師器 坏	-X-X- 内外面ナデ	褐 普	砂粒 雲母含	口縁片	墨書「口」 体部外面
52	土師器 坏	-X-X- 外面 口縁・体部下ナデ 頸部・体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	褐 普	砂粒 雲母含	口縁片	墨書「具」 体部外面
53	土師器 坏	-X-X- 外面 胴下半ナデ 胴下端ヘラ削り 内面 ナデ	暗褐 普	砂粒 雲母多含	体部片	墨書「口」 体部外面

54	土師器 罎	—×—×— 外面 胴下半ナデ 胴下端ヘラ削り 内面 ナデ	褐色	砂粒 雲母多	体部片	墨書「□」 体部外面
55	土師器 罎	—×—×— 外面 胴下半ナデ 胴下端ヘラ削り 内面 ナデ	褐色	砂粒 雲母多	底部片	ヘラ書き 底部外面
56	土師器 罎	—×—×— 内外面ナデ 内面スス付着	暗褐色	粗砂粒 雲母多	口縁片	線刻? 体部外面
57	石器 軽石製品	長軸26×短軸21×厚さ25 重さ1.5g 端がやや尖り気味の不整な楕円形を呈する。縦線に不明瞭な凹みが見られる以外、明確な加工は認められず、用途不明。				略完形
58	石器 軽石製品	長軸21×短軸20×厚さ13 重さ1.2g 不整な円形を呈する。一部に研磨痕らしきものが見られるだけであり、用途不明。				略完形
59	石器 軽石製品	長軸22×短軸16×厚さ8 重さ1.0g 不整な楕円形を呈する。一部に磨痕らしきものが見られるだけであり、用途不明。				略完形
60	管状土製 品 上製品	長軸7×短軸6 重さ0.3g 孔径2.0mm すぼまった端のみが残されている。孔はやや片寄って穿たれているが、表面には比較的丁寧なナデが加えられており、平滑である。				略完形
61	管状土製 品? 土製品	長軸21×短軸11 重さ1.6g 孔径1.0mm 半分ほどを欠き、歪みが著しい。中央部がやや膨らみ、端部がすぼまる。径1mmほどの小さな孔がほぼ中央を貫通している。			1/2	
62	鉄製品 刀子	長軸62×短軸4.5×厚さ4 重量4.0g 短軸4×厚さ3				

A179

検出地区 F8-55G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。比較的大型の住居跡に類する。

遺構 床はロームを踏み固めた床で全体的に硬い。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周し主柱穴は4本柱である。竈は北壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残存し遺存状況は良好で、天井部もセクションから検出された。燃焼部においては明瞭な火床を検出している。

覆土は、色調を基本に36層に分層。覆土中層にて広範囲にわたる焼土層を検出。また、覆土中に貝層を検出している。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土下層から覆土上層にかけて多量に出土。「具」と書かれた墨書土器の出土が目立つ。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断される。

A180

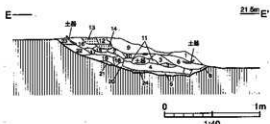
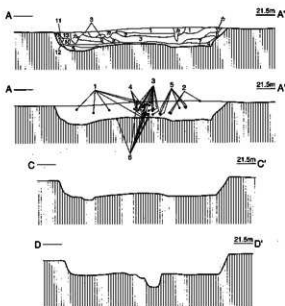
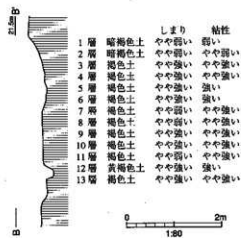
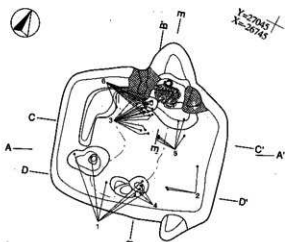
検出地区 F8-45G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。

遺構 床はロームを踏み固めた床で住居跡中央で硬化面を検出。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は検出されず主柱穴も不明である。竈は北壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残存し、遺存状況は良好で、天井部もセクションから検出された。燃焼部においては明瞭な火床を検出している。

覆土は、色調を基本に12層に分層。覆土中にて焼土層を検出。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断される。



1層	黒色土	強い	しまり	13層	暗灰褐色土	強い	しまり
2層	暗赤灰褐色土	強い		14層	黒灰褐色土	強い	
3層	暗赤灰褐色土	強い		15層	暗褐色土	強い	
4層	赤灰色土	強い		16層	暗褐色土	強い	
5層	赤色土	強い		17層	暗赤褐色土	強い	
6層	暗灰褐色土	強い		18層	赤褐色土	強い	
7層	暗黄褐色土	強い		19層	暗褐色土	強い	
8層	赤色土	強い		20層	暗黄褐色土	強い	
9層	黒色土	強い		21層	暗黄褐色土	強い	
10層	黒褐色土	強い		22層	暗褐色土	強い	
11層	暗赤灰褐色土	強い		23層	暗褐色土	強い	
12層	暗褐色土	強い		24層	白色粘土		

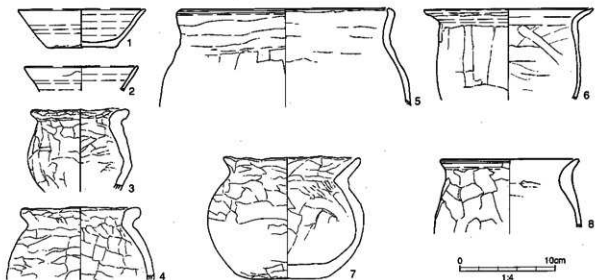


図143 A180

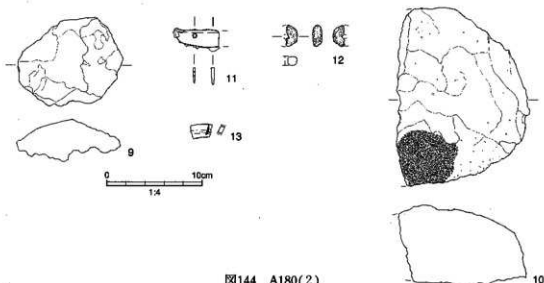


図144 A180(2)

表87 A180遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(134)×(70)×41 外面 口縁一体部下ナデ 頸部・体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	暗褐色	砂粒多含	1/3	
2	土師器 坏	120×-×(27) ロクロ成形 内外面ナデ	暗褐色	砂粒含	口縁片	
3	土師器 小型甕	104×-×(86) 輪積み 口縁外側に折れ曲がるように開く ごく厚手の粗雑な作り 内外面 ナデと指による調整 頸部・胴部ヘラ削り	褐色	粗砂粒多含	4/5	
4	土師器 小型甕	(126)×-×(77) 口縁外反 厚手で粗雑な作り 内外面 ヘラ削り後ナデ 頸部・胴部上半ヘラ削り	褐色	砂粒含	口縁～胴部片	
5	土師器 甕	(230)×-×(103) 輪積み 頸部から口縁立ち上がり気味 口縁上端内屈 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半ヘラ削り 内面 ナデ	褐色	砂粒含	口縁片	
6	土師器 甕	(178)×-×(96) 口縁強く外反 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半ヘラ削り 内面 ナデ	褐色	粗砂粒含	口縁～胴部片	
7	土師器 甕	144×95×130 口縁外反 胴部断面 厚手で粗雑な作り ヘラ削り	褐色	砂粒含	2/3	
8	土師器 甕	146×-×(80) 頸部直線的に立ち上がり口縁上端で外反 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半ヘラ削り 内面 ナデ	明褐色	粗砂粒多含	口縁～胴部片	
9	支脚? 土製品	(107)×90×44 支脚の裾部か? 調整等磨耗のため不明			断片	
10	砥石? 石器	長軸188×短軸140×厚さ89 重量2.86g 本来は楯門形に近い形状を呈していたものと思われるが、中央部で割れたものをそのまま使用か? 全体に粗い面を残すが一部に磨り痕が認められることから、砥石などの用途が考えられる。			1/2	
11	鉄製品 種換具	長軸49×短軸16×厚さ2 重量5.6g 短軸16×厚さ3.5				

12	縣石製品 石器	長軸23×短軸12×厚さ10 重量0.7g 本来は円形を呈したと思われる。中央部に径4～5mmほどの孔が穿たれる。				
13	土師器 坏	—×—×— 外面 体部下半ナデ 内面 体部下半ヘラ磨き	椀 香	砂粒合	体部片	墨書「□」 体部外面

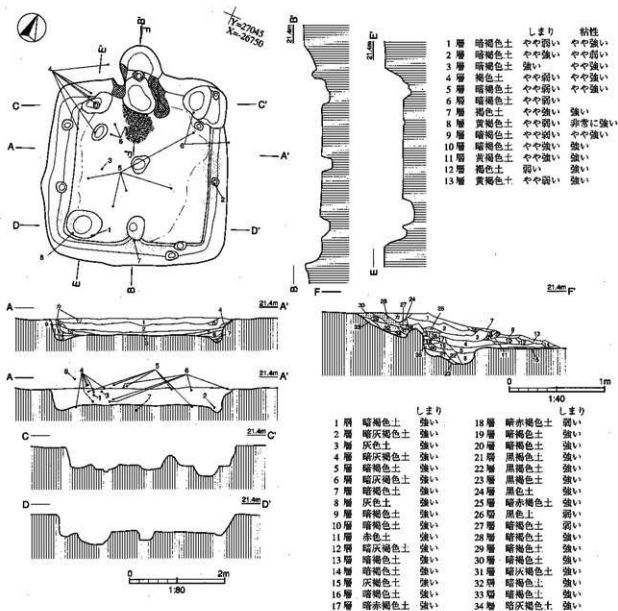


図145 A181

A181

検出地区 F8-46G。台地北側縁部、平坦面に位置する。

遺構 床はロームを踏み固めた床で硬化面を広範囲に検出。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。周溝は約3/4周する。主柱穴は不明である。竈は北壁ほぼ中央で検出された。両軸とも残存し、遺存状況は良好で明瞭な火床も検出している。

覆土は、色調を基本に13層に分層。覆土中、壁際に焼土層を検出。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断される。

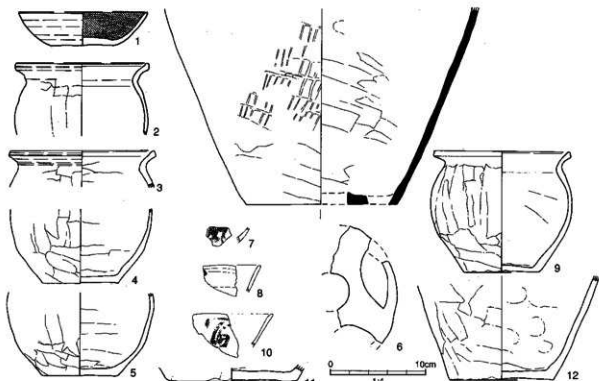


図146 A181(2)

表88 A181遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	{136}×64×36 ロクロ成形 外面 ナデ 内面 ヘラ磨き	暗褐色	砂粒含	2/3	内黒
2	土師器 壺	{140}×-×(76) 口縁受け口状 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半縦ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	砂粒含	口縁片	
3	土師器 壺	{155}×-×(39) 口縁受け口状 頸部「く」の字状 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半縦ヘラ削り 内面 ナデ	暗赤褐色	砂粒含	口縁片	
4	土師器 壺	-×80×(78) 内外面ヘラ削り	暗赤褐色	砂粒含	胴部～ 底部片	スス付着
5	土師器 壺	-×80×(88) 外面 胴部ヘラ削り 内面 胴部ナデヘラ削り	暗赤褐色	砂粒含	胴部～ 底部片	
6	須恵器 瓶	-×(158)×(208) 多孔の瓶 中央円形1 副囲木の葉形4の5孔と思 われる 外面 下半タタキ 先端ヘラ削り 内面 下半ヘラナデ	暗赤褐色	砂粒多含	胴部～ 底部片	
7	土師器 杯	-×-×- 外面 下半ナデ 下端ヘラ削り 内面 下半ナデ	橙褐色	砂粒含	体部片	墨書「□」 体部外面
8	土師器 杯	-×-×- ロクロ成形 内外面ナデ	褐色	砂粒 赤色粒 雲母含	口縁片	墨書「□」 体部外面
9	土師器 小型壺	142×80×128 最大径148 広口で外反し上端立ち上がり気味 胴上部 に最大径をもつ 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半縦ヘラ削り 下半斜め ヘラ削り 内面 ナデ	暗褐色	砂粒 赤色粒含	略完形	

10	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 内外面ナデ	橙褐色	砂粒 赤色粒 多含	口縁片	墨書「冨」 体部外面
11	土師器 甕	-X140X(18) 甕の底部を打ち抜き円形に加工したものか? 内外面ヘラ削り	橙褐色	砂粒含	底部片	
12	土師器 甕	-X108X(110) 外面 胴部ヘラ削り 内面 ナデか?	暗赤褐色	石粒 雲母含	胴部~ 底部片	スス附着

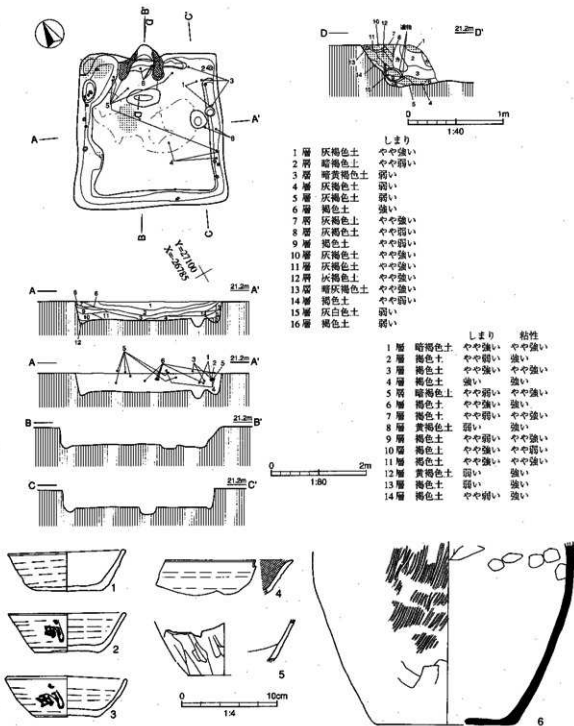


図147 A182

表89 A182遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	—×—×— ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り 周縁ヘラケズリ	黒褐		完形	
2	土師器 杯	125×69×39 ロクロ成形 底部一回転糸切り 周縁ヘラケズリ	淡褐 良	緻密	略完形	墨書 体部横位 「富」
3	土師器 杯	127×65×38 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り 周縁ヘラケズリ	淡褐 良	緻密	完形	墨書 体部横位 「富」
4	土師器 杯	—×—×— ロクロ成形	◎淡褐 ◎黒褐 良	緻密	口縁片	内黒?
5	土師器 甕	—×—×— 胴部下半一縦位のヘラケズリヘラミガキ 底部中央に木葉痕	橙褐	白色・ 砂粒微	底部片	
6	須恵器 甌	—×—×— 胴底部穿孔 部中位他タタキ目 下位ヘラ削り 内面に指頭圧痕あり	灰褐 普	普	1/3	

A182

検出地区 F9-9G。台地北側先端部、平坦面に位置する。

遺構 床はロームを踏み固めた床で住居跡中央からやや竈よりに硬化面を検出。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は約3/4周する。主柱穴は不明である。竈は東壁ほぼ中央で検出された。両袖とも残存し、遺存状況は良好である。また、北隅が壁がやや張り出し焼土・粘土が多く検出された部分がある。床面も熱を受け一部赤化していた。竈の作り替えが行われ、その古い竈の痕跡と思われる。

覆土は、色調を基本に14層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土上層を中心に少量に出土。竈内からの出土が目立つ。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断される。

A183

検出地区 F9-8G。台地北側先端部、平坦面に位置する。

遺構 床はロームを踏み固めた床で住居跡中央部で部分的に硬化面を検出。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は約3/4周する。主柱穴は不明である。竈は東壁ほぼ中央で検出された。袖は片方のみ残存し、焼土を多量に検出した。竈は住居跡廃絶時に壊されたと考えられる。

覆土は、色調を基本に14層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断される。

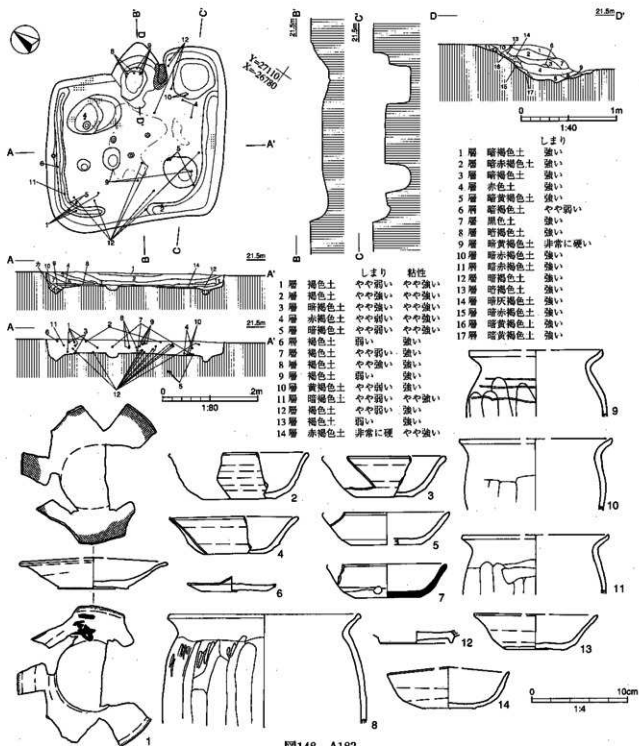


図148 A183

表90 A183遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 皿	156×74×33 内面 ヘラミガキ 内面周辺にスス付着	ロクロ成形 底部回転糸切り	淡褐色	織布	2/3	墨書「仲」 体部外面横位
2	土師器 杯	(148)×(78)×49	ロクロ成形 底部回転ヘラ切り 体部下端ヘラ削り	淡褐色	普通	口縁～ 底部片	

3	土師器 坏	(130)×(63)×43 ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	淡褐色 青	青	口縁～ 底部片	
4	土師器 坏	(136)×(66)×39 ロクロ成形 体部下端ヘラ削り	褐色 青	青	口縁～ 底部片	
5	土師器 坏	—×—×35 ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐色 青	青	口縁～ 底部片	
6	土師器 坏	—×69×— ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐色 青	青	底部片	
7	須恵器 坏	—×—×— ロクロ成形 体部外面に棒状工具による圧痕あり 底部静止ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	灰褐色 青	緻密	口縁～ 底部片	
8	土師器 甕	204×—×(115) ロクロ成形 口縁ナデ 胴部タタキ目の後ヘラ削りによる調整	黒褐色 青	青	口縁片	
9	土師器 甕	—×—×— 輪積み 口縁ナデ 胴部縦位のヘラ削り	橙褐色 青	青	口縁片	
10	土師器 甕	—×—×— ロクロ成形 口縁ナデ 胴部縦位のヘラ削り	①黒褐色 ②暗褐色 青	青	口縁片	
11	土師器 甕	—×—×— 輪積み 口縁ナデ 胴部縦位のヘラ削り	褐色 青	青	口縁片	
12	緑釉 高台付皿	—×—×— ロクロ成形	緑 良	緻密	底部片	
13	土師器 坏	130×60×38 ロクロ成形 底部回転糸削り 周縁ヘラ削り	淡褐色 青	青	3/4	
14	土師器 坏	128×56×44 ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	淡褐色 青	青	1/4	

A184

検出地区 F9-19G。台地北側先端部、平坦面に位置する。

遺構 床はロームを踏み固めた床で住居跡中央部で硬化面を検出。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝はほぼ全周する。主柱穴は不明である。竈は北壁ほぼ中央で検出された。袖は両袖とも残存し遺存状況は良好で、天井部もセクションから検出された。

覆土は、色調を基本に18層に分層。炭化物を多量に検出したことから、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。竈内から支脚出土。壁際での出土は少ない。「具」・「万」と書かれた墨書土器が多数出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断される。

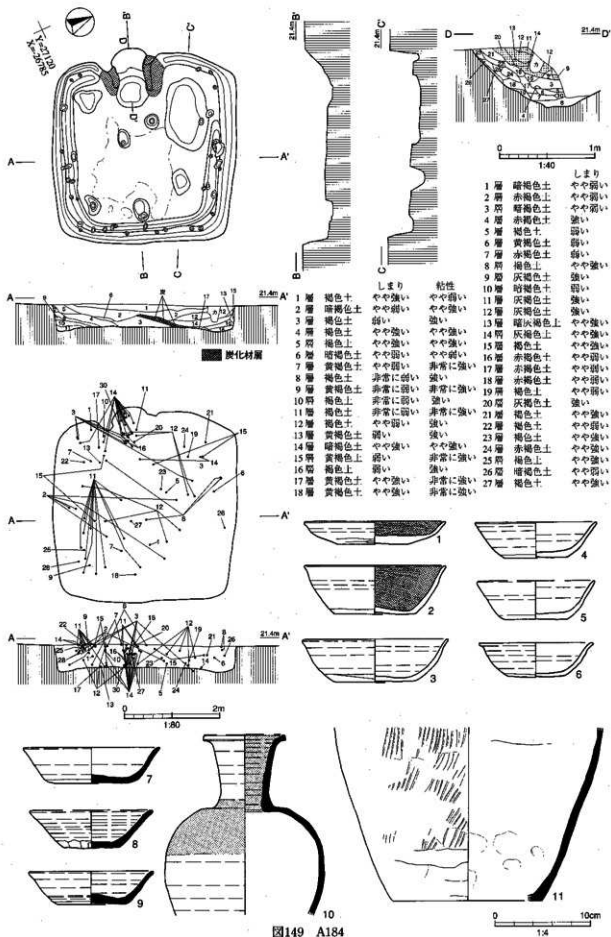


図149 A184

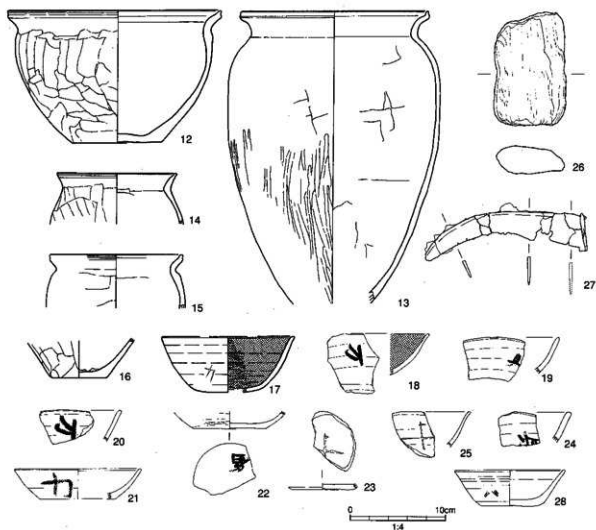


図150 A184(2)

表91 A184遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 澁成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	(150)×76×24 ロクロ成形 底部平底 厚みをもつ 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ヘラ磨き	底部回転糸切り後外周ヘラ削り 体部外縁	橙褐色	砂粒含	2/3	内外面ケール状 付着物 外面スス付着 内黒
2	土師器 坏	(150)×84×52 ロクロ成形 体部上半に丸みをもち直線的に立ち上がる 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ヘラ磨き	底部回転糸切り後外周ヘラ削り 口縁外反	橙褐色	砂粒含 雲母含	1/3	内黒
3	土師器 坏	154×86×46 ロクロ成形 体部中央で丸みをもち立ち上がる 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	底部回転糸切り後外周ヘラ削り 口縁外反	明橙褐色	粗砂粒含 燧石粒含	2/3	
4	土師器 坏	128×64×38 ロクロ成形 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	底部回転糸切り後外周ヘラ削り	褐色	砂粒含	完形	内外面スス付着
5	土師器 坏	(124)×64×41 ロクロ成形 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	底部回転糸切り後外周ヘラ削り	明橙褐色 橙褐色	砂粒含 雲母含	1/3	
6	土師器 坏	(128)×60×37 ロクロ成形 体部丸みをおびつつ外縁 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	底部回転糸切り後外周ヘラ削り 口縁外反	良	砂粒含 雲母含	1/3	

7	須恵器 坏	(144)×72×38 ロクロ成形 底部ヘラ削り 口縁外反 外面 口縁～体部上半ナデ 体部下半ヘラ削り 内面 ナデ	暗茶濁湯 悪	粗砂粒 多含	1/3	
8	須恵器 坏	130×62×40 ロクロ成形 ヘラ切り痕? 口縁外反 小さな底部から体部、口縁に向けて外反。 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	灰黒濁 悪	粗砂粒含 雲母含	1/3	
9	須恵器 坏	(132)×70×35 ロクロ成形 口縁外反 体部外傾 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り	灰茶濁 善	粗砂粒 多含	1/2	
10	須恵器 長頸壺	(86)×-×(192) ロクロ成形 口縁やや内傾 頸部は口縁から胴部にかけて細くなる 胴部から肩部が張る	青灰濁 善	砂粒含 黒色粒 多含	1/3	火彫れあり 自然釉
11	須恵器 甕	-×(156)×(185) 輪積み 外面 タタキ 胴部下端ヘラ削り 内面 ヘラナデ 一部に指摺圧痕	灰黒濁 悪	粗砂粒含 白色粒 多含		胴部～ 底部片
12	土師器 甕	223×92×141 底部ヘラ削り 口縁外反し広口 肩部はつまみ上げら れる 外面凹線状に調整 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半ヘラ削り 下半横ヘラ削り 内面 ナデ	褐 悪	褐色粒 粗砂粒 多含		略定形 黒斑
13	土師器 甕	200×-×(310) 口縁受け口状 肩部つまみ上げられ内屈 頸部「く」の字状 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半・下半ヘラ削り後ヘラ磨き 内面 ヘラナデ	暗褐色 善	粗砂粒 多含	2/3	
14	土師器 小型甕	(126)×-×(53) 口縁外反 頸部緩やかな「く」の字状 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半ヘラ削り 内面 ナデ	砂褐色 砂濁 善	砂粒含 雲母含		口縁片
15	土師器 小型甕	(140)×-×(57) 口縁外反 外面凹線状の調整 頸部「く」の字状 頸部と胴部の境に線を有する 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半ヘラ削り 内面 ナデ	橙濁 善	砂粒含		口縁片
16	土師器 甕	-×60×(43) 底部木葉痕 外面 胴上半・下端ヘラ削り 内面 胴下半ナデ 中央ヘラナデ	善	粗砂粒 多含		胴部片
17	土師器 坏	(140)×(50)×64 ロクロ成形 底部回転ヘラ削り(中心不明)跡高深い 口縁外反 底部小さく丸みをおびつつ立ち上がる 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ヘラ磨き	明濁 善	砂粒含 褐色粒含	1/4	線刻「カ」 体部外面 内黒
18	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 口縁～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ヘラ磨き	橙濁 善	砂粒含 雲母含		墨書「万」 体部外面 内黒
19	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外面 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	橙濁 善	粗砂粒含 雲母含		口縁片 墨書「因?」 体部外面
20	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内外面ナデ	橙濁 善	砂粒含 雲母含		口縁片 墨書「万」 体部外面
21	土師器 坏	(132)×(80)×32 ロクロ成形 底部ヘラ削り 外面 体部下半ナデ 下端ヘラ削り 内面 ナデ	橙濁 善	砂粒含 雲母含		体部～ 底部片 墨書「カ」 体部外面
22	土師器 坏	-×(76)×- 底部回転糸切り後外周ヘラ削り 外面 体部ヘラ削り後一部ヘラ磨き 内面 ヘラ磨き	橙濁 善	砂粒含 雲母含		体部～ 底部片 墨書「口」 底部外面
23	土師器 坏	-×-×- 底部回転糸切り後外周ヘラ削り	橙濁 善	粗砂粒 多含		底部片 線刻「×」 底部内面

24	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 内外面ナデ	掲 普	砂粒含 雲母含	口縁片	器書「国?」 体部外面
25	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 内外面ナデ	掲 普	砂粒含 雲母 微量含	口縁片	鐫刻「田?」 体部外面
26	石器 敲石	長さ90×幅58×厚さ23 重量176.6g 薄手の楯状の礫の上下両端に弱い敲打痕あり 敲石的な用途に使用か?				千枚岩?
27	鉄器 鎌	長軸170×短軸19×厚さ3 重量50.4g 短軸29.5×厚さ3 短軸34×厚さ3				
28	土師器 坏	116×60×38 ロクロ成形 底部回転糸切り後外周ヘラ削り 体部急傾斜で立ち上がる 外面 口縁部-体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面ナデ	暗褐色 普	砂粒含 雲母含	略整形	器書「□」 体部外面 内面スス付着 (破損後に付着)

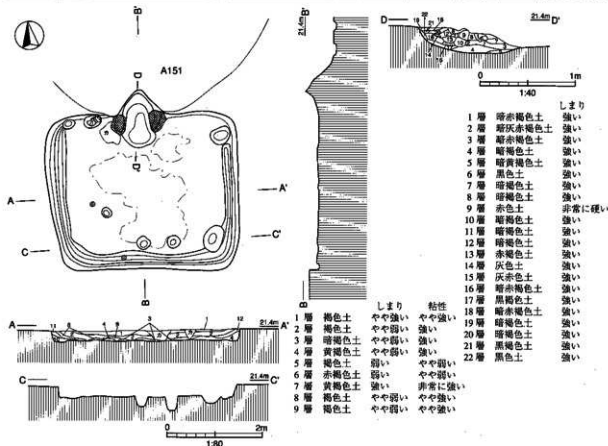


図151 A185

A185

検出地区 F9-27G。台地北側先端部、平坦面に位置する。A151と重複関係にあるが、本住居跡の方が新しい。

遺 構 床はロームを踏み固めた床で住居跡中央部で硬化面を検出。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は約3/4周する。主柱穴は不明である。竈は北壁ほぼ中央で検出された。袖は両袖とも残存し遺存状況は良好である。

覆土は、色調を基本に9層に分層。焼土層を広範囲に検出。人為的な埋戻しが想定される。

遺 物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。

所 見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断される。

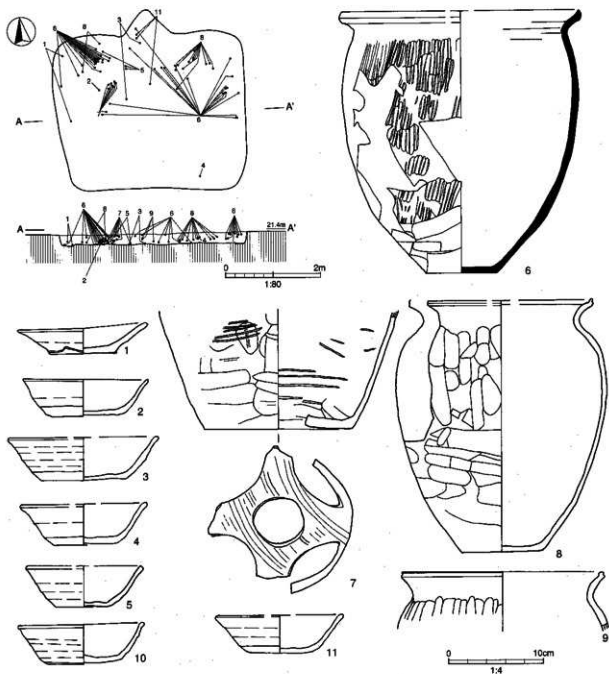


図152 A185(2)

表92 A185遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 皿	137×70×26 ロクロ成形 底部回転糸切り 体部下端未調整	淡褐色	普通	1/2	
2	土師器 杯	133×83×38 ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐色	普通	完形	
3	土師器 杯	—×—×46 ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐色	普通	1/5	

4	土師器 坏	一×64×43 ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐 書	書	底部片	
5	土師器 坏	一×一×一 ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	淡褐 書	件	底部片	
6	須恵器 甕	248×77×277 ロクロ成形 底部静止ヘラ削り 頸部ナデ 胴部タタキ 胴部下端ヘラ削り	灰褐 良	緻密	1/3	
7	土師器 瓶	一×(156)×一 輪積み成形 底部静止糸切り 外面 胴部縦ヘラ削り後下端横ヘラ削り 内面 ヘラ状工具による削痕 輪積み痕	褐 書	書		
8	土師器 甕	192×一×265 最大径86 ロクロ成形 底部回転糸切り 口唇をつまみ上 げる 頸部ナデ 胴上半縦ヘラ削り 下半横ヘラ削り	褐 書	書	1/3	
9	土師器 甕	(210)×一×一 ロクロ成形 口縁ナデ 胴部立てヘラ削り	褐 書			
10	土師器 坏	133×67×41 ロクロ成形 底部回転糸切り 周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	褐 書	書	完形	
11	土師器 坏	一×一×41 ロクロ成形 底部回転糸切り 周辺ヘラ削り 体部下端ヘラ削り	橙褐 書	書	1/4	

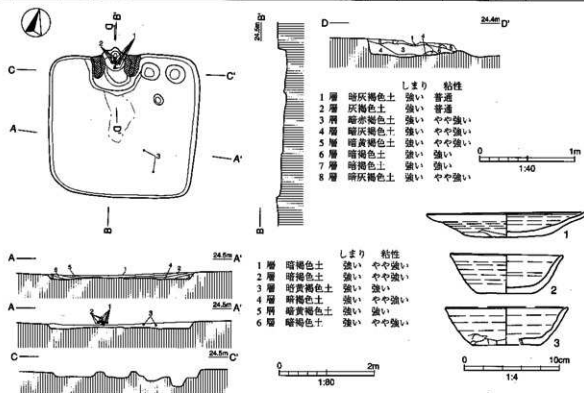


図153 A186

表93 A186遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 皿	170×86×26 ロクロ成形 口縁やや平坦な作り ヘラ削り後ヘラナデか?	明褐色	砂粒 雲母 赤色粒含	略定形	器面磨耗

2	土師器 環	120×60×42 ロクロ成形 口縁やや外反 体部直線的に外傾 外面 口縁～体部下半ナデ 下端へう削り 内面 ナデ	明赤褐色	砂粒 雲母含	略完形
3	土師器 環	(130)×(70)×42 ロクロ成形 口縁外反 外面 口縁～体部下半ナデ 下端へう削り 内面 ナデ	褐色	粗砂粒 多含	1/4

A186

検出地区 H9-36G。台地南側先端部、平坦面に位置する。

遺構 床はロームを踏み固めた床で住居跡中央部で硬化面を部分的に検出。壁もロームの壁であるが、掘り込みが浅く斜めに直線的に立ち上がる。周溝・主柱穴は検出されなかった。竈は北壁ほぼ中央で検出された。袖は両袖とも残存し遺存状況は比較的良好である。

覆土は、色調を基本に6層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて少量出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断される。

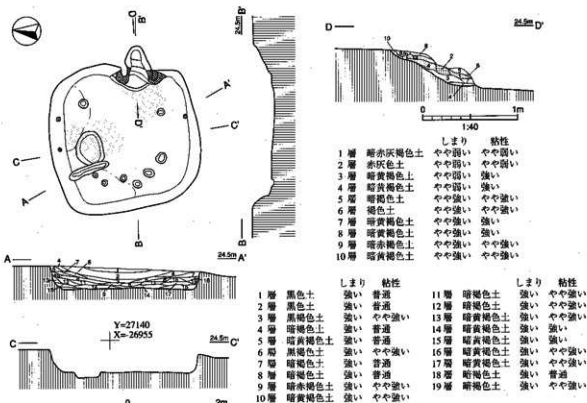


図154 A187

A187

検出地区 H9-46G。台地南側先端部、平坦面に位置する。

遺構 床はロームを踏み固めた床で住居跡中央部で硬化面を部分的に検出。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。周溝は検出されず主柱穴は不明である。竈は東壁ほぼ中央で検出された。袖は両袖とも残存し遺存状況は比較的良好である。煙道部の長いタイプの竈である。

覆土は、色調を基本に19層に分層。焼土層を広範囲に検出。人為的な埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量出土。竈周辺での出土が多い。

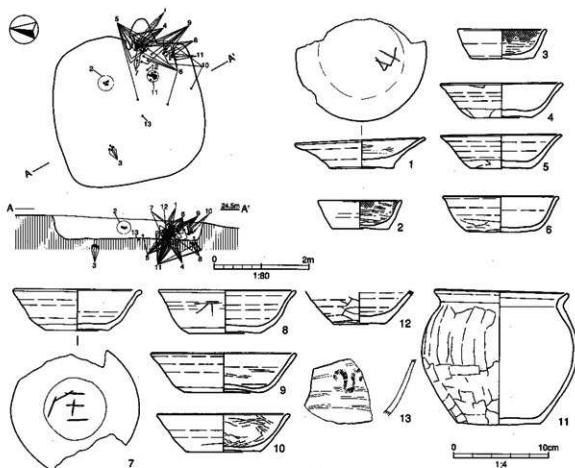


図155 A187(2)

表94 A187遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 澁成	胎土	遺存	備考
1	土師器 皿	138×68×32 ロクロ成形 外面 口径～体部下半ナデ 頸部・体部下端ヘラ削り 内面 ナデ 一部ヘラ磨き	橙褐色	砂粒 雲母含	4/5	線刻「回」 体部内面
2	土師器 坏	88×60×31 ロクロ成形 回転ヘラ削り 底部から体部に向けてやや直線的 外面 口径～体部ナデ 内面 口径～体部ヘラ磨き	明褐色	砂粒含	3/4	口径タール状付 着物 内面スス付着
3	土師器 坏	94×67×32 ロクロ成形 外面 ナデ 底部ヘラ磨き 内面 ヘラ磨き	褐色	砂粒 雲母微含	1/2	口径タール状付 着物 器面剥離多 内外面スス付着
4	土師器 坏	130×64×37 ロクロ成形 回転糸切り後外周ヘラ削り 口径やや外反 外面 口径～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	砂粒 赤色粒含	完形	
5	土師器 坏	128×64×36 ロクロ成形 回転糸切り後外周ヘラ削り 器形やや歪む 口径外反 体部外傾 外面 口径～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	砂粒 赤色粒含	略完形	
6	土師器 坏	122×70×38 ロクロ成形 回転糸切り後外周ヘラ削り 口径やや外反 体部やや直線的に立ち上がる 外面 口径～体部上半ナデ 体部下半ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	砂粒 雲母含	2/3	
7	土師器 坏	136×66×44 ロクロ成形 口径外反 体部外傾 外面 口径～体部下半ナデ 体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	砂粒含	略完形	線刻「回」

8	土師器 坏	145×75×46 ロクロ成形 回転糸切り後外周へラ削り 一部ナデか 外面 口縁～体部下ナデ 体部下端へラ削り 内面 ナデ	橙褐色 良	砂粒 雲母含	4/5	線刻「万」 体部外面
9	土師器 坏	154×82×42 ロクロ成形 回転糸切り後外周へラ削り 体部直線的に 立ち上がる やや上げ底 外面 口縁～体部下ナデ 体部下端へラ削り 内面 ナデ後縁らにへラ磨き	橙褐色 普通	砂粒 雲母含	4/5	
10	土師器 坏	140×(80)×40 ロクロ成形 回転糸切り後外周へラ削り 体部直線的 に立ち上がる 体部と底部の境に稜 外面 口縁～体部下ナデ 体部 下端へラ削り 内面 へラ磨き	褐色 普通	粗砂粒多 雲母含	1/2	
11	土師器 甕	141×88×143 最大径165 口縁やや受け口状 胴やや上部が膨らむ 外面 口縁・胴部ナデ 胴上半縦へラ削り 下半横へラ削り 底部へラ 削り 内面 ナデ	暗茶褐色 暗赤褐色	粗砂粒多 雲母含	完形	
12	土師器 坏	—×54×(35) ロクロ成形 回転へラ切り? 底部小さめ 外面 胴下半ナデ 下端へラ削り 内面 ナデ	暗赤褐色 良	砂粒 雲母含	底部片	
13	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外面 胴下半ナデ 下端へラ削り 縁らにへラ磨き 内面 ナデ後へラ磨き	暗褐色 良	砂粒 雲母含	底部片	墨書「口」 体部外面

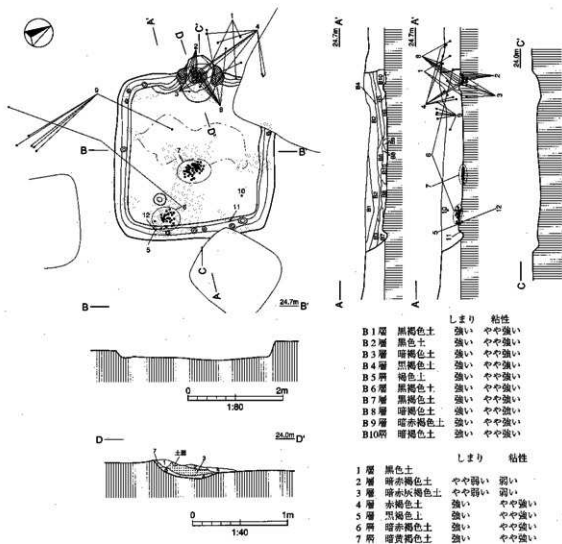


図156 A188

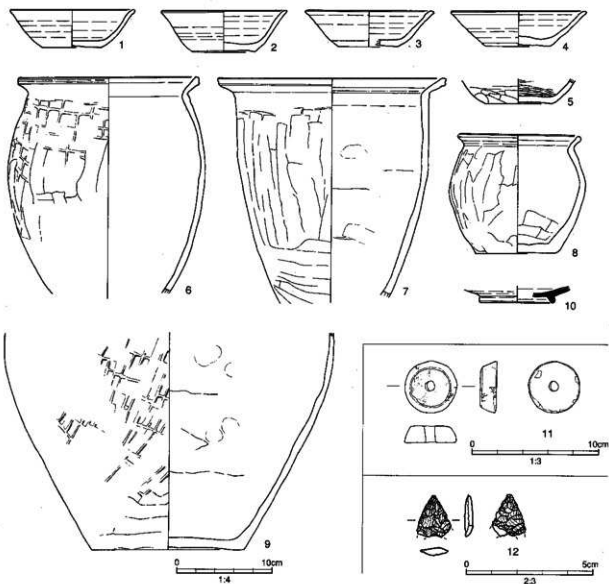


図157 A188(2)

表95 A188遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(132)×(62)×40 ロクロ成形 底部回転糸切り 口径外反 体部下端やや丸みをおびる 内外面ナデ	茶褐色	砂粒含	1/2	
2	土師器 坏	132×68×44 ロクロ成形 底部回転糸切り 口径外反 体部やや直線的に立ち上がる 内外面ナデ	暗赤褐	粗砂粒含	1/2	
3	土師器 坏	136×62×38 ロクロ成形 底部回転糸切り 口径外反 体部外傾 内外面ナデ	暗茶褐～ 暗赤褐 昏	粗砂粒含	4/5	
4	土師器 坏	(144)×70×37 ロクロ成形 底部回転糸切り 口径やや外反 体部外傾 内外面ナデ	暗褐～ 暗赤褐 昏	粗砂粒 多含	1/2	

5	土師器 坏	一×72×(26) ロクロ成形 底部回転糸切り 外面 胴部下半ナデ 下邊ヘラ削り 内面 ヘラ磨き	暗赤褐 良	砂粒含	底部片	
6	土師器 甕	190×一×(230) 口縁外面凹線状に調整 頸部「く」の字状 外面 口縁・頸部ナデ 胴部ヘラ削り後タタキのような痕跡がみられる 内面 ナデ	暗茶褐 普	砂粒含	2/3	
7	土師器 甕	240×一×(241) 口縁外に折れ曲がるように外反(最大径口縁) 口縁外面凹線状調整 外面 胴部ヘラ削り後一部タタキのような痕跡がみられる 内面 口縁ナデ	暗赤褐～ 暗褐 普	砂粒含 雲母含	略定形	内外面スス付着
8	土師器 甕	130×84×128 口縁やや受け口状 頸部「く」の字状 胴やや上半が膨らむ 外面 口縁・頸部ナデ 胴部上半・下半坂ヘラ削り 下端横ヘラ削り 内面 ナデ	茶褐 普	粗砂粒 多含	完形	
9	土師器 甕	一×(160)×(231) 外面 胴部上半タタキ? 下邊ヘラ削り 内面 口縁ナデ 一部指頸庄度	茶褐 普	砂粒含 赤色粒含	胴部～ 底部片	胴部下縁外面と 底部外面 スス付着
10	須恵器 高台付坏	一×高台径(80)×(18) ロクロ成形 底部回転ヘラ削り(中心部不明) 内外面ナデ 高台部下端ヘラ削り	灰白 悪	砂粒含	底部片	
11	石器 紡錘車	上部径31× 底部径41× 孔径8× 厚さ13 平らな円形 断面台形 全体に平滑であるが上面から側面にかけて使用痕跡著				蛇紋岩?
12	石器 石鏃	長さ17×幅13×厚さ3 重量0.6g 二等辺三角形を呈する無茎鏃 側縁はやや外反する 両面の全面に調整 が施される				黒曜石

A188

検出地区 H9-54G。台地南側先端部、平坦面に位置する。A156と重複関係にあるが、本住居跡の方が新しい。

遺構 床はロームを踏み固めた床で住居跡中央部はやや軟弱である。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。周溝はほぼ全周する。主柱穴は不明である。竈は北壁ほぼ中央で検出された。袖は両袖とも残存し、遺存状況は比較的良好である。

覆土は、色調を基本に10層に分層。焼土層を広範囲に検出。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量に出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断される。

A189

検出地区 H9-56G。台地南側先端部、平坦面に位置する。

遺構 床はロームを踏み固めた床で住居跡中央部はやや軟弱である。壁もロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。周溝は検出されず主柱穴は不明である。竈は北壁ほぼ中央で検出された。袖は両袖とも残存し、遺存状況は比較的良好である。

覆土は、色調を基本に14層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上から覆土上層にかけて多量出土。竈周辺での出土が多い。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断される

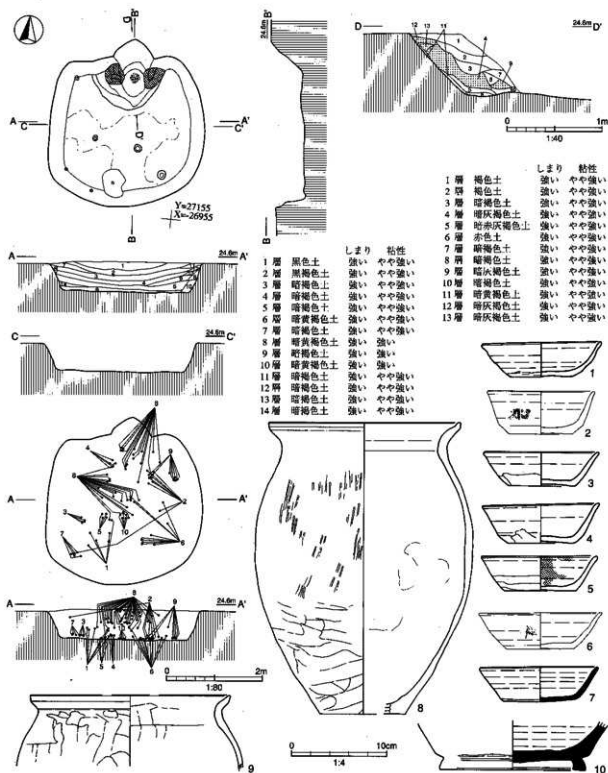


図158 A189

表96 A189遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	126×65×48 外面 口縁～体部下半ナテ 内面 ナテ	ロクロ成形 ヘラ削り 口縁やや外反 下端ヘラ削り	茶褐色	粗砂粒 多含	略完形	

2	土師器 坏	114×66×46 ロクロ成形 回転ヘラ削り 口縁外反 体部直線的に立ち上がる やや深めの坏 外面 口縁～体部下半ナデ 下端ヘラ削り 内面 ナデ	明揚 音	砂粒 褐色粒含	4/5	墨書「皿」 体部外面
3	土師器 坏	122×70×36 ロクロ成形 回転ヘラ削り後外周ヘラ削り 外面 口縁部から体部下端ヘラ削り 内面 ナデ	砂粒褐 砂明揚 音	砂粒 雲母含	完形	器面の剥離多
4	土師器 坏	124×70×42 ロクロ成形 回転ヘラ削り後外周ヘラ削り 体部直線的に立ち上がる やや深めの坏 外面 口縁～体部下半ナデ 下端ヘラ削り 内面 ナデ	明揚 音	砂粒 雲母含	完形	器面の剥離多
5	土師器 坏	124×75×38 ロクロ成形 回転ヘラ削り後外周ヘラ削り 体部直線的に立ち上がる 口縁外反 外面 口縁～体部上半ナデ 下平ヘラ削り 内面 ナデ	揚 音	砂粒 白色粒含	略完形	内面スズ及びク ール上付着物
6	土師器 坏	(130)×70×39 ロクロ成形 回転糸切り後外周ヘラ削り 体部体部中央でやや丸みを帯びる 外面 口縁～体部下半ナデ 下端ヘラ削り 内面 ナデ	砂粒褐 砂明揚 音	砂粒含	3/4	墨書「口」 体部外面 内外面スズ付着
7	須恵器 坏	125×80×37 ロクロ成形 回転ヘラ削り 口縁やや内湾気味 内外面ナデ	灰白 墨	小石 砂粒	完形	
8	土師器 甕	(202)×(90)×310 最大径(230) 口縁縁く外反 頸部立ち上がる 頸部縁く「く」の字状 外面 口縁・頸部横ナデ 胴上半縦ヘラ削り後粗い縦ヘラ磨き 下半横ヘラ磨き 内面 横ナデ 胴部ヘラナデ	明揚 墨	砂粒含	2/3	
9	土師器 甕	(210)××(80) 口縁頸部立ち上がる 頸部「く」の字状 外面 口縁・頸部ナデ 胴上半縦ヘラ削り 内面 ナデ	暗橙褐 音	砂粒含	口縁片	
10	須恵器 高台付甕	一×高台径(130)×(52) ロクロ成形 回転ヘラ削り 胴部下端後をもつ高台部「ハ」の字状 外面 ナデ 内面 底部ヘラ削り	灰茶褐 良	砂粒 小石含	底部片	

表97 奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

(単位m)

遺構番号	検出 調査区	平面形 規模・長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位 置 周溝・備考
A165	G8-23-1	隅丸方形 3.56×3.30×0.24 主軸	底面 ロームを踏み固めた床 盤 ほぼ垂直に立ち上がる	地床炉 1基 カマド 1基 周溝 3/4周する
		覆土中から少量出土	色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される	周溝幅 0.18 主柱穴 不明
A166	F6-79-1	隅丸方形 2.80×2.50×0.59 主軸 N-135°-E	床面 ロームを踏み固めた全体的に硬い床盤 斜めに直線的に立ち上がる	カマド コーナーカマド 周溝 検出されず
		覆土中から少量出土。墨書土器「竹筴」 出土。覆土中に加曽利B少量含む	色調を基本に23層に分層。自然堆積による埋没が想定される	主柱穴 不明
A167	F7-7-2	長丸長方形 3.85×2.98×0.85 主軸 N-8°-E	床面 ロームを踏み固めた全体的に硬い床盤 斜めに直線的に立ち上がる	カマド コーナーカマド 周溝 3/4周する
		覆土下層～上層にかけて少量出土	色調を基本に17層に分層。自然堆積による埋没が想定される	周溝幅 0.40 主柱穴 不明
A168	F7-9-3	隅丸方形 3.49×3.22×0.14 主軸 N-7°-E	床面 ロームを踏み固めた床で住居跡東側で比較的広範囲な硬化面を検出 盤 斜めに直線的に立ち上がる	カマド 北壁ほぼ中央に 位置する 片袖のみ残存 周溝 ほぼ全周する
		床面直上～覆土上層にかけて出土	色調を基本に13層に分層。自然堆積による埋没が想定される	周溝幅 0.18 主柱穴 検出されず

A169	F7-36-4	隅丸方形 3.22×3.02×0.30 主軸 N-39°-W	床面 ロームを踏み固めた床 壁 斜めに直線的に立ち上がる	カマド 北壁は中央に 位置する 周溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて多量出土 覆土上層での出土多い	色調を基本に10層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	
A170	F7-54-1	隅丸方形 2.82×2.80×0.38 主軸 N-6°-E	床面 ロームを踏み固めた全体的に硬い床 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	カマド コーナーカマド 周溝 一部あり 周溝幅 0.17m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に10層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	
A171	F7-54-2	隅丸方形 3.32×2.92×0.44 主軸 N-48°-W	床面 ロームを踏み固めた全体的に硬い床 壁 斜めに直線的に立ち上がる	カマド 北壁は中央に 位置する 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に8層に分層。自然堆積による 埋没が想定される。上層断面にて土壌を検出	
A172	F7-95-1	隅丸方形	床面 A住と重複する部分は黒色土の床。 重複しない部分はロームの床。ロームの床 の一部で硬化面を検出。ロームの床 壁 ならかに立ち上がる	カマド 東壁は中央に 位置する 周溝 一部あり 周溝幅 0.18m 主柱穴 不明
		床面直上から少量出土	色調を基本に5層に分層。自然堆積による 埋没が想定される	
A173	E8-69-1	方形 5.42×5.96× 主軸 N-26°-W	床面 ロームを踏み固めた全体的に硬い床 壁 斜めに直線的に立ち上がる	カマド 北壁は中央に 位置する 周溝 わずかな凹みとして 全周している 主柱穴 4本 溝、上坑と重複
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に22層に分層。焼土が検出さ れ、人為的な堆積が想定される。	
A174	F8-16-3	方形 4.04×3.78× 主軸 N-39°-W	床面 ロームを踏み固めた全体的に硬い床 で、住居中央で硬化面を検出 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	カマド 北壁は中央に 位置する 周溝 3/4二重にめぐる 主柱穴 4本 拡張住居
		床面直上～覆土下層にかけて多量に出 土	色調を基本に8層に分層。人為的な埋戻し が想定される	
A175	F8-16-4	不整形方形 2.72×3.02× 主軸 N-37.5°-W	床面 ロームを踏み固めた床で硬化面が全 面に広がる 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	カマド 北壁は中央に 位置する 周溝 検出されず 主柱穴 2本?
		覆土中から大量に出土	色調を基本に8層に分層。人為的な埋戻し が想定される	
A176	F8-24-3	隅丸方形 4.60×4.44× 主軸 N-37°-W	床面 ロームを踏み固めた床。柱穴の外周 の床がよりしっかりしている 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	カマド 北壁は中央に 位置する 周溝 全周する 周溝幅 0.22m 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出 土	色調を基本に13層に分層。人為的な埋戻し が想定される	
A177	F8-23-2	隅丸方形 3.72×3.92× 主軸 N-38°-W	床面 ロームを踏み固めた床。住居中央で 硬化面を検出 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	カマド 北壁は中央に 位置する 知 住居は中央 周溝 全周する 周溝幅 0.20m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出 土	色調を基本に10層に分層。人為的な埋戻し が想定される	
A178	F8-33-2	隅丸方形 4.90×4.84× 主軸 N-66°-E	床面 ロームを踏み固めた床で全体的に硬 い 壁 斜めに直線的に立ち上がる	カマド 3基あり 周溝 全周する 周溝幅 0.28m 主柱穴 4本
		床面直上～覆土上層にかけて多量に出 土	色調を基本に6層に分層。人為的な埋戻し が想定される	
A179	F8-55-1	隅丸方形 5.24×5.32× 主軸 N-48°-W	床面 ロームを踏み固めた床で全体的に硬 い 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	カマド 北壁は中央に 位置する 周溝 全周する 周溝幅 0.22m 主柱穴 4本
		覆土下層および上層から多量に出土	色調を基本に36層に分層。人為的な埋戻し が想定される	

A180	F8-45-2	隅丸方形 3.08×3.56× 主軸 N-27°-W	床面 ロームを踏み固めた床で、住居中央で硬化面を検出。 壁 斜めに直線的に立ち上がる	カマド 北壁ほぼ中央に位置する 雨溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土層にかけて多量に出土	色調を基本に12層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
A181	F8-46-1	隅丸方形 3.88×3.82× 主軸 N-20°-W	床面 ロームを踏み固めた床で、硬化面を広範囲に検出。 壁 斜めに直線的に立ち上がる	カマド 北壁ほぼ中央に位置する 雨溝 3/4周する 雨溝幅 0.20m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土層にかけて多量に出土	色調を基本に13層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
A182	F9-9-1	方形 3.18×3.10×0.38 主軸 N-32°-W	床面 ロームを踏み固めた床で、中央ややカマドより硬化面を検出。 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	カマド 北壁ほぼ中央に位置する 雨溝 3/4周する 雨溝幅 0.34m 主柱穴 不明
		覆土層を中心に少量出土	色調を基本に14層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
A183	F9-8-4	隅丸方形 3.77×3.24× 主軸 N-55°-E	床面 ロームを踏み固めた床で、中央部に部分的に硬化面を検出。 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	カマド 北壁ほぼ中央に位置する 雨溝 3/4周する 雨溝幅 0.23m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土層にかけて多量に出土	色調を基本に14層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
A184	F9-19-3	隅丸方形 3.90×3.75×0.52 主軸 N-65°-W	床面 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央で硬化面を検出。 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	カマド 北壁ほぼ中央に位置する 雨溝 ほぼ全周する 雨溝幅 0.18m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土層にかけて多量に出土。壁際からの出土は少ない。	色調を基本に18層に分層。人為的な埋戻しによる埋没が想定される	
A185	F9-27-1	隅丸方形 4.00×3.30×0.48 主軸 N-7°-W	床面 ロームを踏み固めた床で、住居中央で硬化面を検出 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	カマド 北壁ほぼ中央に位置する 雨溝 3/4周する 雨溝幅 0.15m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土層にかけて多量に出土	色調を基本に9層に分層。人為的な埋戻しによる堆積が想定される	
A186	H9-36-4	隅丸方形 3.10×3.08×0.18 主軸 N-14°-W	床面 ロームを踏み固めた床で、住居中央で硬化面を部分的に検出 壁 斜めに直線的に立ち上がる。浅い。	カマド 北壁ほぼ中央に位置する 雨溝 検出されず 主柱穴 検出されず
		床面直上～覆土層にかけて少量出土	色調を基本に6層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
A187	H9-46-2	隅丸方形 3.10×3.14×0.50 主軸 N-91°-E	床面 ロームを踏み固めた床で硬化面を部分的に検出 壁 斜めに立ち上がる	カマド 東壁ほぼ中央に位置する 雨溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土層にかけて多量に出土	色調を基本に19層に分層。広範囲に洗土を検出し、人為的な埋没が想定される。	
A188	H9-54-4	隅丸方形 3.50×3.36×0.98 主軸 N-60°-W	床面 ロームを踏み固めた床で、中央部はやや軟弱である 壁 わずかに斜めに立ち上がる	カマド 北壁ほぼ中央に位置する 雨溝 ほぼ全周する 雨溝幅 0.25m 主柱穴 不明
		床面直上～覆土層にかけて多量に出土	色調を基本に10層に分層。人為的な埋没が想定される。	
A189	H9-56-1	隅丸方形 3.16×3.25×0.74 主軸 N-6°-W	床面 ロームを踏み固めた床で、中央部はやや軟弱である 壁 斜めに直線的に立ち上がる	カマド 北壁ほぼ中央に位置する 雨溝 検出されず 主柱穴 不明
		床面直上～覆土層にかけて多量に出土	色調を基本に14層に分層。自然堆積による埋没が想定される	

(2) 掘立柱建物跡

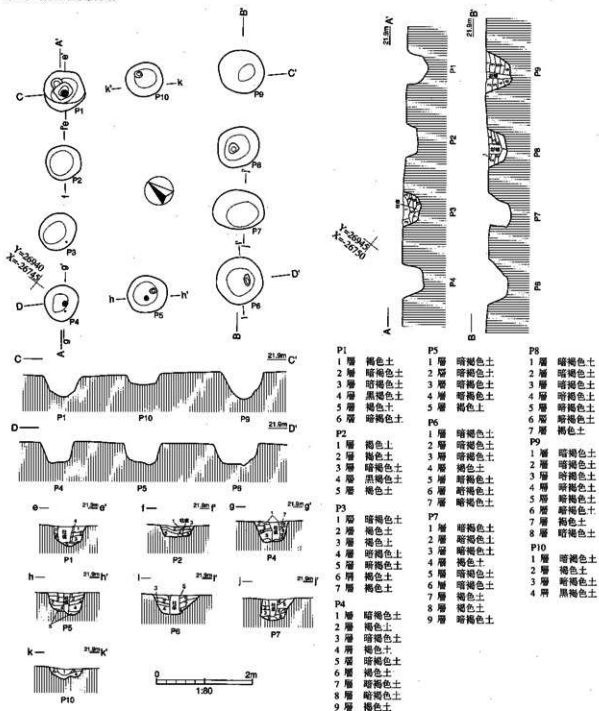


図159 B007

B007

検出地区 F7-45G。台地北側縁辺部、平坦面に立地。

遺構 桁行三間(4.6m)×梁行二間(4.0m)。桁行の主軸方位はN-44°-Eとなる。側柱の掘立柱建物跡である。各柱穴の掘方の形状は不整形でしっかりと掘り込まれていた。柱痕は9カ所(P1～P9)から検出された。

遺物 柱穴掘り方覆土内から小破片が数点出土した。

所見 出土遺物及び規模・形態等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。

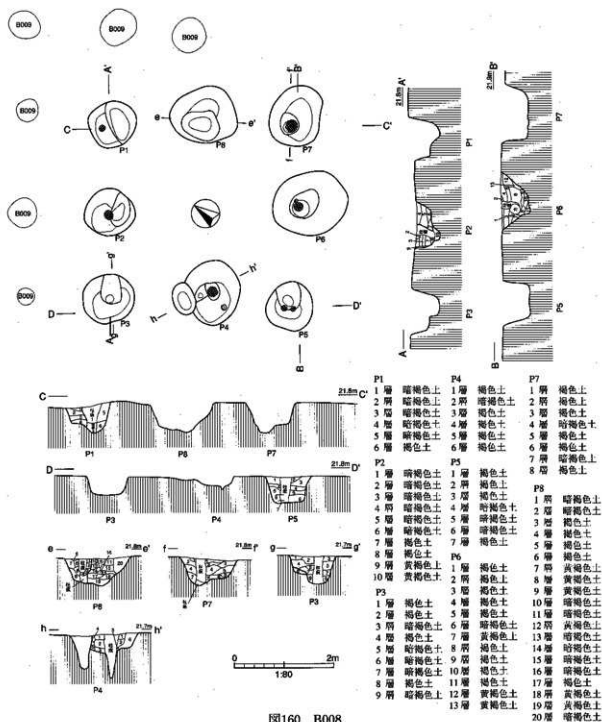


図160 B008

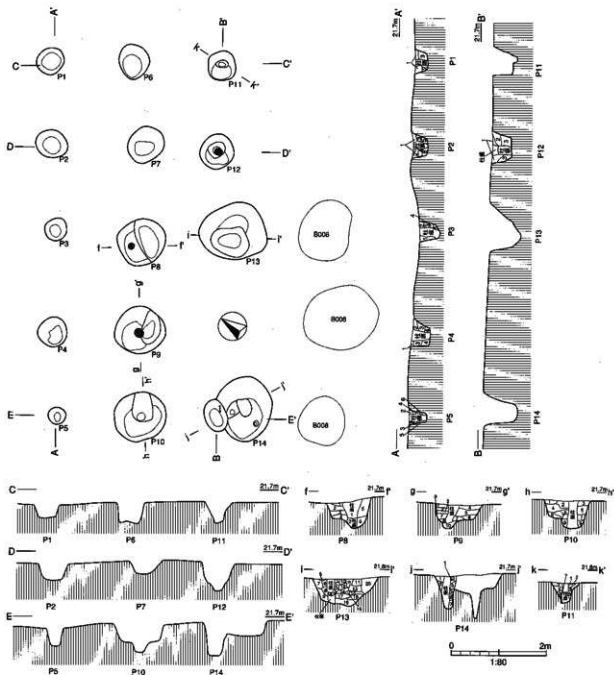
B008

検出地区 F7-54G。台地北側縁部、平坦面に立地。B009と重複関係にある。

遺構 桁行二間(3.83m)×梁行二間(3.84m)。桁行の主軸方位はN-52°-Eとなる。正方形に近い隅柱の掘立柱建物跡である。各柱穴の掘方の形状は不整形でしっかりと掘り込まれていた。すべての柱穴から柱痕が検出された。

遺物 柱穴掘り方覆土内から小破片が数点出土した。

所見 出土遺物及び規模・形態等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。また、柱穴の掘方の状況と土層の観察から立て替えが行われたものと考えられる。



P1
1層 褐色土
2層 暗褐色土
3層 黃褐色土

P2
1層 暗褐色土
2層 褐色土
3層 暗褐色土
4層 暗褐色土
5層 黃褐色土
6層 黃褐色土

P3
1層 黃褐色土
2層 暗褐色土
3層 暗褐色土
4層 褐色土
5層 黃褐色土

P4
1層 黃褐色土
2層 暗褐色土
3層 黃褐色土
4層 黃褐色土

P5
1層 褐色土
2層 暗褐色土
3層 黃褐色土
4層 褐色土
5層 黃褐色土
6層 褐色土

P8
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 暗褐色土
4層 暗褐色土
5層 暗褐色土
6層 褐色土

P9
1層 暗褐色土
2層 暗褐色土
3層 暗褐色土
4層 暗褐色土
5層 暗褐色土
6層 暗褐色土
7層 褐色土
8層 褐色土
9層 黃褐色土
10層 黃褐色土

P10
1層 褐色土
2層 褐色土
3層 暗褐色土
4層 褐色土
5層 暗褐色土
6層 暗褐色土
7層 暗褐色土
8層 褐色土
9層 暗褐色土

P11
1層 黑褐色土
2層 暗赤褐色土
3層 褐色土
4層 黑褐色土
5層 暗黃褐色土
6層 暗黃褐色土
7層 暗黃褐色土

P12
1層 褐色土
2層 褐色土
3層 褐色土

P13
1層 暗褐色土
2層 褐色土
3層 褐色土
4層 黑褐色土
5層 褐色土
6層 褐色土
7層 黃褐色土
8層 黃褐色土
9層 黃褐色土
10層 暗褐色土
11層 暗褐色土
12層 黃褐色土
13層 暗褐色土
14層 暗褐色土
15層 暗褐色土
16層 暗褐色土
17層 褐色土
18層 黃褐色土
19層 黃褐色土
20層 暗褐色土

P14
1層 褐色土
2層 暗褐色土
3層 褐色土
4層 褐色土
5層 褐色土
6層 褐色土
7層 褐色土

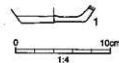


圖161 B009

表98 B009遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	上脚器 環	-X-X- 底部一回転糸切り後周辺ヘラ切り 体部下端一回転ヘラケズリ	褐 砂黒褐 良	密	底部片	内黒?

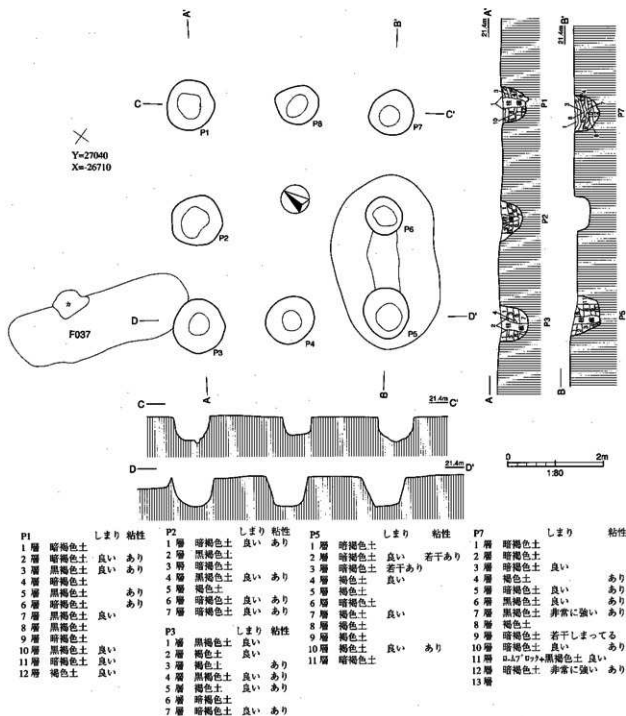


図162 B010

B009

検出地区 F7-54G。台地北側縁辺部、平坦面に立地。B008と重複関係にある。本掘建柱建物跡の方が新しい。

遺構 桁行四間(7.40m)×梁行二間(3.42m)。桁行の主軸方位はN-57°Eとなる。総柱の掘立柱建物跡である。各柱穴の堀方の形状は不整形でしっかりと掘り込まれていた。各柱穴の堀方の規模は栗谷遺跡のなかにおいては、やや小規模である。柱痕は、P1～P5・P8～P14から検出された。

遺物 柱穴掘り方覆土内から小破片が数点出土した。

所見 出土遺物及び規模・形態等から奈良・平安時代の掘建柱建物跡と判断した。

B010

検出地区 F8-42G。台地北側縁辺部、平坦面に立地。F037と重複関係にある。本掘建柱建物跡の方が新しい。

遺構 桁行二間(4.60m)×梁行二間(4.00m)。桁行の主軸方位はN-58°Eとなる。ほぼ正方形の側柱の掘立柱建物跡である。各柱穴の堀方の形状は不整形でしっかりと掘り込まれていた。柱痕はP1～P3・P5から検出された。

遺物 柱穴掘り方覆土内から小破片が数点出土した。

所見 出土遺物及び規模・形態等から奈良・平安時代の掘建柱建物跡と判断した。

B011

検出地区 F8-43G。台地北側縁辺部、平坦面に立地。I016・I017と重複関係にある。

遺構 桁行四間(6.00m)×梁行二間(4.00m)。桁行の主軸方位はN-58°Eとなる。側柱の掘立柱建物跡である。各柱穴の堀方の形状は不整形でしっかりと掘り込まれていた。柱痕はP3～P6から検出された。P2およびP3の一部がI017の一部となる。両者の新旧関係については明らかにし得なかった。またB011の西側にI016展開するが、B011のP6のセクションに切り合いがみられることから、I016の一部がP6と重複し展開すると考えられる。新旧関係についてはP6のセクションからI016の方が新しいと考えられる。

遺物 柱穴掘り方覆土内から小破片が数点出土した。

所見 出土遺物及び規模・形態等から奈良・平安時代の掘建柱建物跡と判断した。

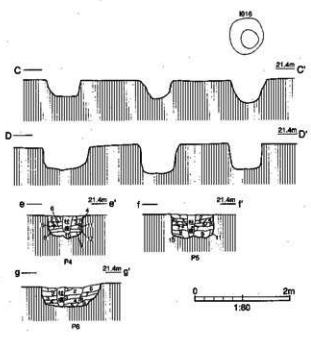
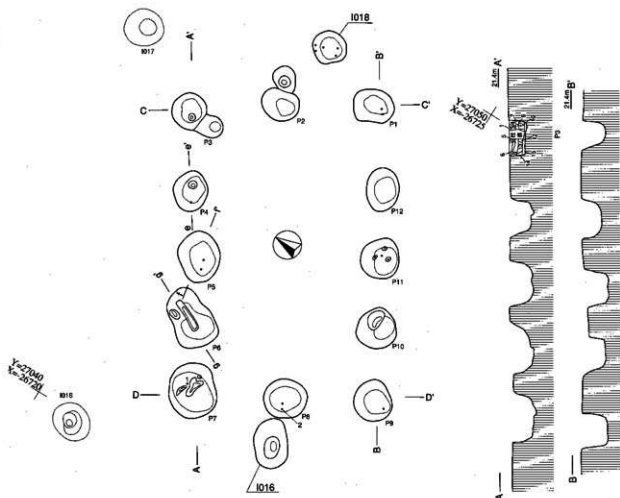


図163 B011

表99 B011遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	{125}×(70)×40 外面 胴下半ナデ 内面 ナデ ロクロ成形 下端へラ削り 頸部・胴下端へラ削り	橙黄	粗砂粒 多含	口縁～ 体部片	
2	須恵器 坏	—×(70)×(22) 外面 胴下半ナデ 内面 ナデ ロクロ成形 胴下端・底部へラ削り	灰褐色	粗砂粒 多含	体部～ 底部片	



P3	しまり	P4	しまり
1層 黄褐色土	やや強い	1層 暗褐色土	やや強い
2層 褐色土	やや強い	2層 暗褐色土	やや強い
3層 暗褐色土	やや強い	3層 暗褐色土	やや強い
4層 黄褐色土	やや強い	4層 黄褐色土	やや強い
5層 黄褐色土	やや強い	5層 暗褐色土	やや弱い
6層 暗褐色土	やや強い	6層 暗褐色土	やや弱い
7層 黄褐色土	やや強い	7層 暗褐色土	やや弱い
8層 暗褐色土	やや強い	8層 暗褐色土	弱い
9層 褐色土	やや強い	9層 暗褐色土	非常に強い
10層 黄褐色土	やや強い	10層 暗褐色土	やや強い
11層 褐色土	やや強い	11層 黄褐色土	やや弱い
12層 褐色土	やや強い	12層 黄褐色土	やや弱い
13層 暗褐色土	やや強い		
14層 黄褐色土	やや強い		
15層 褐色土	非常に強い		
P5	しまり	P6	しまり
1層 暗褐色土	やや弱い	1層 暗褐色土	やや弱い
2層 褐色土	やや強い	2層 暗褐色土	やや強い
3層 暗褐色土	やや強い	3層 黄褐色土	やや弱い
4層 褐色土	やや強い	4層 褐色土	やや弱い
5層 暗褐色土	やや強い	5層 暗褐色土	やや強い
6層 褐色土	やや強い	6層 暗褐色土	やや強い
7層 褐色土	やや強い	7層 褐色土	やや強い
8層 暗褐色土	強い	8層 褐色土	やや強い
9層 褐色土	やや強い	9層 黄褐色土	やや強い
10層 黄褐色土	非常に強い		
11層 黄褐色土	やや強い		

図164 B011(2)

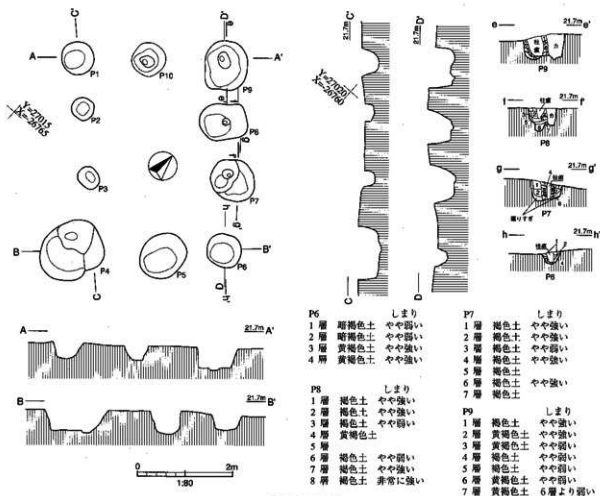


図165 B012

B012

検出地区 F8-18G。台地北側縁部、平坦面に立地。

遺構 桁行三間(4.30m)×梁行二間(2.90m)。桁行の主軸方位はN-42°-Wとなる。側柱の掘立柱建物跡である。各柱穴の堀方の形状は不整形でしっかりと掘り込まれていた。柱痕は、P1・P2・P4～P10で検出された。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 出土遺物及び規模・形態等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。また、堀方の形状、土層の観察から立て替えが行われたものと考えられる。

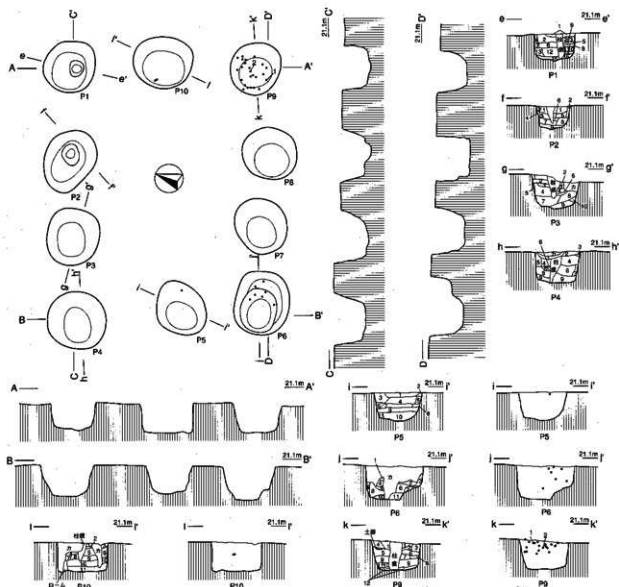
B013

検出地区 F8-64G。台地北側縁部、平坦面に立地。

遺構 桁行三間(5.40m)×梁行二間(3.93m)。桁行の主軸方位はN-72°-Eとなる。側柱の掘立柱建物跡である。各柱穴の堀方の形状は不整形でしっかりと掘り込まれていた。柱痕はP1～P4・P9～P10で検出された。P9からは少量の焼土及び粘土も検出されている。

遺物 柱穴掘り方覆土内から小破片が少量出土した。P9からの出土が比較的多かった。

所見 出土遺物及び規模・形態等から奈良・平安時代の掘立柱建物跡と判断した。



Profile	Layer	Soil Type	Texture	Notes
P1	1層	褐色土	しまり	粘性
	2層	暗褐色土	やや弱い	弱い
	3層	褐色土	やや強い	強い
	4層	黄褐色土	やや弱い	やや強い
	5層	暗褐色土	やや強い	やや強い
	6層	褐色土	やや強い	やや弱い
	7層	褐色土	やや強い	やや弱い
	8層	褐色土	やや強い	やや弱い
	9層	褐色土	やや強い	やや弱い
	10層	褐色土	やや弱い	
	11層	暗褐色土		
	12層	暗褐色土	やや強い	
	13層	褐色土	やや強い	
	14層	暗褐色土	やや弱い	
	15層	黄褐色土	やや強い	
P2	1層	褐色土	しまり	
	2層	黄褐色土	やや強い	
	3層	黄褐色土	やや弱い	
	4層	黄褐色土	2層よりやや弱い	
	5層	暗褐色土	2層とはほぼ同じ	
	6層	暗褐色土	やや強い	
	7層	暗褐色土	やや強い	
	8層	暗褐色土	6層よりさらに弱い	
	9層	暗褐色土	やや強い	
P3	1層	褐色土	しまり	
	2層	暗褐色土	やや強い	
	3層	暗褐色土	やや弱い	
	4層	褐色土	やや強い	
	5層	黄褐色土	やや強い	
	6層	褐色土	弱い	
	7層	褐色土	やや強い	
	8層	黄褐色土	やや弱い	
	9層	褐色土	やや強い	
P4	1層	褐色土	しまり	
	2層	褐色土	やや弱い	
	3層	黄褐色土	強い	
	4層	褐色土	やや弱い	
	5層	黄褐色土	弱い	
	6層	暗褐色土	やや弱い	
	7層	黄褐色土	やや弱い	
	8層	暗褐色土	やや弱い	
	9層	暗褐色土	弱い	
P5	1層	暗褐色土	しまり	
	2層	褐色土	やや強い	
	3層	褐色土	やや弱い	
	4層	暗褐色土	やや強い	
	5層	褐色土	やや弱い	
	6層	褐色土	弱い	
	7層	暗褐色土	やや強い	
	8層	暗褐色土	やや弱い	
	9層	暗褐色土	やや弱い	
	10層	暗褐色土	強い	
	11層	褐色土	やや弱い	
P6	1層	暗褐色土	しまり	
	2層	暗褐色土	弱い	
	3層	黄褐色土	やや強い	
	4層	褐色土	弱い	
	5層	褐色土	非常に弱い	
	6層	暗褐色土	やや弱い	
	7層	黄褐色土	やや強い	
	8層	褐色土	やや強い	
	9層	黄褐色土	やや強い	
	10層	暗褐色土	やや強い	
	11層	暗褐色土	やや弱い	
P9	1層	褐色土	しまり	
	2層	褐色土	やや強い	
	3層	褐色土	弱い	
	4層	褐色土	やや強い	
	5層	褐色土	やや弱い	
	6層	褐色土	やや強い	
	7層	暗褐色土	やや強い	
	8層	暗褐色土	やや弱い	
	9層	暗褐色土	やや弱い	
	10層	暗褐色土	やや強い	
	11層	褐色土	強い	
P10	1層	褐色土	しまり	
	2層	褐色土	やや弱い	
	3層	褐色土	やや強い	
	4層	黄褐色土	強い	
	5層	暗褐色土	やや弱い	
	6層	黄褐色土	やや弱い	
	7層	黄褐色土	やや弱い	
	8層	暗褐色土	やや強い	
	9層	暗褐色土	やや強い	
	10層	暗褐色土	やや強い	
	11層	暗褐色土	強い	

図166 B013

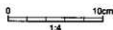
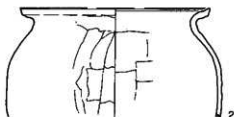


図167 B013(2)

表100 B013遺物観察表

(単位mm)

No	種別	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(112)×70×41 ロクロ成形 回転糸切り後外側ヘラ削り 体部下半にやや膨らみをもつ 内外面ナデ	橙褐色	砂粒 橙色素粒 雲母微含	2/3	墨書「万」 体部外面
2	土師器 甕	(200)×-(116) 口径外反し上端つまみ上げる 外面 口径・頸部ナデ 胴上半へ削り 被熱痕 内面 ナデ	褐色	粗砂粒含	口径 - 胴部片	

表101 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

(単位m)

遺構番号	検出区	間数		柱穴規模 (長軸×短軸×深さ)	備考
		長軸	短軸		
B007	F7-45-2	3×2	N-44°-E	P1 0.85×0.83×0.41 P6 0.99×0.96×0.44 P2 0.74×0.73×0.23 P7 1.00×0.86×0.45 P3 0.79×0.73×0.37 P8 0.91×0.85×0.38 P4 0.74×0.68×0.43 P9 0.89×0.95×0.52 P5 0.82×0.79×0.44 P10 0.76×0.70×0.45	
		4.60	4.00		
B008	F7-54-4	2×2	N-52°-E	P1 0.99×0.94×0.59 P6 1.49×1.37×0.58 P2 0.97×0.98×0.50 P7 1.26×1.04×0.53 P3 1.09×1.00×0.58 P8 1.29×1.29×0.58 P4 1.35×1.14×0.18 P5 0.96×1.00×0.57	
		3.83	3.84		
B009	F7-54-3	4×2	N-57°-E	P1 0.58×0.53×0.26 P8 0.92×0.58×0.58 P2 0.66×0.59×0.33 P9 0.67×0.39×0.38 P3 0.45×0.45×0.41 P10 0.61×0.41×0.58 P4 0.61×0.60×0.38 P11 0.61×0.57×0.41 P5 0.36×0.36×0.36 P12 0.72×0.69×0.57 P6 0.72×0.62×0.43 P13 0.81×0.56×0.64 P7 0.74×0.79×0.58 P14 0.66×0.46×0.69	
		7.40	3.42		
B010	F8-42-1	2×2	N-58°-E	P1 1.07×1.01×0.48 P6 0.78×0.74×0.29 P2 1.09×1.06×0.42 P7 0.95×0.90×0.50 P3 1.09×1.08×0.59 P8 0.87×0.84×0.34 P4 0.95×1.03×0.62 P5 1.03×0.94×0.60	
		4.60	4.00		
B011	F8-43-1	4×2	N-58°-E	P1 0.87×0.74×0.46 P7 1.10×1.10×0.48 P2 0.82×0.63×0.36 P8 0.91×0.81×0.61 P3 0.80×0.74×0.33 P9 0.82×0.84×0.54 P4 0.79×0.73×0.47 P10 0.79×0.83×0.41 P5 0.99×0.85×0.48 P11 0.84×0.80×0.45 P6 1.27×0.81×0.42 P12 0.86×0.70×0.39	
		6.00	4.00		
B012	F8-18-3	3×2	N-42°-W	P1 0.65×0.69×0.35 P6 0.70×0.67×0.23 P2 0.44×0.46×0.19 P7 0.97×0.85×0.49 P3 0.47×0.40×0.24 P8 0.98×0.75×0.51 P4 1.32×1.19×0.48 P9 1.05×0.93×0.43 P5 1.00×0.88×0.46 P10 0.69×0.67×0.28	
		4.30	2.90		
B013	F8-64-1	3×2	N-72°-E	P1 1.06×1.05×0.56 P6 1.34×1.12×0.68 P2 1.33×1.01×0.60 P7 1.18×1.04×0.66 P3 1.19×1.09×0.63 P8 1.10×1.08×0.68 P4 1.20×1.22×0.62 P9 1.11×1.05×0.57 P5 1.07×0.98×0.57 P10 1.19×1.08×0.59	
		5.40	3.93		

(3) 遺構

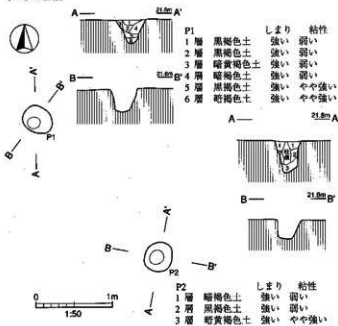


図168 I013

I013

検出地区 F8-5G。台地北側縁辺部、平坦面に立地。近隣の奈良・平安時代の遺構としてA170がある。

遺構 当初別の遺構として調査したが、近接し規模・形態が近似しているため1つの遺構として取り扱った。長軸約40センチの土坑が約2mの間隔で位置し、P2には柱痕が検出された。覆土に関しては掘立柱建物跡の柱穴のセクションに類似する。

遺物 P1・P2とも遺物は出土しなかった。

所見 遺物からの検証を欠くが奈良・平安時代の住居跡に近接していること、P2の形態・規模・土層が掘立柱建物跡に近似し、同様の土坑が近接していることなどから奈良・平安時代の遺構と判断した。

I014

検出地区 F8-51・42G。台地北側先端部、谷頭に面した平坦面に立地。近隣の奈良・平安時代の遺構としてB011がある。

遺構 I013同様、当初別の遺構として調査したが、近接し規模・形態が近似しているため1つの遺構として取り扱った。P1～P4までの土坑が、掘立柱建物跡の柱穴の規模・形態・土層が類似し、直角に近い角度で位置する。

遺物 各土坑覆土中から小破片が少量ずつ出土。P3からは墨書土器片・軽石及び金属品が出土した。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の遺構と判断した。掘立柱建物跡の一部であると考えられる。

表102 I014遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等 の特徵	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 □縁・内外面ナデ	橙褐色	砂粒含	□縁片	墨書「□」 体部外面
2	土師器 坏	-X-X- ロクロ成形 内外面ナデ	褐色	砂粒含	□縁片	墨書「□」 体部外面
3	鉄器 小鎌?	長軸43×短軸13×厚さ2.5 重量5.5g				

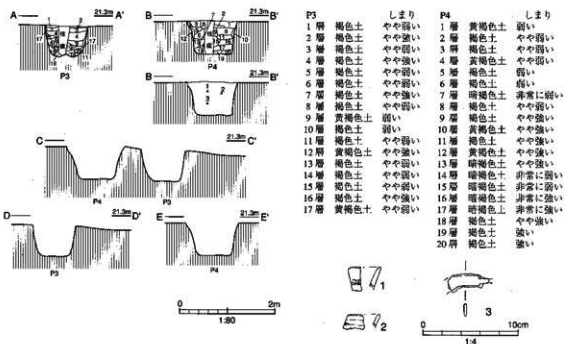
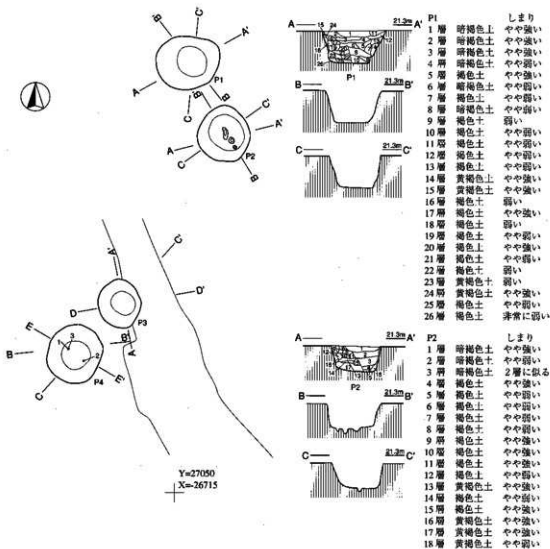
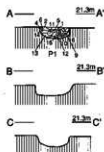
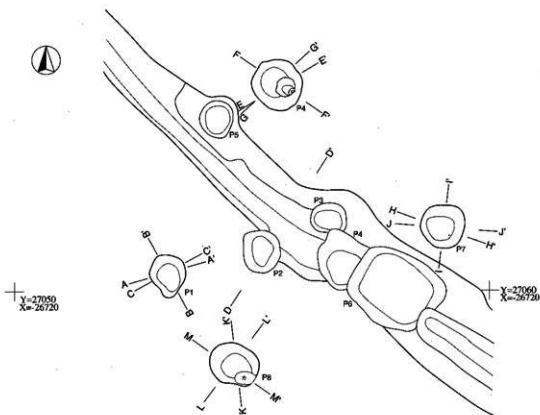
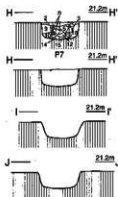


図169 I014



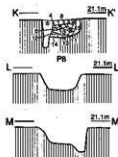
P1	しまり
1層	暗褐色土 やや強い
2層	暗褐色土 やや弱い
3層	褐色土 やや弱い
4層	褐色土 やや弱い
5層	暗褐色土 やや弱い
6層	褐色土 やや弱い
7層	褐色土 やや弱い
8層	褐色土 やや強い
9層	褐色土 やや強い
10層	暗褐色土 やや弱い
11層	褐色土 やや弱い
12層	褐色土 やや弱い
13層	褐色土 やや弱い
14層	黄褐色土 やや強い
15層	黄褐色土 弱い
16層	黄褐色土 やや強い



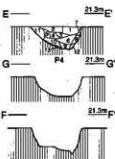
P7	しまり
1層	暗褐色土 やや強い
2層	褐色土 やや強い
3層	黄褐色土 弱い
4層	褐色土 やや弱い
5層	褐色土 やや強い
6層	暗褐色土 やや弱い
7層	暗褐色土 やや強い
8層	褐色土 やや強い
9層	黄褐色土 やや強い
10層	黄褐色土 やや強い
11層	黄褐色土 やや強い
12層	褐色土 やや弱い
13層	暗褐色土 やや強い
14層	褐色土 やや強い
15層	褐色土 やや弱い
16層	黄褐色土 やや強い



P2	しまり
1層	褐色土 強い
2層	褐色土 弱い
3層	褐色土 強い
4層	褐色土 弱い
5層	褐色土 弱い
6層	褐色土 強い
7層	褐色土 弱い



P6	しまり
1層	暗褐色土 強い
2層	黄褐色土 やや強い
3層	褐色土 やや強い
4層	褐色土 やや弱い
5層	暗褐色土 やや強い
6層	褐色土 やや強い
7層	褐色土 やや強い
8層	褐色土 やや強い
9層	褐色土 やや弱い
10層	暗褐色土 やや強い
11層	褐色土 やや弱い
12層	褐色土 やや弱い
13層	褐色土 やや強い
14層	褐色土 非常に強い
15層	黄褐色土 やや強い



P4	しまり
1層	褐色土 強い
2層	褐色土 強い
3層	褐色土 強い
4層	褐色土 やや強い
5層	褐色土 やや強い
6層	褐色土 強い
7層	褐色土 強い
8層	暗褐色土 強い
9層	暗褐色土 やや弱い
10層	暗褐色土 強い
11層	褐色土 やや弱い
12層	褐色土 やや強い
13層	褐色土

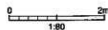


図170 I015

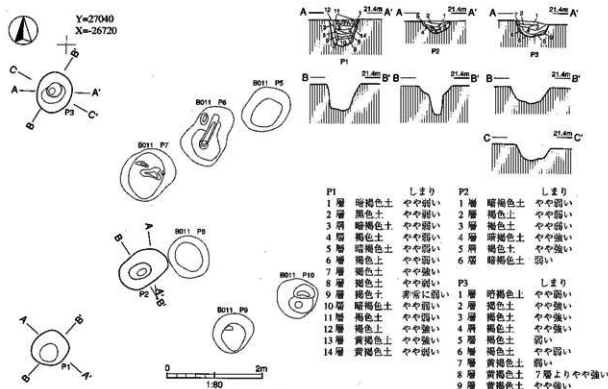


図171 I016

I015

検出地区 F8-52・53G。台地北側先端部、谷頭に面した平坦面に立地。近隣の奈良・平安時代の遺構としてB010・I014がある。

遺構 I013・I014同様、当初別の遺構として調査したが、近接し規模・形態が近似しているため1つの遺構として取り扱った。P1～P8までの土坑が、掘立柱建物跡の柱穴の規模・形態・土層が類似し、それぞれが直角或いは平行に近い関係で位置する。まず、P1～P5が掘立柱建物跡の一部と考えられ、また、P4・P6・P7も掘立柱建物跡の一部と考えられる。さらにP8も周辺土坑と掘立柱建物跡の一部になる可能性がある。

遺物 P7から縄文土器の細片が1点出土したのみで、他からの出土遺物は無かった。

所見 各土坑の規模・形態・覆土の観察及び全体の配置から奈良・平安時代の掘立柱建物跡の一部と判断した。また、2～3棟の掘立柱建物跡が存在したと考えられる。

I016

検出地区 F8-33・43G。台地北側先端部、谷頭に面した平坦面に立地。隣接する奈良・平安時代の遺構として掘立柱建物跡B011がある。

遺構 I013同様、当初別の遺構として調査したが、近接し規模・形態が近似しているため1つの遺構として取り扱った。P1～P3までの土坑が、掘立柱建物跡の柱穴の規模・形態が類似し、直角或いは平行に近い角度で位置する。また、B011のP6が土坑の重複のセクションが見られることから、B011のP6もI016の一部と考えられる。

遺物 遺物は出土していない。

所見 各土坑の規模・形態・覆土の観察及び全体の配置から奈良・平安時代の遺構と判断した。掘立柱建物跡の一部であると考えられる。

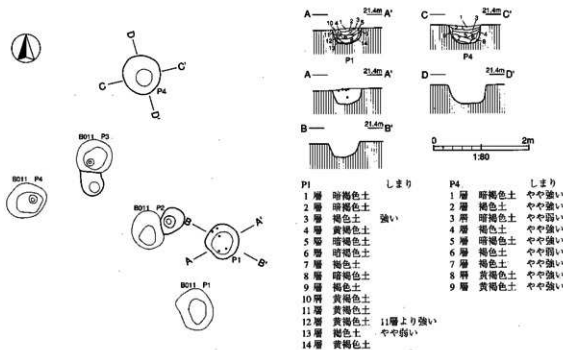


図172 I017

I017

検出地区 F8-42・43G。台地北側先端部、谷頭に面した平坦面に立地。隣接する奈良・平安時代の遺構として掘立柱建物跡B011がある。

遺構 I013同様、当初別の遺構として調査したが、近接し規模・形態が近似しているため1つの遺構として取り扱った。P1～P4のまでの土坑が、掘立柱建物跡の柱穴の規模・形態が類似し、直角或いは平行に近い角度で位置する。

遺物 P1から小破片が数点出土したのみで、その他の土坑からは出土していない。

所見 各土坑の規模・形態・覆土の観察及び全体の配置から奈良・平安時代の遺構と判断した。掘立柱建物跡の一部であると考えられる。

I018

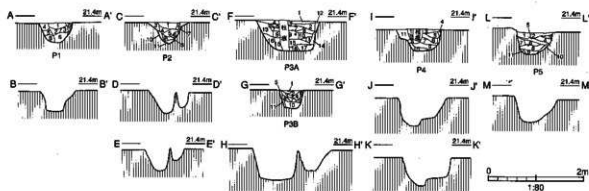
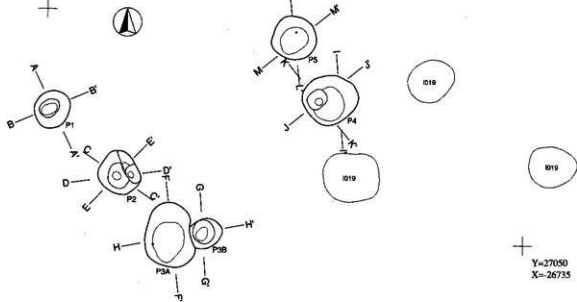
検出地区 F8-34G。台地北側先端部、平坦面に立地。隣接する奈良・平安時代の遺構としてA176およびI019がある。

遺構 I013同様、当初別の遺構として調査したが、近接し規模・形態等が近似し、隣接しているため1つの遺構として取り扱った。P1～P5のまでの土坑が、掘立柱建物跡の柱穴の規模・形態が類似し、直角或いは平行に近い角度で位置する。土層断面からの観察を欠くがP2・P3・P4は平面形態から掘り返された状況が判断される。

遺物 P3Aから須恵器の小片が1点出土し、P5から小破片が1点出土したのみで、その他の土坑からは出土していない。

所見 各土坑の規模・形態・覆土の観察及び全体の配置から奈良・平安時代の遺構と判断した。掘立柱建物跡の一部であると考えられる。P2・P3・P4の状況から立て替えが行われたと考えられる。

Y=27035
X=26730



P1			P2			P3A			P3B		
1層	暗褐色土	しまり	1層	暗褐色土	やや弱い	1層	褐色土	やや弱い	1層	褐色土	やや弱い
2層	暗褐色土	1層と同程度	2層	褐色土	やや強い	2層	褐色土	やや弱い	2層	暗褐色土	やや強い
3層	褐色土	やや強い	3層	褐色土	やや強い	3層	褐色土	やや強い	3層	褐色土	やや弱い
4層	褐色土	やや弱い	4層	褐色土	やや強い	4層	褐色土	やや弱い	4層	暗褐色土	やや強い
5層	暗褐色土	4層より弱い	5層	暗褐色土	やや強い	5層	褐色土	4層に似る	5層	褐色土	やや弱い
6層	暗褐色土	やや強い	6層	褐色土	やや強い	6層	褐色土	やや強い	6層	暗褐色土	やや強い
7層	黄褐色土	非常に弱い	7層	褐色土	弱い	7層	暗褐色土	非常に弱い	7層	暗褐色土	やや弱い
8層	黄褐色土	やや弱い	8層	暗褐色土	非常に強い	8層	暗褐色土	非常に強い	8層	褐色土	弱い
			9層	褐色土	8・9層に似る	9層	褐色土	やや弱い	9層	褐色土	やや弱い
			10層	褐色土	やや強い	10層	褐色土	やや強い	10層	暗褐色土	やや強い
			11層	暗褐色土	8・9層より弱い	11層	褐色土	10層に似る	11層	褐色土	非常に強い
P5			P4			しまり					
1層	暗褐色土	やや弱い	1層	褐色土	弱い						
2層	褐色土	やや弱い	2層	褐色土	弱い						
3層	褐色土	弱い	3層	褐色土	やや強い						
4層	褐色土	やや強い	4層	褐色土	弱い						
5層	褐色土	1~4に比べ強い	5層	暗褐色土	弱い						
6層	褐色土	5層に比べやや弱い	6層	褐色土	やや強い						
7層	褐色土	やや弱い	7層	褐色土	やや弱い						
8層	暗褐色土	やや強い	8層	褐色土	やや弱い						
9層	暗褐色土	非常に強い	9層	褐色土	やや強い						
10層	黄褐色土	弱い	10層	褐色土	やや弱い						
11層	褐色土	弱い	11層	黄褐色土	やや強い						

図173 I018

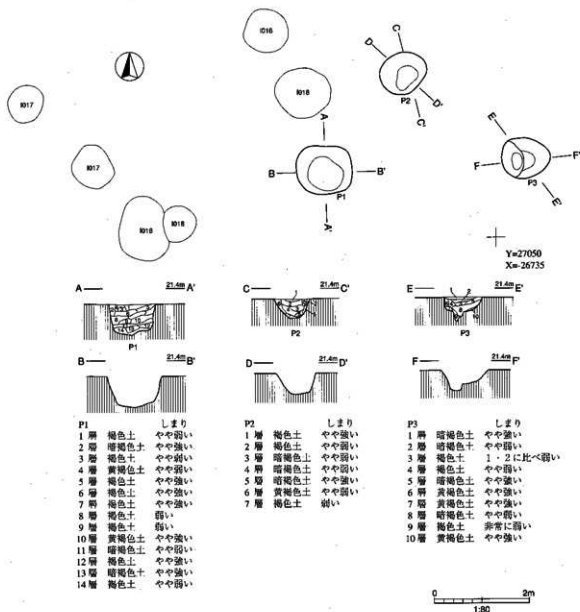


図174 I019

I019

検出地区 F8-44G。台地北側先端部、平坦面に立地。隣接する奈良・平安時代の遺構としてA178およびI018がある。

遺構 I013同様、当初別の遺構として調査したが近接し規模・形態等が近似し、隣接しているため1つの遺構として取り扱った。P1～P3までの土坑が掘立柱建物跡の柱穴の規模・形態が類似し、直角或いは平行に近い角度で位置する。

遺物 遺物は出土していない。

所見 各土坑の規模・形態・覆土の観察及び全体の配置から奈良・平安時代の遺構と判断した。掘立柱建物跡の一部であると考えられる。

表103 奈良・平安時代 遺構一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
I013 P1	F8-5-1	不整形 0.42×0.48×0.42 主軸 N-50°-E	色調を基本に6層に分層。 掘立柱建物跡の柱穴のセクションに類似	
		ロームの底部でほぼ平坦 急傾斜で立ち上がる	出土遺物なし	
I013 P2	F8-5-1	楕円形 0.34×0.42×0.32 主軸 N-50°-W	色調を基本に3層に分層。 人為的な埋戻しが想定される	
		底面はせまく丸底で斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
I014 P1	F8-51-2	不整形 1.20×1.30×- 主軸 N-41°-W	色調を基本に26層に分層。 人為的な埋戻しが想定される	
		ロームの底部でほぼ平坦 急傾斜で立ち上がる	覆土中から小破片1点出土	
I014 P2	F8-51-2	不整形 1.14×1.10×- 主軸 N-32°-W	色調を基本に18層に分層。人為的な埋戻し の後、さらに繰り返したことが想定される	
		ロームの底部でほぼ平坦 底部に小穴 を3基検出する 急傾斜で立ち上がる	覆土中から小破片1点出土	
I014 P3	F8-42-3	不整形 0.92×0.74×- 主軸 N-60°-W	色調を基本に17層に分層。 掘立柱建物跡の柱穴のセクションに類似	
		ロームの底部でほぼ平坦 急傾斜で立ち上がる	覆土中から小破片少量出土 墨書土器1点出土	
I014 P4	F8-42-1	楕円形 1.24×1.10×- 主軸 N-19°-E	色調を基本に20層に分層。 掘立柱建物跡の柱穴のセクションに類似	
		ロームの底部でほぼ平坦 急傾斜で立ち上がる	覆土中から小破片3点出土	
I015 P1	F8-53-1	不整形 0.82×0.96×- 主軸 N-35°-W	色調を基本に16層に分層。 人為的な埋戻しが想定される	
		ロームの底部でほぼ平坦 急傾斜で立ち上がる	出土遺物なし	
I015 P2	F8-52-4	楕円形 0.46×0.38×0.56 主軸 N-4°-W	色調を基本に7層に分層。 掘立柱建物跡の柱穴のセクションに類似	
		ロームの底部でほぼ平坦 斜めに直線的に立ち上がる	出土遺物なし	
I015 P3	F8-52-4	楕円形 0.36×0.30×- 主軸 N-88°-W	出土遺物なし	
I015 P4	F8-52-4	不整形 1.06×1.01×- 主軸 N-55°-W	色調を基本に13層に分層。 人為的な埋戻しが想定される	
		ロームの底部でほぼ平坦 底部に小穴 を1基検出 斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
I015 P5	F8-52-2	楕円形 0.39×0.35×- 主軸 N-2°-W	出土遺物なし	
I015 P6	F8-52-4	不整形	出土遺物なし	

I015 P7	F8-52-4	不整形 0.46×0.45×0.35 主軸 N-88°-W	色調を基本に16層に分層。人為的な埋戻しが考えられ、さらに何度かの掘り返しが想定される	
		ロームの底部ではほぼ平坦 底部で小穴を1基検出 急傾斜で立ち上がる	覆土上層で小破片1点出土	
I015 P8	F8-53-1	不整形 1.06×0.88× 主軸 N-50°-W	色調を基本に15層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
		ロームの底部ではほぼ平坦 急傾斜で立ち上がる	出土遺物なし	
I016 P1	F8-33-4	不整形 0.74×0.74× 主軸 N-17°-E	色調を基本に14層に分層。人為的な埋戻しが想定される	B011に隣接
		ロームの底部ではほぼ平坦 急傾斜で立ち上がる	出土遺物なし	
I016 P2	F8-43-1	楕円形 -×-×- 主軸 -	色調を基本に6層に分層。人為的な埋戻しが想定される	B011に隣接
		ロームの底部でせまいがほぼ平坦 ほぼ垂直に立ち上がり、漏斗状に広がる	出土遺物なし	
I016 P3	F8-33-3	楕円形 0.86×0.72× 主軸 N-7°-E	色調を基本に9層に分層。人為的な埋戻しが想定される	B011に隣接
		ロームの底部で若干丸みをもたない小穴を1基検出 斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
I017 P1	F8-43-3	不整形 0.68×0.68×0.28 主軸 N-27°-E	色調を基本に14層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
		ロームの底部ではほぼ平坦 急傾斜で立ち上がる	覆土中に小破片が数点出土	
I017 P2	F8-43-3	不整形楕円形 0.26×0.21× 主軸 N-44°-E		当初B011の一部として調査
		ロームの底部でせまい 斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
I017 P3	F8-42-4	楕円形 -×-×- 主軸 -		当初B011の一部として調査
		ロームの底部ではほぼ平坦 斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
I017 P4	F8-42-4	不整形円形 0.82×0.78× 主軸 N-5°-W	色調を基本に9層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
		ロームの底部ではほぼ平坦 急傾斜で立ち上がる	出土遺物なし	
I018 P1	F8-34-1	不整形円形 0.78×0.76× 主軸 N-61°-E	色調を基本に8層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
		ロームの底部ではほぼ平坦 ほぼ垂直に立ち上がり、漏斗状に広がる	出土遺物なし	
I018 P2	F8-34-3	不整形 0.88×0.82× 主軸 N-56°-W	色調を基本に11層に分層。人為的な埋戻しが想定される	2基の土坑の重複と考えられる
		2カ所の掘り込みがあり、それぞれ底部は丸みをもったロームの底部で斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
I018 P3A	F8-34-3	不整形 1.34×0.94× 主軸 N-3°-E	色調を基本に18層に分層。掘立柱建物跡の柱穴のセクションに類似	
		ロームの底部ではほぼ平坦 急傾斜で立ち上がる	覆土中から須恵器小破片1点出土	

I018 P3B	F8-34-3	円形 0.78×0.72×－ 主軸 N-32°-E	色調を基本に11層に分層。 人為的な埋戻しが想定される	P3Aと重複
		ロームの底部でほぼ平坦 斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
I018 P4	F8-34-3	不整形円形 1.16×1.08×－ 主軸 N-83°-W	色調を基本に11層に分層。 掘立柱建物跡の柱穴のセクションに類似	
		ロームの底部でほぼ平坦 底部の小穴 を1基検出 斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
I018 P5	F8-34-3	不整形 0.94×0.96×－ 主軸 N-71°-E	色調を基本に11層に分層。 人為的な埋戻しが想定される	
		ロームの底部で概ね平坦 斜めに立ち上がる	覆土中から小破片が1点出土	
I019 P1	F8-44-1	不整形 1.26×1.14×－ 主軸 N-58°-W	色調を基本に14層に分層。 人為的な埋戻しが想定される	
		ロームの底で若干の凹凸はあるものの 概ね平坦である 急傾斜で立ち上がる	出土遺物なし	
I019 P2	F8-44-1	不整形 0.92×0.92×－ 主軸 N-11°-E	色調を基本に7層に分層。 人為的な埋戻しが想定される	
		ロームの底部でほぼ平坦 斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
I019 P3	F8-44-1	不整形 1.00×0.84×－ 主軸 N-83°-E	色調を基本に10層に分層。 人為的な埋戻しが想定される	
		ロームの底部でほぼ平坦 小穴を1基 検出 ゆるやかに立ち上がる	出土遺物なし	

(4) 土坑

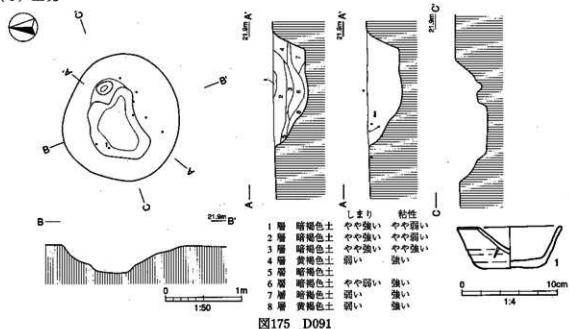


図175 D091

表104 D091遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等 の特徵	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	-×60×(44) 底部一回転糸切り後ヘラ切り 体部下端一回転ヘラケズリ	褐色 良	緻密	2/3	墨書 体部外面 □

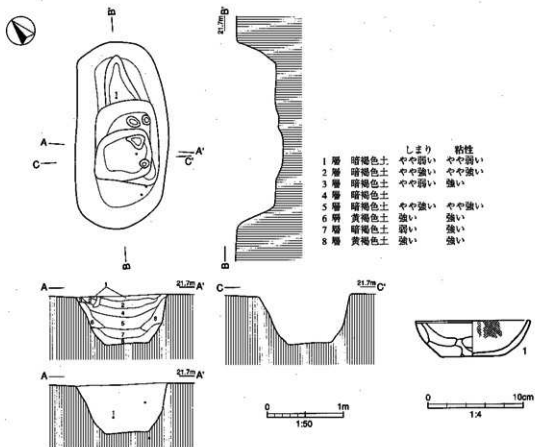


図176 D092

表105 D092遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調 差 等 の 特 徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 環	—×—×37 底部—ヘラ切り 体部外面—ヘラケズリ 内面 丁寧なミガキを施し、タール付着。灯明皿として使用か	㊦馬 ㊦黒褐 良	緻密	1/2	

D091

検出地区 F7-55G。台地北側縁辺部、平坦面に立地する。奈良・平安時代の周辺の遺構としてB007・D094がある。

遺構 不整形の土坑で、底部はロームの底部でほぼ平坦。壁はロームの壁で緩やかに立ち上がる。

覆土は色調を基本に8層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土上層から少量出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

D092

検出地区 F7-56G。台地北側縁辺部、平坦面に立地する。奈良・平安時代の周辺の遺構としてD091・D094がある。

遺構 楕円形の土坑で、底部はロームの底部で若干の凹凸はあるものの、ほぼ平坦。壁はロームの壁で斜めに立ち上がる。

覆土は色調を基本に8層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小片5量出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

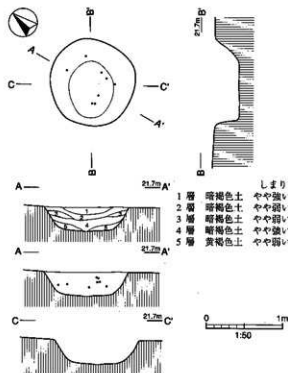


図177 D093

D093

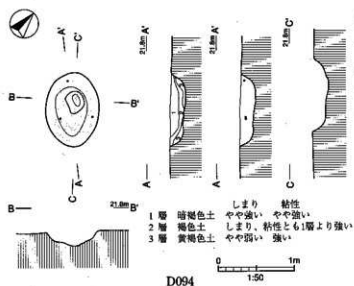
検出地区 F7-19G。台地北側縁辺部、平坦面に立地する。奈良・平安時代の周辺の遺構としてA168がある。

遺構 円形の土坑で、底部はロームの底部でほぼ平坦。壁はロームの壁で緩やかに立ち上がる。

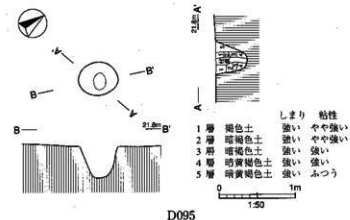
覆土は色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中層～上層にかけて少量出土。

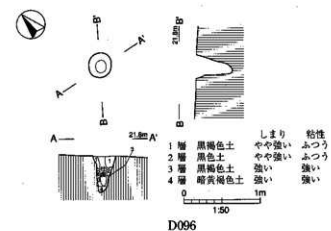
所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。



D094



D095



D096

図178 D094・D095・D096

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。若干の距離はあるが、掘立柱建物跡の周辺に立地している状況、土坑の規模・形態などがD095と強い関連性を感じる。また、D095とセットで考えるならば、I013とも強い類似性がある。

D094

検出地区 F7-56G。台地北側縁辺部、平坦面に立地する。奈良・平安時代の周辺の遺構としてD091・D092がある。

遺構 楕円形の土坑で、底部はロームの底部でほぼ平坦。壁はロームの壁でゆるやかに立ち上がる。

覆土は色調を基本に3層に分層。確認面で微量の焼土を検出しているが、概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小片3点出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

D095

検出地区 F7-64G。台地北側縁辺部、平坦面に立地する。奈良・平安時代の周辺の遺構としてB008・B009・D096がある。

遺構 楕円形の土坑で、底部はロームの底部でほぼ平坦。壁はロームの壁で急傾斜で立ち上がる。

覆土は色調を基本に5層に分層。掘立柱建物跡のセクションに類似。

遺物 覆土中から小破片1点出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

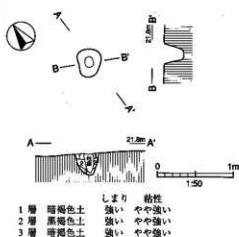
D096

検出地区 F7-65G。台地北側縁辺部、平坦面に立地する。奈良・平安時代の周辺の遺構としてD095と同様B008・B009がある。

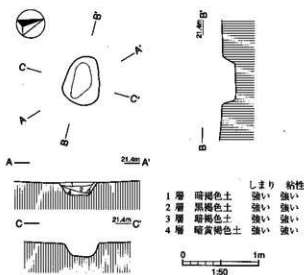
遺構 円形の土坑で、底部はロームの底部で尖底。壁はロームの壁で急傾斜で立ち上がる。

覆土は色調を基本に4層に分層。掘立柱建物跡のセクションに類似。

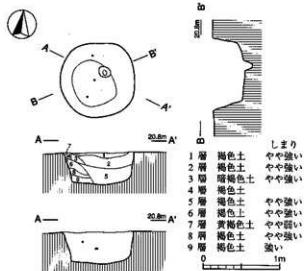
遺物 遺物は出土していない。



D097



D098



D099

図179 D097・D098・D099

D097

検出地区 F7-92G。台地北側縁辺部、平坦面に立地し、他の奈良・平安時代の遺構から離れて孤立して立地する。

遺構 楕円形の土坑で、底部はロームの底部で尖底。壁はロームの壁で急傾斜で立ち上がる。

覆土は色調を基本に3層に分層。掘立柱建物跡のセクションに類似。

遺物 遺物は出土していない。

所見 土坑の規模・形態及び覆土の観察から奈良・平安時代の土坑と判断した。

D098

検出地区 E8-80G。台地北側先端部、谷頭に面した平坦面に立地し、他の奈良・平安時代の遺構から離れて孤立して立地する。

遺構 楕円形の土坑で、底部はロームの底部でほぼ平坦。壁はロームの壁で急傾斜で立ち上がる。

覆土は色調を基本に4層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が2点出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

D099

検出地区 F8-63G。台地北側先端部、谷頭に面した平坦面に立地し、周辺の奈良・平安時代の遺構としてB013がある。

遺構 不整形の土坑で、底部はロームの底部でほぼ平坦。小穴を1基検出している。壁はロームの壁で急傾斜で立ち上がる。

覆土は色調を基本に9層に分層。数回にわたる掘り返しが認められる。

遺物 覆土中から小破片が4点出土している。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

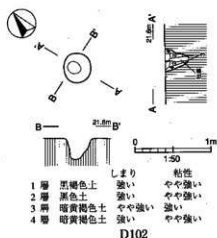
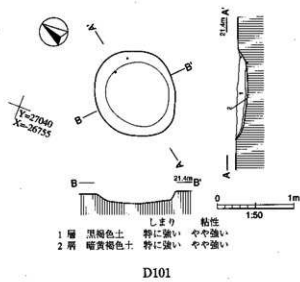
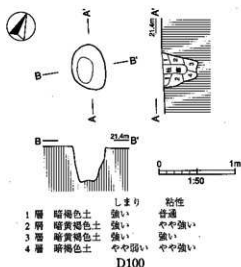


図180 D100・D101・D102

D100

検出地区 F8-27G。台地北側先端部、平坦面に立地し、周辺の奈良・平安時代の遺構としてB012・A127がある。

遺構 不整楕円形の土坑で、底部はロームの底部ではほぼ平坦。壁はロームの壁で急傾斜で立ち上がる。

覆土は色調を基本に4層に分層。掘立柱建物跡のセクションに類似。

遺物 遺物は出土していない。

所見 土坑の規模・形態及び覆土の観察から奈良・平安時代の土坑と判断した。

D101

検出地区 F8-46G。台地北側先端部、平坦面に立地し、周辺の奈良・平安時代の遺構としてA181がある。

遺構 不整形の浅い皿状の土坑である。底部はロームの底部ではほぼ平坦。なだらかに立ち上がる。

覆土は色調を基本に2層に分層。覆土中に多量の炭化物を検出。人為的堆積が想定される。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

D102

検出地区 F8-24G。台地北側先端部、平坦面に立地し、周辺の奈良・平安時代の遺構としてA176がある。

遺構 不整形の土坑である。底部はロームの底部ではほぼ平坦。急傾斜で立ち上がる。

覆土は色調を基本に4層に分層。掘立柱建物跡のセクションに類似。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 土坑の規模・形態及び覆土の観察から奈良・平安時代の土坑と判断した。

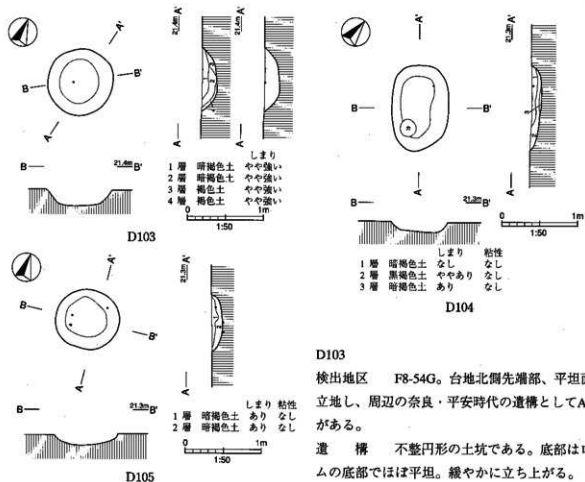


図181 D103・D104・D105

遺物 覆土中から小破片が1点出土。
 所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

D104

検出地区 G8-71G。台地北側先端部、平坦面に立地し、他の奈良・平安時代の遺構から離れて孤立した立地する。

遺構 楕円形の浅い凹状の土坑である。底部はロームの底部でほぼ平坦。緩やかに立ち上がる。
 覆土は色調を基本に3層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が1点出土。
 所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

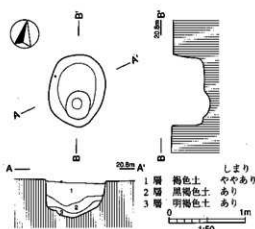
D105

検出地区 F8-55G。台地北側先端部、平坦面に立地し、周辺の奈良・平安時代の遺構としてD106・D107がある。

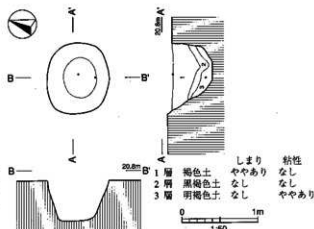
遺構 不整形の浅い凹状の土坑である。底部はロームの底部で若干の丸みを持つもの、ほぼ平坦。緩やかに立ち上がる。

覆土は色調を基本に2層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

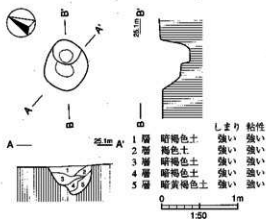
遺物 覆土中から小破片が少量出土。
 所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。



D106



D107



D108

D106

検出地区 F8-65G。台地北側先端部、平坦面に立地し、周辺の奈良・平安時代の遺構としてD105・D107がある。

遺構 楕円形の土坑である。底部はロームの底部でほぼ平坦。底面に小穴を1基検出。壁はロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は色調を基本に3層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が1点出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

図182 D106・D107・D108

D107

検出地区 F8-65G。台地北側先端部、平坦面に立地し、周辺の奈良・平安時代の遺構としてD106がある。

遺構 楕円形の土坑である。底部はロームの底部でほぼ平坦。壁はロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。

覆土は色調を基本に3層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

D108

検出地区 H9-82G。台地南側縁辺部、平坦面に立地し、他の奈良・平安時代の遺構から離れて孤立した立地する。

遺構 楕円形の土坑である。底部はロームの底部で一段テラスをもち、丸底である。壁はロームの壁で斜めに直線的に立ち上がる。

覆土は色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から小破片が1点出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。

表106 奈良・平安時代 土坑一覧表

(単位m)

遺構番号	検山調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
D091	F7-55-2	不整形 1.70×1.50×1.50 主軸 N-94°-E	色調を基本に8層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		ロームの底面ではほぼ平坦ゆるやかに立ち上がる	覆土上層から少量出土	
D092	F7-56-3	楕円形 2.50×1.20×0.60 主軸 N-45°-E	色調を基本に8層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		ロームの底面ではほぼ平坦斜めに立ち上がる	覆土中から小片5点出土	
D093	F7-19-3	円形 1.15×1.10×0.30 主軸 N-47°-E	色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		ロームの底面ではほぼ平坦ゆるやかに立ち上がる	覆土中層～上層にかけて少量出土	
D094	F7-56-1	楕円形 1.00×0.70×0.20 主軸 N-41°-W	覆土中から小破片3点出土	
		ロームの底面ではほぼ平坦ゆるやかに立ち上がる	色調を基本に3層に分層。確認面で微量の焼土を検出しているが、概ね自然堆積と思われる。	
D095	F7-64-3	楕円形 0.44×0.52×0.40 主軸 N-35°-E	色調を基本に5層に分層。掘立柱建物跡の柱穴のセクションに類似	(張牛)
		ロームの底面ではほぼ平坦急傾斜で立ち上がる	覆土中から小破片1点出土	
D096	F7-65-3	円形 0.32×0.30×0.30 主軸 N-42°-E	色調を基本に4層に分層。掘立柱建物跡の柱穴のセクションに類似	
		ロームの底面で尖底急傾斜で立ち上がる	出土遺物なし	
D097	F7-92-1	不整形 0.36×0.18×0.26 主軸 N-37°-E	色調を基本に3層に分層。掘立柱建物跡の柱穴のセクションに類似	
		ロームの底面で尖底急傾斜で立ち上がる	出土遺物なし	
D098	E8-80-2	不整形楕円形 0.64×0.44×- 主軸 N-65°-W	色調を基本に4層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		ロームの底面ではほぼ平坦急傾斜で立ち上がる	覆土中から小破片が2点出土	
D099	F8-63-2	不整形 0.98×1.00×- 主軸 N-12°-W	色調を基本に9層に分層。数回にわたる掘り高しと認められる	
		ロームの底面ではほぼ平坦 小穴を1基検出 急傾斜で立ち上がる	覆土中から小破片が4点出土	
D100	F8-27-1	不整形楕円形 0.56×0.44×0.44 主軸 N-26°-W	色調を基本に4層に分層。柱底が検出されていることから、掘立柱建物跡の柱穴の1つと考えられる。	
		底面はほぼ平坦で急傾斜で立ち上がる	出土遺物なし	
D101	F8-46-2	不整形楕円形 1.12×1.04×- 主軸 N-62°-E	色調を基本に2層に分層。覆土中に大量の炭化物を検出。人為的堆積と考えられる。	
		浅い皿上の土坑	覆土中から小破片が少量出土	
D102	F8-24-4	不整形楕円形 0.38×0.38×0.26 主軸 N-23°-E	色調を基本に4層に分層。柱底が検出されていることから、掘立柱建物跡の柱穴の1つと考えられる。	
		底面はほぼ平坦で急傾斜で立ち上がる	出土遺物なし	

D103	F8-54-2	不整形 0.86×0.84× 主軸 N-15°-W	色調を基本に4層に分層。人為的な粗戻し が想定される
		底部はほぼ平坦 ゆるやかに立ち上がる	覆土中から小破片1点出土
D104	G8-71-2	楕円形 1.14×7.80×0.14 主軸 N-39°-E	色調を基本に3層に分層。自然堆積による 埋没が想定される
		ロームの底面でほぼ平坦 浅い凹み状の土坑	覆土中から小破片1点出土
D105	F8-55-4	楕円形 8.40×8.00×0.15 主軸 N-18°-E	色調を基本に2層に分層。自然堆積による 埋没が想定される
		ロームの底面で若干の丸みをもつもの のほぼ平坦 浅い凹み状の土坑	覆土中から小破片が少量出土
D106	F8-65-3	楕円形 1.00×7.40×0.48 主軸 N-9°-E	色調を基本に3層に分層。自然堆積による 埋没が想定される
		ロームの底面でほぼ平坦 底面に小穴1基を検出	覆土中から小破片が1点出土
D107	F8-65-1	楕円形 9.50×8.00×0.52 主軸 N-72°-W	色調を基本に3層に分層。自然堆積による 埋没が想定される
		ロームの底面でほぼ平坦 斜めに立ち上がる	覆土中から小破片が少量出土
D108	H9-82-2	楕円形 0.67×0.56×0.38 主軸 N-64°-E	色調を基本に5層に分層。自然堆積と考え られる
		底面は一段テラスをもち丸底である 斜めに直線的に立ち上がる	覆土中から小破片が1点出土

第4節 中世以降及び時期不明

栗谷遺跡Ⅲ地区における中近世以降及び時期不明の遺構は、塚1基、土坑46基、その他の遺構3基、溝4条が検出されている。

立地に関してであるが、塚は台地南側縁辺部に立地している。土坑は、特に集中する地点は無く、遺跡全体に及んでいる。また、近接する土坑については、挿図として同じ図として取り上げたものもある。溝については、台地中央から北側で検出されたものが多い。その他の遺構については、台地中央の平坦面に集中している。

以下、個別の遺構についての報告に移りたい。詳細は以下の記述、遺構一覧表、及び遺物観察表を参照されたい。

(1) 栗谷塚(I020)

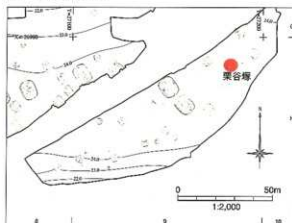


図183 栗谷塚位置図

検出地区 F9-82Gその他。台地南側縁辺部に位置する。

遺構 長軸9.8m×短軸9.0m×高さ2.6mの不正円形の塚である。景観的には、小規模ながら、しっかりと積み上げている塚である。周溝に類する溝等は検出されなかった。

覆土は色調を基本に55層に分層。基本層序であるⅡ層下面あるいは、Ⅲ層上面までを削平し整地を行い、塚を積み上げたと想定される。

塚南東部に主体部と思われる土坑1基を検出している。

遺物 盛土中、中層から下層にかけて、弥生土器小破片を中心に比較的多量に出土した。

主体部 長軸3.1m×短軸3.1m×深さ0.4mの不正形の土坑。塚の裾部近くでの検出で、盛土中からでなく地山を掘り込む状態で検出されている。底部はロームの底部で、ほぼ平坦。軟弱な底部である。壁もロームの壁で斜めに緩やかに立ち上がっていく。

底部においてピットを2基検出している。P1はわずかなくほみ程度の小穴で、ピットの覆土上層、土坑の床面レベルで比較的良好な焼土を検出している。ピットの底部において火床及び熱を受けて劣化した痕跡は認められず、炉の可能性は低いと判断した。

覆土は色調を基本に15層に分層。人為的な埋戻しが想定される。覆土最上層の1層は、塚盛土の最下層にあたる55層が充填されていた。

遺物は覆土中から弥生土器の小破片を中心に少量出土している。

出土遺物としては、弥生土器が主体となるが、全体の出土状況、及び土層堆積状況から塚に伴う土坑と判断した。

所見 塚の盛土中及び検出された土坑からの出土遺物は弥生土器が多い。これは、塚が立地する周辺に弥生時代後期の竪穴住居跡が多く所在し、土坑を掘り、埋戻した時点、さらにその後塚を構築してゆく際に、周辺土を使用したために、土坑覆土及び塚盛土中に弥生時代後期土器が多く混入したものと考えられる。時代を特定できる遺物の出土をみていないが、周溝が検出されていないことや、塚全体の規模、形状から弥生時代の墳丘墓あるいは円墳などは考えずらく、中世以降の塚と判断した。

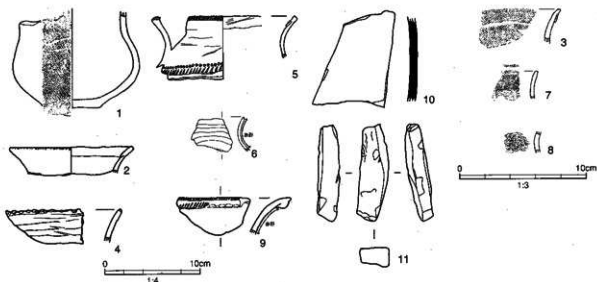


図184 I020

表107 I020遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-×(104)×-		褐 香	菅	胴部～ 底部	
2	弥生 壺	(130)×(20)×- 口縁を折り返し、複合口縁としている。11号は縄文 原体による押圧によって刻み目を形成している。		④黒濁 ⑤暗褐 香	菅	口縁片	
3	弥生 壺	-×-×- 折り返し口縁。口唇から複合部にかけてRL単節縄文を施 文。頸部は無文。内面は横位のヘラ磨き。		④黒 ⑤控 香	菅	口縁片	
4	弥生 甕	-×-×- 口唇 内外面からの押圧 口縁～頸部輪積み痕(3段残存)		褐 黄	密	口縁片	
5	弥生 甕	-×-×- 内面に折り返して複合口縁とする。口唇は縄文原体を押 圧する事によって刻み目を作る。頸部無紋。肩部は連続凹形刺突文。下 段は原体押圧による刻み目を施し胴部と区画する。		④橙濁 ⑤濁 香	菅	口縁～ 頸部	
6	弥生 甕	-×-×- 単純口縁 口縁～頸部輪積み痕5段 内外面とも剥離著しいが赤彩の痕跡あり		橙濁 香	菅	口縁～ 頸部	赤彩
7	弥生 甕	-×-×- 口唇・口縁 附加条縄文 頸部無紋		黒濁 香	菅	口縁片	
8	弥生 甕	-×-×- RL単節斜縄文の下端をS字状結束文によって区画		橙濁 香	菅	頸部片	
9	弥生 甕	-×-×- 複合口縁 口縁下端に棒状工具による押圧 頸部無紋 縦位の丁寧なヘラ磨き		赤濁 香	菅	口縁片	内外面 赤彩
10	須恵器 甕	-×-×-			良	胴部片	
11	石器 礫石	長さ102×幅30×厚さ21					

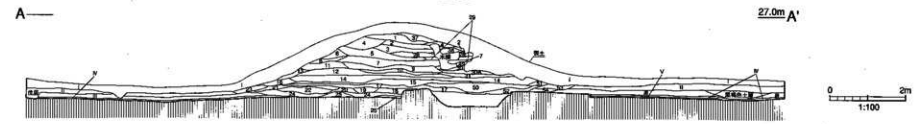
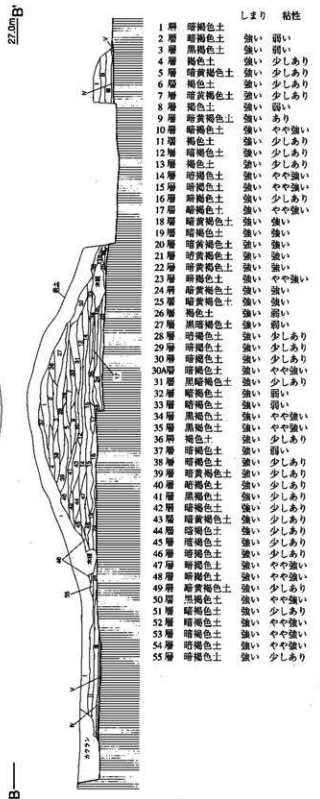
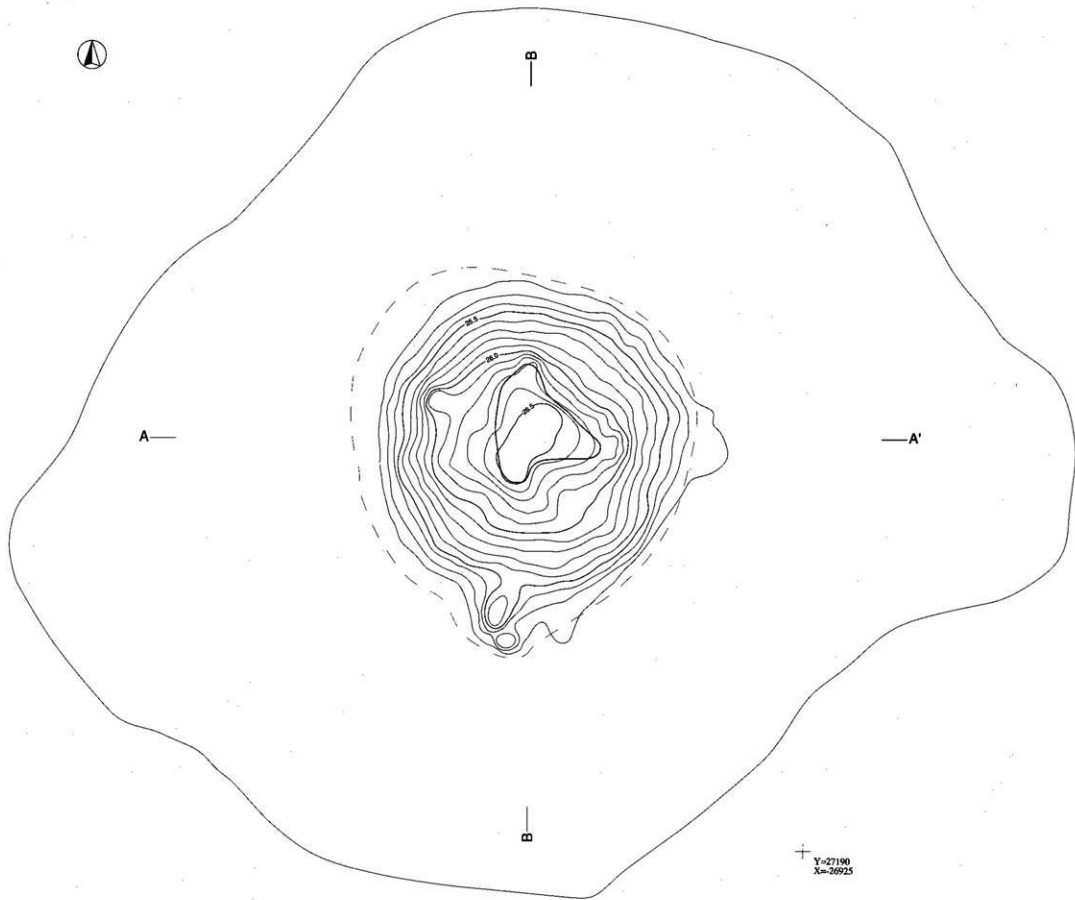


図185 1020(2)

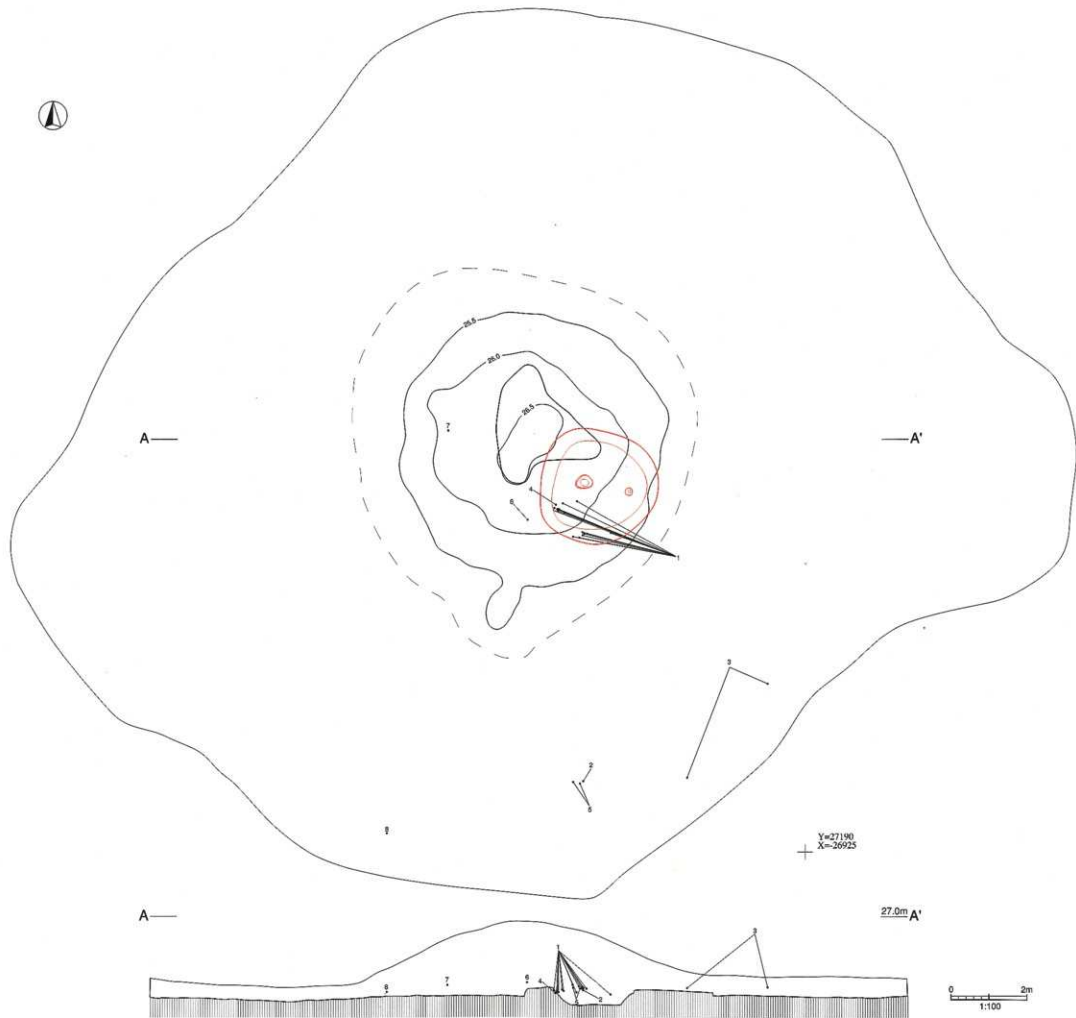


图186 I020(3)

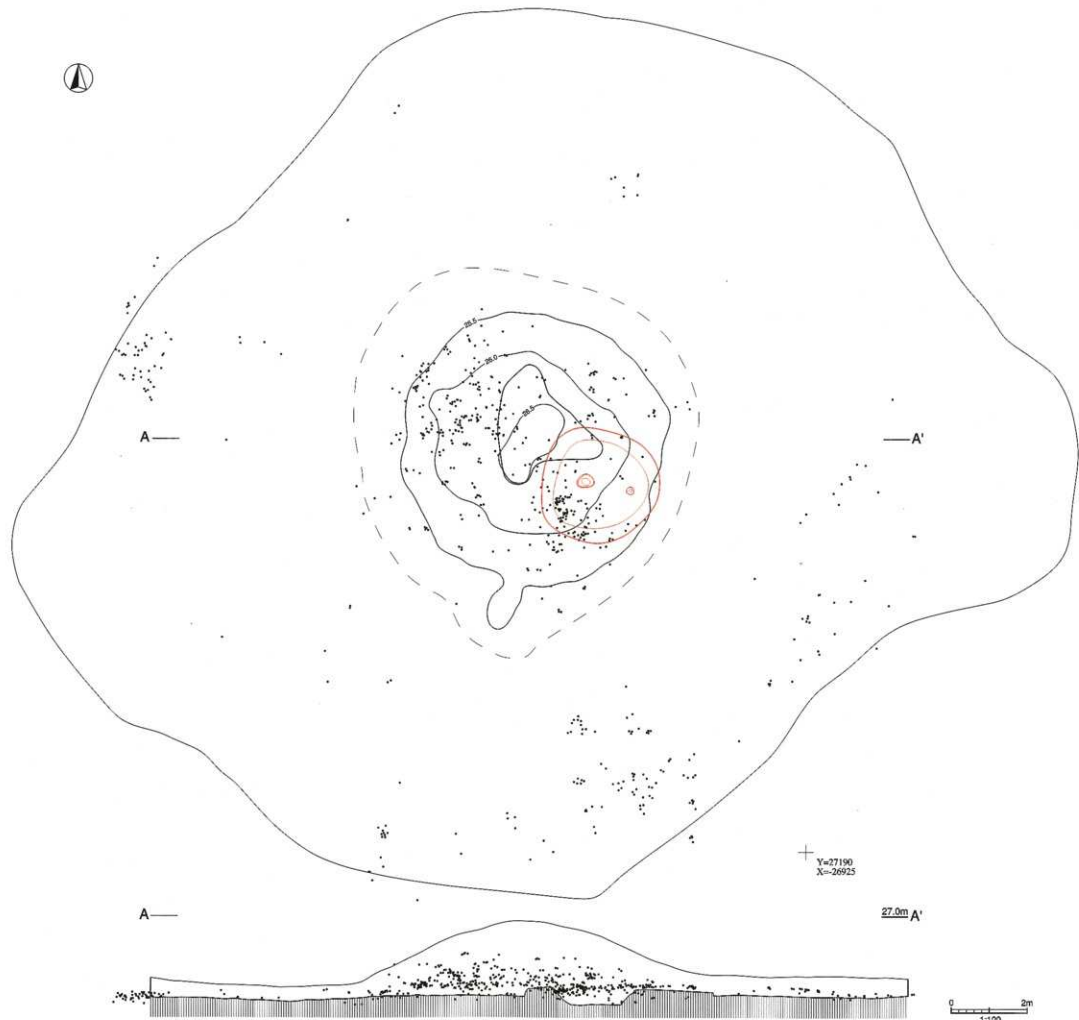


图187 I020(4)

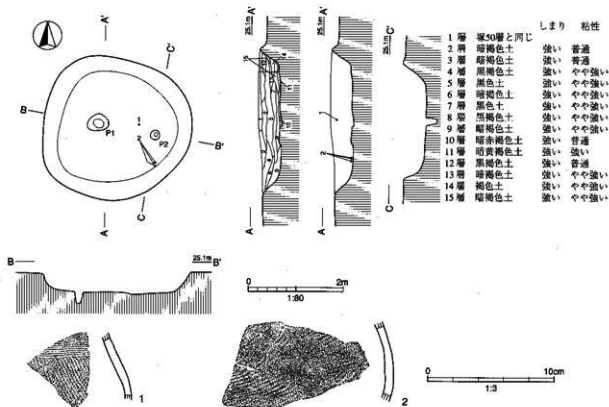


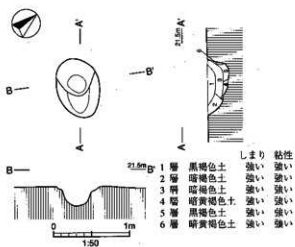
図188 I020P1

表108 I020P1遺物観察表

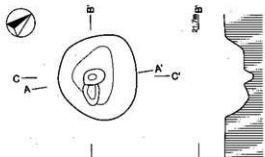
(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口徑×底徑×器高	色調 焼成	胎上	遺存	備考
1	弥生 甕	-×-×- 外面 柳葉横走文→附加糸縄文 内面 ナア	輪襷	暗褐	粗砂粒多	1/4 以下	外面コゲ状附着 物 頸部-胴部遺存
2	弥生 甕	-×-×- 外面 附加糸縄文 内面 ナア	輪襷	橙褐	砂粒多	1/4 以下	黒斑有り 胴部破片遺存

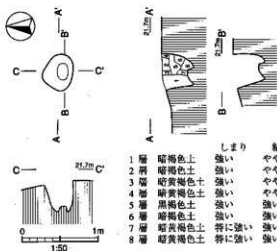
(2) 土坑



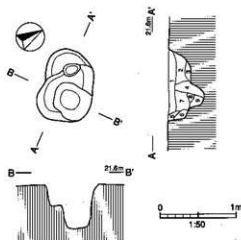
D109



D111

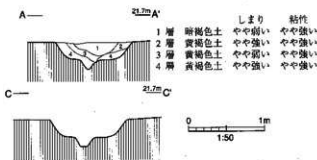


D112

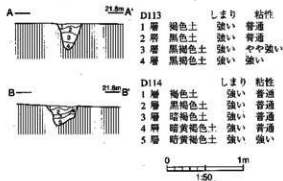
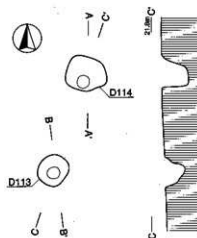


- 1層 暗褐色土 粘性、さらさらしている
- 2層 暗褐色土 粘性、石干有り、しまり有り
- 3層 褐色土 石干ほそぼそしている
- 4層 暗褐色土 ばさばさしている
- 5層 暗褐色土 粘性有り、しまり有り
- 6層 褐色土 ローム柱主体
- 7層 暗褐色土 黒色土粒、粘性、しまり有り
- 8層 褐色土 ほそぼそしている
- 9層 暗褐色土 粘性、しまり有り

D110

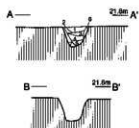
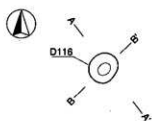


D111

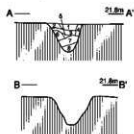
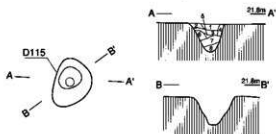


D113 · D114

図189 D109 · D110 · D111 · D112 · D113 · D114

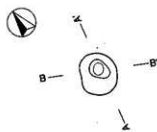


	しまり	粘性
1層	黒褐色土	強い 普通
2層	暗褐色土	強い 普通
3層	黒色土	強い 普通
4層	暗褐色土	強い 普通
5層	黒褐色土	強い やや強い
6層	暗褐色土	強い やや強い
7層	黒褐色土	強い やや強い



	しまり	粘性
1層	暗褐色土	強い 弱い
2層	黒褐色土	強い 弱い
3層	暗褐色土	強い 普通
4層	黒褐色土	強い 普通
5層	暗褐色土	強い 普通
6層	暗黄褐色土	強い 普通
7層	暗黄褐色土	強い 普通
8層	黒褐色土	強い 強い

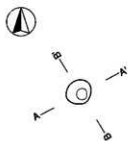
D115 · D116



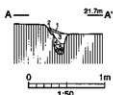
	しまり	粘性
1層	黒褐色土	強い 弱い
2層	暗褐色土	強い 弱い
3層	黒褐色土	強い 弱い
4層	暗黄褐色土	強い 弱い
5層	暗褐色土	強い 普通
6層	暗黄褐色土	強い 普通
7層	黒褐色土	強い 普通
8層	暗黄褐色土	強い やや強い



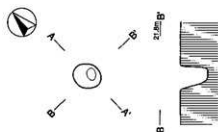
D117



	しまり	粘性
1層	暗褐色土	強い やや強い
2層	暗褐色土	強い 強い
3層	黒色土	強い 普通
4層	暗黄褐色土	強い 普通
5層	黒褐色土	強い 強い
6層	暗黄褐色土	強い 強い
7層	暗褐色土	強い 強い



D119

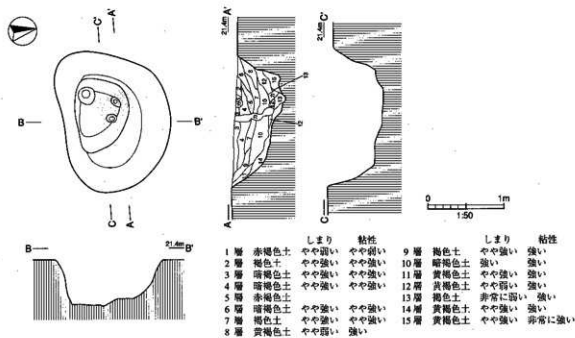


	しまり	粘性
1層	黒褐色土	強い 弱い
2層	褐色土	強い 弱い
3層	黒褐色土	強い 普通
4層	暗褐色土	強い 普通
5層	黒褐色土	強い やや強い
6層	黒褐色土	強い やや強い
7層	暗黄褐色土	強い やや強い
8層	暗黄褐色土	強い やや強い

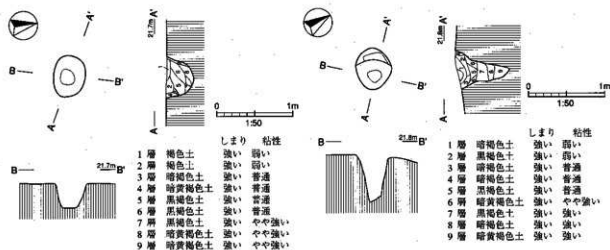


D118

図190 D115 · D116 · D117 · D118 · D119

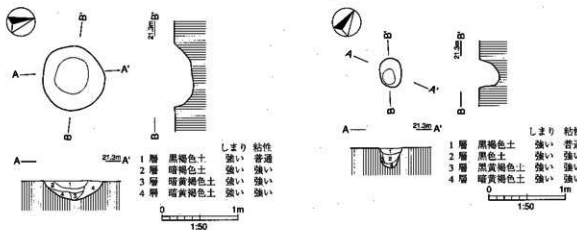


D120



D121

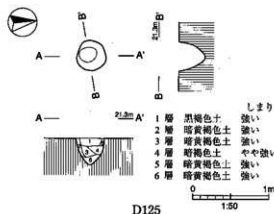
D122



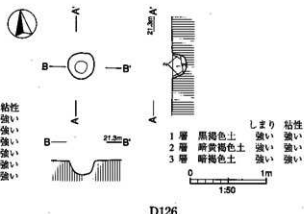
D123

D124

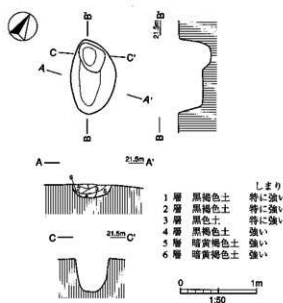
図191 D120・D121・D122・D123・D124



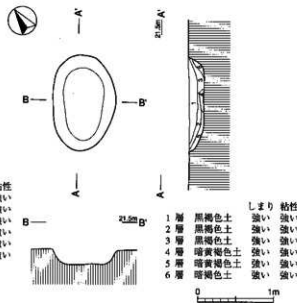
D125



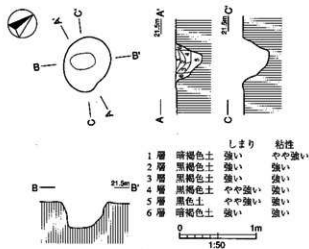
D126



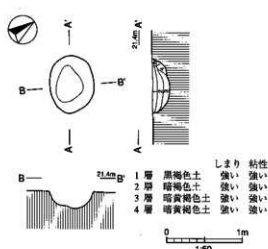
D127



D128

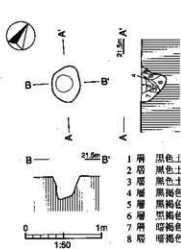


D129



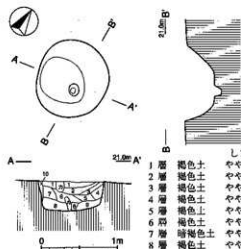
D130

図192 D125・D126・D127・D128・D129・D130



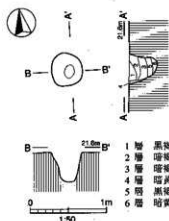
しまり 粘性
 1層 黒色土 強い 強い
 2層 黒色土 強い 強い
 3層 黒色土 強い 強い
 4層 黒褐色土 強い 強い
 5層 黒褐色土 強い 強い
 6層 暗褐色土 強い 強い
 7層 暗褐色土 強い 強い
 8層 暗褐色土 強い 強い

D131



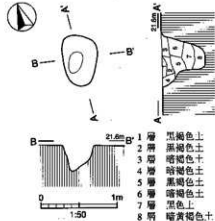
しまり
 1層 褐色土 やや強い
 2層 褐色土 やや強い
 3層 褐色土 やや弱い
 4層 褐色土 やや弱い
 5層 褐色土 やや強い
 6層 褐色土 やや弱い
 7層 暗褐色土 やや強い
 8層 褐色土 やや強い
 9層 褐色土 やや強い
 10層 黄褐色土 弱い

D132



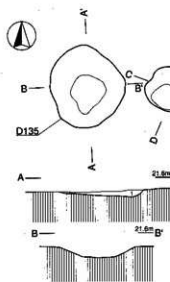
しまり 粘性
 1層 黒褐色土 強い 強い
 2層 暗褐色土 強い 強い
 3層 暗褐色土 やや強い 強い
 4層 暗黄褐色土 強い 強い
 5層 黒褐色土 強い 強い
 6層 暗褐色土 強い 強い
 7層 暗黄褐色土 強い 強い

D133



しまり 粘性
 1層 黒褐色土 強い 強い
 2層 黒褐色土 強い 強い
 3層 暗褐色土 強い 普通
 4層 暗褐色土 強い 普通
 5層 黒褐色土 やや強い 強い
 6層 暗褐色土 やや強い 強い
 7層 黒色土 やや強い 強い
 8層 暗黄褐色土 やや強い 強い

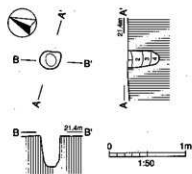
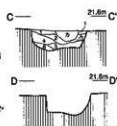
D134



D136
 1層 暗褐色土 しまり 粘性 普通
 2層 黒褐色土 強い 普通
 3層 暗褐色土 強い 普通
 4層 黒褐色土 強い 強い
 5層 暗褐色土 中に強い 強い
 6層 暗黄褐色土 強い 強い

D135
 1層 黒褐色土 しまり 粘性 強い 普通

D135



しまり 粘性
 1層 褐色土 強い 普通
 2層 褐色土 強い 普通
 3層 暗褐色土 強い 強い
 4層 黒色土 強い 強い

D136

図193 D131・D132・D133・D134・D135・D136

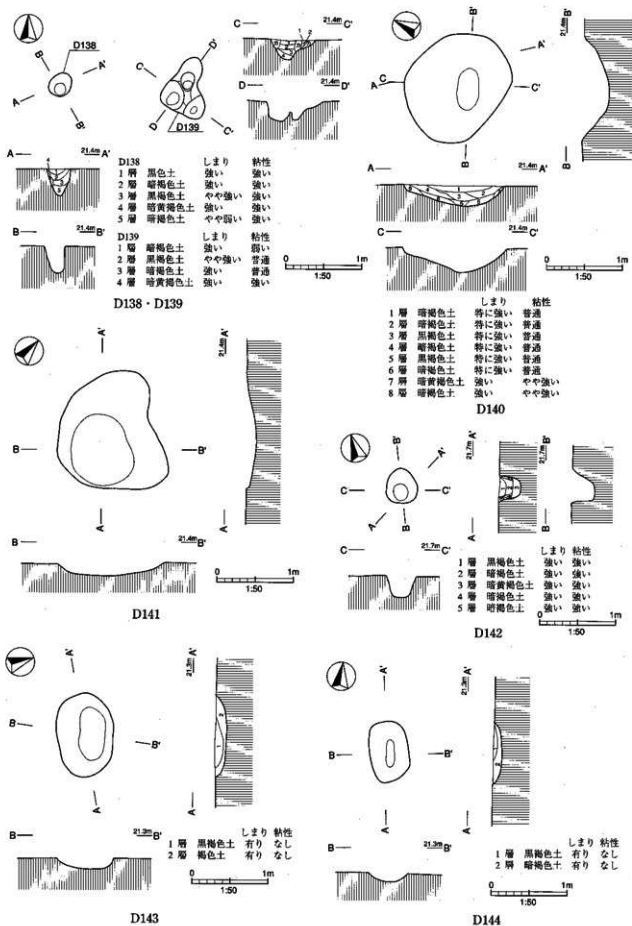
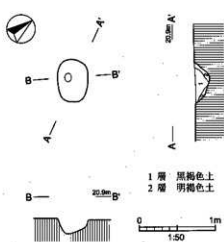
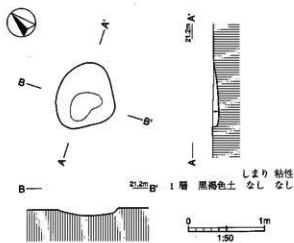


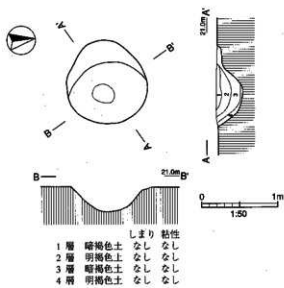
図194 D138・D139・D140・D141・D142・D143・D144



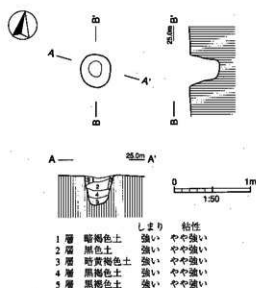
D145



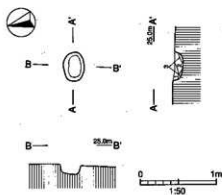
D146



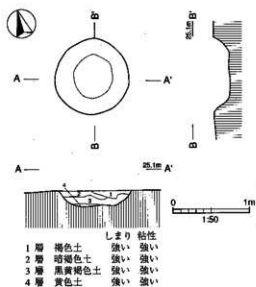
D147



D148

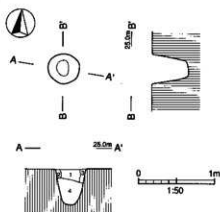


D149



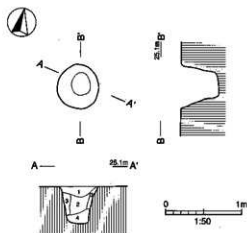
D150

図195 D145・D146・D147・D148・D149・D150



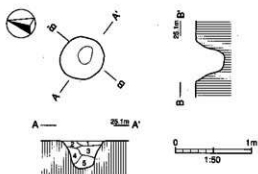
- | 層 | 土質 | しまり | 粘性 |
|----|-------|-----|------|
| 1層 | 暗褐色土 | 強い | やや強い |
| 2層 | 暗褐色土 | 強い | やや強い |
| 3層 | 暗黄褐色土 | 強い | やや強い |
| 4層 | 黒褐色土 | 強い | やや強い |

D151



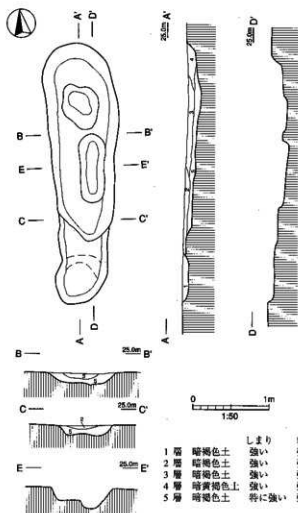
- | 層 | 土質 | しまり | 粘性 |
|----|-------|-----|----|
| 1層 | 褐色土 | 強い | 強い |
| 2層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 3層 | 暗黄褐色土 | 強い | 強い |
| 4層 | 暗黄褐色土 | 強い | 強い |

D152



- | 層 | 土質 | しまり | 粘性 |
|----|-------|-----|----|
| 1層 | 褐色土 | 強い | 強い |
| 2層 | 暗黄褐色土 | 強い | 強い |
| 3層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 4層 | 暗黄褐色土 | 強い | 強い |
| 5層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |

D153



- | 層 | 土質 | しまり | 粘性 |
|----|-------|------|----|
| 1層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 2層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 3層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 4層 | 暗黄褐色土 | 強い | 強い |
| 5層 | 暗褐色土 | 特に強い | 強い |

D154

図196 D151・D152・D153・D154

表109 土坑一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×墩高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
D109	G7-43-4	楕円形 0.74×0.56×0.28 主軸 N-50°-W	色調を基本に6層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		底面は一段テラスをもち、さらに落ちこむゆるやかにもち上がる	出土遺物なし	
D110	F6-99-4	不整形 0.95×0.65×0.46 主軸 N-61°-W	色調を基本に9層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		底面はほぼ平坦で、ほぼ垂直に立ち上がり、一段テラスをもち、さらに斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
D111	F7-13-2	不整形 1.10×1.05×0.40 主軸 N-50°-W	色調を基本に4層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		底面はほぼ平坦で小穴が2基あり斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
D112	F7-73-3	不整形 0.46×0.40×0.30 主軸 N-91°-W	色調を基本に8層に分層。人為的な埋没が想定される	
		底面は凹凸あり ほぼ垂直に立ち上がる	出土遺物なし	
D113	F7-85-1	不整形 0.42×0.38×0.34 主軸 N-38°-E	色調を基本に4層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		底面はほぼ平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる	出土遺物なし	
D114	F7-85-1	不整形 0.47×0.54×0.30 主軸 N-0°-W	色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		底面は尖底で、斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
D115	F7-84-4	不整形 0.64×0.46×0.36 主軸 N-27°-E	色調を基本に7層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		底面は尖底で、斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
D116	F7-84-4	楕円形 0.40×0.34×0.26 主軸 N-47°-E	色調を基本に8層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		底面は尖底で、斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
D117	F7-94-2	不整形 0.54×0.46×0.38 主軸 N-38°-E	色調を基本に8層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		底面はほぼ平坦で、斜めに立ち上がる	出土遺物なし	
D118	F7-95-4	楕円形 0.32×0.36×0.40 主軸 N-44°-E	色調を基本に8層に分層。人為的な埋没が想定される	
		底面はせまく丸底で、ほぼ垂直に立ち上がる	出土遺物なし	
D119	E8-10-2	不整形 0.32×0.32×0.30 主軸 N-2°-E	色調を基本に7層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
		底面はせまいがほぼ平坦 ほぼ垂直に立ち上がる	出土遺物なし	
D120	E7-99-3	不整形 1.80×1.40×0.60 主軸 N-80°-E	色調を基本に15層に分層。覆土上層および中層で焼土を検出。人為的堆積と考えられる	
		底面は多少凹凸あり 壁は斜めに立ち上がる	出土遺物なし	

D121	F7-91-3	楕円形 0.56×0.42×0.36 主軸 N-78°-W	色調を基本に9層に分層。自然堆積による埋没が想定される
		底部は若干丸みをもちながらもほぼ平坦 急傾斜で立ち上がる	出土遺物なし
D122	F7-91-1	楕円形 0.55×0.48×0.60 主軸 N-57°-W	色調を基本に9層に分層。自然堆積による埋没が想定される
		底部はせまく尖底で、ほぼ垂直に立ち上がる	出土遺物なし
D123	E9-7-1	不整形 0.84×0.80×0.23 主軸 N-77°-W	色調を基本に4層に分層。人為的な埋没が想定される
		底部はほぼ平坦で、ゆるやかに立ち上がる	出土遺物なし
D124	E8-90-3	楕円形 0.39×0.30×0.26 主軸 N-32°-W	色調を基本に4層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される
		底部はせまく、ほぼ垂直に立ち上がる	出土遺物なし
D125	E8-90-2	不整形 0.40×0.38×0.35 主軸 N-78°-W	色調を基本に6層に分層。人為的な埋没が想定される
		底部はせまく尖底で、ほぼ垂直に立ち上がる	出土遺物なし
D126	E8-90-1	不整形 0.34×0.36×0.18 主軸 N-9°-E	色調を基本に3層に分層。人為的な埋没が想定される
		小型であるがしっかりとしたピット。底部はほぼ平坦で斜めに直線的に立ち上がる	出土遺物なし
D127	E8-80-3	楕円形 1.00×0.60× 主軸 N-30°-W	色調を基本に6層に分層。人為的な埋没が想定される
		底部はほぼ平坦で小穴を1基伴う壁はほぼ垂直に立ち上がる	出土遺物なし
D128	E8-38-4	楕円形 1.26×0.82×0.19 主軸 N-34°-E	色調を基本に6層に分層。人為的な埋没が想定される
		底部はほぼ平坦で、斜めに直線的に立ち上がる	出土遺物なし
D129	F8-22-1	不整形 0.74×0.60×0.34 主軸 N-50°-W	色調を基本に6層に分層。人為的な埋没が想定される
		底部はほぼ平坦で、斜めに立ち上がる	出土遺物なし
D130	F8-22-3	楕円形 0.76×0.60×0.22 主軸 N-49°-W	色調を基本に4層に分層。自然堆積による埋没が想定される
		丸底の上坑で、なだらかに立ち上がる	出土遺物なし
D131	F8-31-2	不整形 0.50×0.36×0.30 主軸 N-27°-W	色調を基本に8層に分層。人為的な埋没が想定される
		やや傾斜をもった底部で、斜めに立ち上がる	出土遺物なし
D132	F8-63-2	不整形 1.02×0.98×0.37 主軸 N-33°-W	色調を基本に10層に分層。人為的な埋没の後、自然堆積による埋没が想定される
		ほぼ平坦な底部で小穴を1基検出 斜めに立ち上がる	出土遺物なし
D133	F8-6-3	不整形 0.40×0.40×0.39 主軸 N-12°-E	色調を基本に6層に分層。自然堆積による埋没が想定される
		ロームの平坦な底部で、急斜面で立ち上がる	出土遺物なし

D134	F8-5-3	不整形 0.64×0.44×0.34 主軸 N-29°-E 尖底ぎみの底部で、斜めに立ち上がる	色調を基本に8層に分層。人為的な埋戻しが想定される 出土遺物なし
D135	F8-15-4	不整形 1.10×0.98×0.14 主軸 N-4°-W 浅い凹み状の土坑	色調を基本に1層に分層。自然堆積と考えられる 出土遺物なし
D136	F8-15-4	不整形 0.74×0.58×0.27 主軸 N-72°-W ほぼ平坦な底部で、ほぼ垂直に立ち上がる	色調を基本に6層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される 出土遺物なし
D137	F8-16-3	不整形 0.24×0.28×0.41 主軸 N-51°-E 平坦な底部で、ほぼ垂直に立ち上がる 形態は住居跡の柱穴に類似	色調を基本に4層に分層。自然堆積による埋没が想定される 出土遺物なし
D138	F8-26-3	楕円形 0.32×0.26×0.35 主軸 N-26°-E 平坦な底部で、ほぼ垂直に立ち上がる 形態は住居跡の柱穴に類似	色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される 出土遺物なし
D139	F8-36-1	不整形 0.74×0.62×- 主軸 N-30°-E 底部は凹凸があり、斜めに立ち上がる	色調を基本に4層に分層。概ね自然堆積と考えられる 出土遺物なし
D140	F8-26-3	不整形 1.38×1.38×0.35 主軸 N-67°-E 丸底の底部で、なだらかに立ち上がる	色調を基本に8層に分層。人為的な埋戻しが2～3期に分かれて行われた 出土遺物なし
D141	F8-35-2	不整形 1.44×1.24×- 主軸 N-45°-W 浅い凹み状の土坑	出土遺物なし
D142	F8-14-4	不整形楕円形 0.46×0.40×0.28 主軸 N-22°-E 平坦な底部で、急傾斜で立ち上がる	色調を基本に5層に分層。概ね自然堆積と考えられる 出土遺物なし
D143	G8-71-3	楕円形 1.10×7.80×0.17 主軸 N-71°-E 底部はほぼ平坦で、なだらかに立ち上がる 浅い凹み状の土坑	色調を基本に2層に分層。自然堆積による埋没が想定される 出土遺物なし
D144	G8-71-3	楕円形 0.80×0.50×0.12 主軸 N-8°-W 浅い凹み状の土坑	色調を基本に2層に分層。自然堆積による埋没が想定される 出土遺物なし
D145	G8-67-4	楕円形 0.58×0.40×0.18 主軸 N-51°-W ロームの底面で丸底ゆるやかに立ち上がる	色調を基本に2層に分層。自然堆積による埋没が想定される 出土遺物なし
D146	G8-69-4	不整形 0.87×0.73×- 主軸 N-47°-W 浅い凹み状の土坑	色調を基本に1層に分層。 出土遺物なし

D147	G8-69-3	不整形 1.10×1.10×0.35 主軸 N-82°-W	色調を基本に4層に分層。自然堆積による埋没が想定される
		ロームの底面で丸底 ゆるやかに立ち上がる	出土遺物なし
D148	H9-83-1	円形 0.44×0.40×0.40 主軸 N-12°-W	色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される
		平坦な底部で、急傾斜で立ち上がる 形態は住居跡の柱穴に類似	出土遺物なし
D149	H9-82-3	楕円形 3.80×2.60×— 主軸 N-104°-E	色調を基本に3層に分層。自然堆積による埋没が想定される
		小型の浅い土坑 底面はほぼ平坦でほぼ垂直に立ち上がる	出土遺物なし
D150	H9-62-4	円形 1.00×9.98×0.20 主軸 N-18°-E	色調を基本に4層に分層。人為的な埋没が想定される
		底部は平坦で、斜めに立ち上がる	出土遺物なし
D151	H9-83-1	円形 0.40×0.40×0.46 主軸 N-1°-W	色調を基本に4層に分層。人為的な埋没が想定される
		小型であるが深く、柱穴状の土坑	出土遺物なし
D152	H9-73-4	楕円形 5.80×0.55×0.50 主軸 N-12°-W	色調を基本に4層に分層。人為的な埋没が想定される
		小型であるが深く、柱穴状の土坑	出土遺物なし
D153	H9-83-2	円形 5.60×5.80×0.36 主軸 N-77°-E	色調を基本に5層に分層。人為的な埋没が想定される
		小型であるが深く、柱穴状の土坑	出土遺物なし
D154	H9-82-2	楕円形 3.46×0.82×0.24 主軸 N-9°-E	色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される
		底面はほぼ平坦で、ゆるやかに立ち上がる	出土遺物なし

(3) 溝

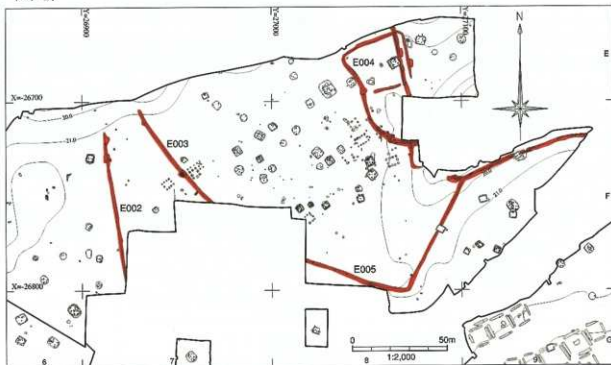


図197 溝位置図

E002

検出地区 F7-3G他。台地北側西よりから南北に延びている。

遺構 幅約1.1m、深さ約0.4mの断面船底型の溝で、底部に小穴などの付属施設は検出されなかった。

覆土は色調を基本的に3層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中に小破片を中心に少量出土。

所見 時期決定できる遺物は出土していないが、覆土の観察、遺構の規模・形状等から中世以降の溝と判断した。

E003

検出地区 F7-55G他。台地北側中央から北西方向に延びている。A171と重複関係にあり本遺構の方が新しい。一部調査区外に延びているが、後述するE005と同一の溝と思われる。

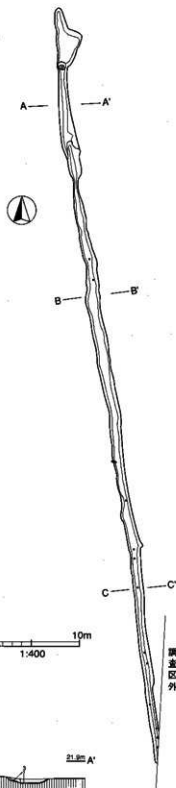
遺構 幅約1.4m、深さ約0.4mの断面船底型の溝で、底部に小穴などの付属施設は検出されなかった。

覆土は色調を基本的に3層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

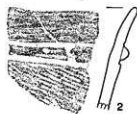
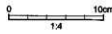
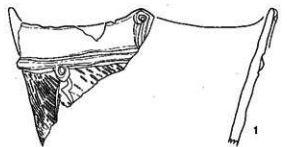
遺物 覆土中に小破片を中心に少量出土。縄文時代後期の土器が比較的集中して出土する地点が検出された。

所見 時期決定できる遺物は出土していないが、覆土の観察、遺構の規模・形状等から中世以降の溝と判断した。

Y=26900
X=28720



しまり 粘性
 やや弱い やや弱い
 やや強い やや強い
 弱い 強い



Y=26950
X=28790

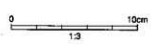


図198 E002

表110 E002遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	(280)×-(145) 波状光線(4単位をなすと思われる) 波頂部に円形貼付文を配し、ややカーブを描きながら2条の波線垂下する。口縁上部には上下を波線文でなぞった隆帯を施す。波頂部から次の波頂部から次の波頂へ間に円形貼付文貼付より下に波線2条、うち1条は蛇行する。また、弧を描く平行沈線も見られる 地文はRL単節縄文	暗褐色 茶褐色	砂粒含	口縁片	
2	縄文 深鉢	-×-×- 波状口縁 上部に無文帯をおいた後、上下を沈線文でなぞった隆帯を施す 地文は、RL単節縄文	暗褐色 茶褐色	砂粒含	口縁片	掘之内式
3	縄文 深鉢	-×-×- 上部に浅い沈線	褐色	砂粒	口縁片	掘之内式
4	縄文 深鉢	-×-×- 地文RL単節縄文に蛇行沈線文施文	砂褐色 茶褐色	砂粒	胴部片	掘之内式
5	縄文 深鉢	-×-×- 浅く極細い沈線とやや深めに平行沈線を施文	砂褐色 茶褐色	繊維含	胴部片	
6	縄文 深鉢	-×-×- 地文RL単節縄文に弧状の平行線文施文	明褐色	砂粒含	胴部片	掘之内式
7	縄文 深鉢	-×-×- 浅く極細い沈線とやや深めに平行沈線を施文	褐色	炭化物含	口縁片	掘之内式
8	縄文 深鉢	-×-×- 地文RL単節縄文に弧状の平行沈線文施文	砂褐色 茶褐色	砂粒含	胴部片	掘之内式
9	縄文 深鉢	-×-×- 口縁 上端に円形の刺突文を連続 胴部 鋸歯状工具による蛇行する条線が縦位に施文される	明褐色	砂粒多含	口縁片	掘之内式
10	縄文 深鉢	-×-×- 地文RL単節縄文に縦位の沈線文	砂褐色 茶褐色	砂粒含	胴部片	掘之内式

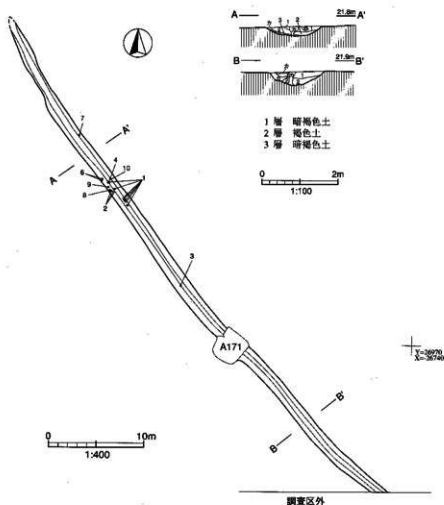


図199 E003

E004

検出地区 F8-41G他。台地北側東よりから南北に延び、更に方形に廻っている。本来数条の溝が重複していたと考えられるが、それぞれの新旧関係を明らかにし得なかった。

遺構 幅約1.2m、深さ約0.2mの断面船底型の溝で、底部に更に一段の掘込みや小穴・土坑を検出した地点も検出した。

覆土は色調を基本に概ね4層に分層され、自然堆積による埋戻しが想定される。

遺物 覆土中に土師器の小破片を中心に少量出土。

所見 時期決定できる遺物は出土していないが、覆土の観察、遺構の規模・形状等から中世以降の溝と判断した。

E005

検出地区 F8-29G他。台地北側を東西に延びている。2条の溝とI022及びI023とが重複していたと考えられる。溝については、それぞれの新旧関係を明らかにしはし得なかった。I022及びI023については本遺構の方が古い。一部、調査区外に延びているが、E003と同一の溝と考えられる。

遺構 幅約1.9m、深さ約0.4mの断面船底型の溝で、底部に更に一段の掘込みや小穴・土坑を検出した地点も検出した。

覆土は色調を基本に概ね3～4層に分層され、自然堆積による埋戻しが想定される。

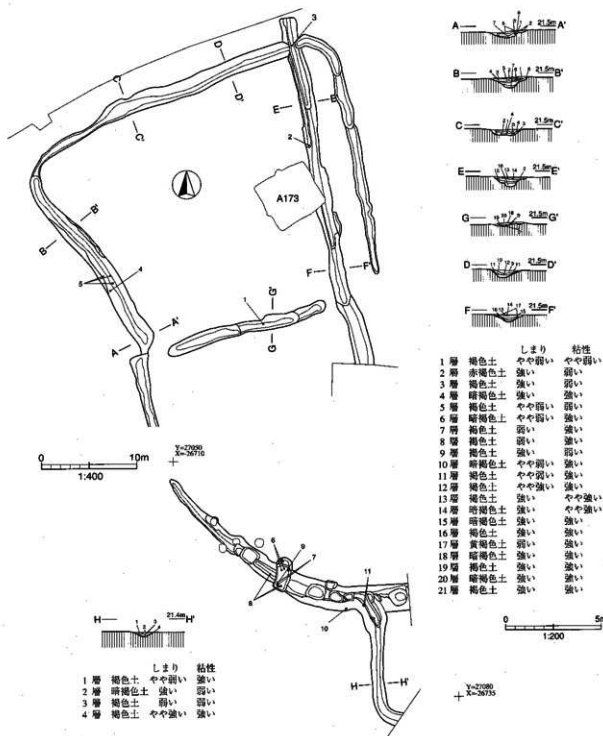


図200 E004

遺物 覆土中に土器小破片、砥石等を少量出土。

所見 時期決定できる遺物は出土していないが、覆土の観察、遺構の規模・形状等から中世以降の溝と判断した。

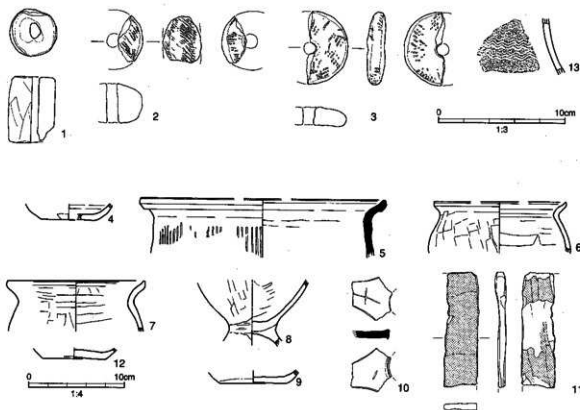


図201 E004(2)

表111 E004遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 管状土鐘	長さ53×最大径36×孔径9~13 重量72.7g 孔はやや片寄って突たれている 削りを主体とした粗い調整が加えられている			略完形	
2	土師器 紡輪車	上部径(18) 底部径(13) 高さ31 重量17.0g 平面形は凹形を呈するが非常に厚手の作りから 孔は両面から穿たれている 全面に非常に細かな附加条縄文 条擦痕はほとんど認められない			断片	
3	土師器 紡輪車	上部径(24) 底部径(23) 高さ15 孔径(11) 重量26.6g 平面形は凹形を呈するが、中央部がやや厚みをもつ 孔は両面より穿たれている 全面に細かなLR単線縄文が加えられている 條痕などはほとんど認められない			1/2	
4	土師器 坏	一×(60)×(18) ロクロ成形 回転へら削り(中央不明) 外面 胴上半ナデ 下半へら削り 内面 ナデ	⑤橙褐 ⑥橙褐 ⑦青	砂粒 橙色粒含	体部~ 底部片	
5	須恵器 甕	(260)×一×(61) ロクロ成形 口縁外反しつつ上立ち上げる 外面 ナデ 胴部タタキ 内面 ナデ	⑧外面 暗黄灰褐 ⑨黄灰褐 ⑩青	砂粒含	口縁片	
6	土師器 甕	138×一×(54) 口縁受け口状 上端つまみ上げる 外面 口縁頸部 ナデ 外面凹線状の調整 胴上半 縦へら削り 内面 ナデ	⑪暗赤褐 ⑫黄褐 ⑬青	砂粒含	口縁~ 胴部片	内面スス付着
7	土師器 甕	(142)×一×(53) 口縁受け口状 外面 口縁頸部 ナデ 胴上半 縦へら削り 内面 ナデ	⑭黒褐 ⑮黄褐 ⑯青	砂粒含	口縁~ 胴部片	外面スス付着
8	土師器 小型 台付壺	一×一×(69) 外面 胴下半 胴下半へら削り 脚部ナデ 内面 ナデ	明褐 青	粗砂粒 含	口縁~ 胴部片	内外面 一部スス付着

9	土師器 坏	-×66×(12) ロクロ成形 回転ヘラ削り 外面 ナデ ヘラ削り 内面 ナデ	橙褐色	粗砂粒含	底部片	
10	須恵器 版	-×-×-	灰黒褐色	粗砂粒含	底部片	線刻「+」
11	石器 砥石	長軸122×短軸34×厚さ8 重量64.1g 板状の薄手の作り、表面と1側縁に非常に顕著な研磨痕や線状痕が残されており、中央部が凹む 表面に原材加工痕が残されており、その一部にも研磨痕がみられる			略完形	
12	土師器 坏	-×(70)×(15) ロクロ成形 回転ヘラ削り 外面 ナデ ヘラ削り 内面 ナデ	明褐色	粗砂粒含	底部片	
13	弥生 壺	-×-×- 外面 頸部 櫛波状文 内面 ナデ	橙褐色	粗砂粒多	頸部片	

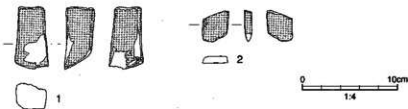
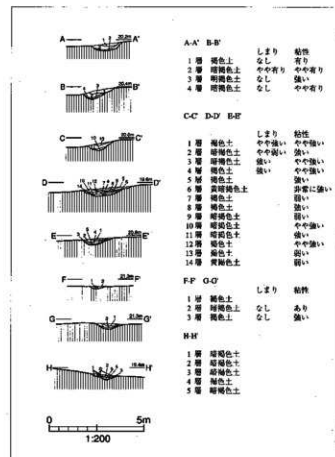
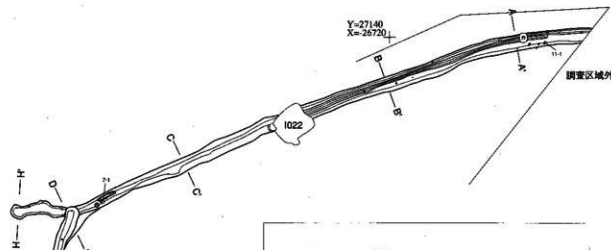
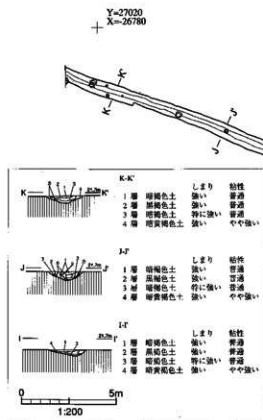


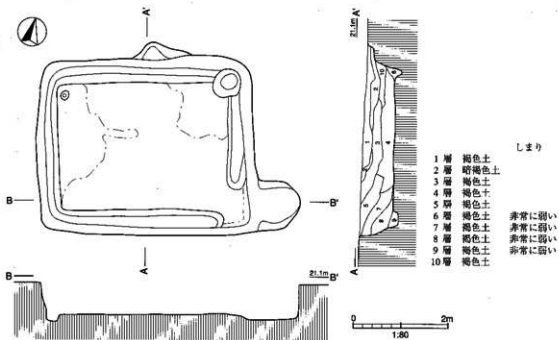
表112 E005遺物観察表

(単位mm)

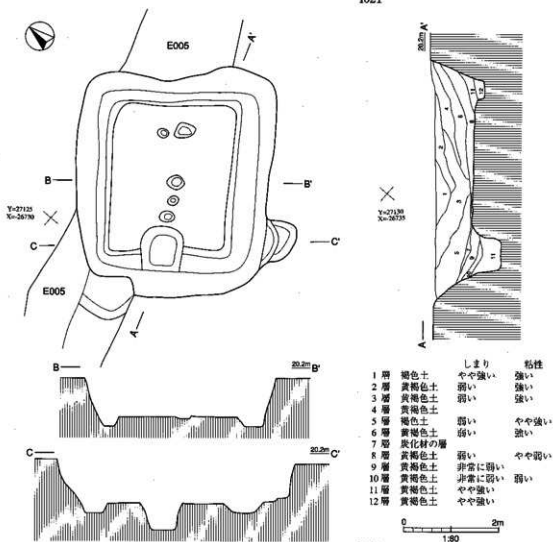
No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	重量	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石製品 砥石	長さ66×幅35×厚さ31 一端を欠損するが全体に明瞭な研磨痕が残される	96.6g					砂岩(混岩?)
2	石製品 砥石	長さ33×幅28×厚さ9 一端を欠く。2紙面であるが、両側面にも古い使用痕を有す	9.7g					石材 砂岩



(4) その他遺構



I021



I022

図203 I021・I022

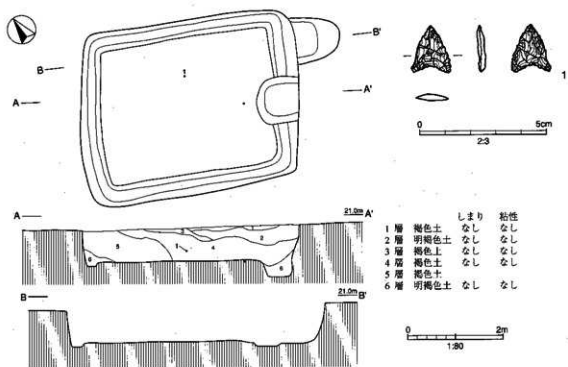


図204 I023

表113 I023遺物観察表

(単位mm)

No.	種別形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 調成	胎土	遺存	備考
1	石器 石鏝	長さ19×幅16×厚さ3 重量0.7g 肩部を欠くが二等辺三角形を呈する無茎鏝である。 脛縁はやや外湾する。両面一全面調整が施される				黒曜石

I021、I022、I023

栗谷Ⅲ地区においてI021と同様の遺構がI022・I023とあり、栗谷Ⅱ地区においてもI001が調査され、計4基が検出されている。調査中、地元の古老の話によると第二次世界大戦中、ゴムボートや板（仮設橋の材料として）を保管するため、このような穴を各所に掘ったとのこと。近代の遺構と判断した。

表114 遺構一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
I001	G9-44	隅丸長方形 4.18×3.68×-		第2分母報告分
			出土遺物なし	
I021	F9-6	隅丸長方形 4.50×3.66×0.66	色調を基本に10層に分層。人為的堆積が想定される	
			出土遺物なし	
I022	F9-24	隅丸長方形 4.60×4.00×0.80	色調を基本に12層に分層。人為的堆積が想定される	
			出土遺物なし	
I023	F8-88	隅丸長方形 4.60×3.66×0.70	色調を基本に6層に分層。人為的堆積が想定される	
			覆土中から小破片1点、石鏝1点が出土	

第3章 考 察

栗谷遺跡の3分冊の整理を終え、以下、全体のまとめとして若干の考察を行いたい。

第1節 縄文時代

栗谷遺跡の縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡6軒、炉穴40基、陥穴6基、土坑33基、その他の遺構6基、遺物包含層1カ所が調査された。その遺構数から言えば、本遺跡の所在する八千代市内では有数の縄文遺跡とも言える。

第1項 遺 構

(1) 竪穴住居跡

栗谷遺跡の縄文時代の竪穴住居跡は合計6軒検出された。内訳は前期黒浜期の住居跡が2軒(A048・A049)、中期加曾利E期の住居跡が3軒(A011・A015・A038)、後期堀之内期の住居跡が1軒(A128)である。第2分冊でも述べたが、中期に関しては、検出された小ピットの配列から実際に調査された住居跡より軒数が多くなる可能性があり、後期についても、土坑の中に埋壘の可能性の高いもの1基(D076)、その他の遺構の中に埋壘と炉跡が近接して検出されているものが2地点(I003・I005)あることから、中期同様に実際の住居軒数は増える可能性がある。しかし、いずれにしても、集落としては小規模で、キャンプサイトの性格の集落であろう。

竪穴住居跡の形態としては、黒浜期のものが、方形或いは長方形のプランで、加曾利E期は不整形形もしくは不整楕円形、同様に堀之内期においては不整形形を呈していた。何れの住居跡も、規模的には小型の住居跡に類し、炉の形態は地床炉であった。立地については、何れの時期も台地先端部ではなく、谷津のやや奥まった地点の台地縁辺部分に立地していた。そうした状況の中、黒浜期の住居跡については台地南側の縁辺部に、中期加曾利E期の住居跡については台地北側の縁辺部西側に、後期堀之内期の住居跡については台地北側の縁辺部中央に立地していた。台地の占地形態に時期的な変遷があることが窺える。また、第2分冊までの所見によると、栗谷遺跡における縄文時代は前期がひとつの空白期間となっていたが、ここに至り前期段階においても集落が存在していたことが明らかになった。早期の包含層、炉穴群、陥穴群が検出されていることと考えあわせれば、栗谷遺跡の縄文時代は、断続的ではあるが、早期から後期に至るまで長きにわたり、人々の生活の痕跡があったことになる。

(2) 炉 穴

炉穴については合計40基検出され、台地縁辺部に散在するように立地していた。従来の早期の炉穴群によく見られる密集する傾向がみられないのも栗谷遺跡の特徴に挙げられるだろう。第2分冊の段階で栗谷遺跡における炉穴に関して、掘り込みの浅い凹状の炉穴が多いと述べたが、第3分冊までの整理を終え、やや形態の異なる炉穴も検出された。炉穴の2類型を示したのが図203になるが、A類の炉穴が第2分冊段階までで報告した小規模で浅い凹状の炉穴で明瞭な火床をもたないタイプである。対してB類の炉穴が、今回報告した比較的掘り込みがしっかりした不整形の平面形をした炉穴で、明瞭な火床をもつタイプである。A類はF001・F003・F004・F005・F010・F027等が挙げられ、B類はF020・F021・F026・F028等が挙げられる。また、A類は掘り返しや重複が少なく単独で存在していることに対して、B類は掘り返しや重複が行われ、平面形も結果的に不整形を呈するものが多いことが特徴的である。出土遺物に関しては、A類の炉穴からの出土遺物が殆ど無いのに対し、B類は、遺物が出土していない炉穴も当然存

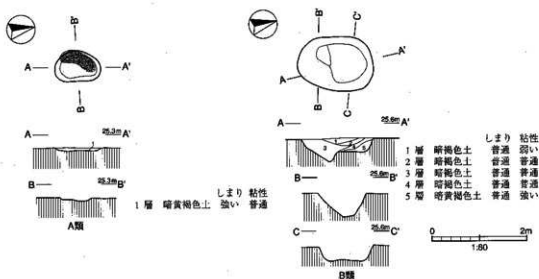


図205 F010・F020

在するが、遺物が出土する場合は、条痕文系土器が出土している。以上のことから、栗谷遺跡において炉穴の2分類ができそうである。B類については、従来から指摘されている条痕文期の炉穴と捉えて良いだろう。A類については出土遺物からの検討ができないが、B類とは時期差があるように思える。或いは早期前半の条痕文期の所産かも知れない(註1)。

(3) 陥穴

陥穴は栗谷遺跡第3分冊において新たに1基報告され、栗谷遺跡全体で合計6基となった。今回報告を行った陥穴はD071で、立地的には台地先端部分から西に入り込んでいる谷津に長軸方向が向き、台地先端部の谷津を意識して作られていることが判る。

栗谷遺跡における陥穴は第2分冊の小結でも若干触れたが2類に大別できる。A類はD033・D032に見られる長楕円で長軸方向が一部オーバーハングするタイプ、そしてB類はD018・D019・D028に見られる楕円形のタイプである。そしてその形態分類と立地に対応関係が見られ、A類は台地東側から入り込む谷津を意識して作られB類は台地北側から入り込む谷津を意識して作られていることを明らかにした。

今回報告のD071は底部に小穴が検出されている点が形態上の若干の相違となるが、大別すればB類に分類できるだろう。他のB類の陥穴とは離れ、別の谷津を意識して作られていることも、形態上の若干の相違があることに対する説明が付きやすい材料となるだろう。さて、ここで問題になるのが第2分冊以来の問題であるが、これらの形態差が何に起因するかである。この問題で唆峻に富むのが栃木県登谷遺跡の調査報告である(註2)。調査、整理をされた中村信博氏は登谷遺跡の陥穴を出土遺物と火山灰分析等から登谷遺跡の陥穴の形態をA～Tの20分類し、更に時期を8期区分を行っている。栗谷陥穴A類は、中村分類によるとC型の第2期=有舌尖頭器から条痕文期の陥穴に、栗谷陥穴B類は、中村分類G・H・I・J型の第5期=条痕文期の陥穴にそれぞれ対応する。栗谷陥穴A類においては遺物の出土例がないが、栗谷陥穴B類においてはD028から条痕文系土器が出土している。栗谷陥穴A類において条痕文系土器が出土していない点が根拠として弱くなるが、栗谷調査例は中村氏の分類及び時期区分を支持する内容(少なくとも否定する内容ではない)となっている。栗谷遺跡において遺構外遺物の中に少数ではあるが条痕文系土器が出土していることと併せて考えると、栗谷遺跡の早期の出土遺物において条痕文期と条痕文期の2時期があり、遺構にも反映されていると考えられる。栗谷遺跡の陥穴の2類型については時期の差によるもので、その時期において利用する谷津が異なっていたと考えるのが現段階では妥当に思える。

第2項 遺物及び遺物包含層

栗谷遺跡の遺物包含層については、縄文時代早期の遺物が主体であることを、この間、再三にわたり述べてきた。早期の具体的様相は、早期前半の燃糸文系土器が若干出土し、早期後半の条痕文系土器群が主体となっている状況であった。また、早期以外については、後期の遺物が比較的多く出土した。

早期、燃糸文系土器群は、井草期から稻荷台期での土器が数点ずつ出土していた。強いて挙げるとするならば、夏島期の土器が主体を占め、縄文施文タイプの土器が比較的多く出土している。また、花輪台式に代表される燃糸文終末期の土器を検出されるには至らなかった。燃糸文期全般を通して、出土地点としては、条痕文系土器群の出土集中地点とほぼ重なるような状態であった。

主体をなす条痕文系土器は、概ね、野島期の所産で、条痕の細かい古い段階と、条痕の粗い新しい段階の2期に分類可能である(註3)。野島期の文様の特徴として条痕を微隆起による区画を行うのが通常であるが、栗谷遺跡においては、新古段階を問わず、微隆起による区画は殆ど見られず、沈線による区画を主な手法として取り入れている。西関東の様相が強いのか、或いは、時期差によるものなのか、現段階では明らかにできなかった。同じ台地上に展開する上谷遺跡では、微隆起による区画された文様を取り入れている野島期の深鉢も散見する。ここでは、栗谷遺跡出土の条痕文系土器群の特徴を述べるに止めておく。

また、栗谷遺跡における早期の遺構として炉穴と陥穴が検出されているが、前項までで、それぞれが2分類され、燃糸文期と条痕文期の時期差によるものである見通しを立てたが、栗谷遺跡の包含層の早期の遺物が、燃糸文期と条痕文期に分かれていることも遺構の検出状況を反映しているのかもしれない。

早期以外の遺物に目を向けると、前期の遺物に関しては出土していない訳では無いが、早期、後期の遺物と比較すると、浮島期、興津期の遺物が若干出土しているものの出土量は激減する。遺構については、包含層調査地区では検出されず、台地南側で黒浜期の住居跡が2軒検出されている。包含層調査が行われた台地北側では、前期の拠点としては利用されなかったようである。印旛沼にほど近い栗谷遺跡においては、縄文前期の海進現象の影響も受け、立地環境の変化を引き起こしたのかもしれない。

続く中期段階になると遺物出土量が若干増える。中期に関しては、加曾利E期の遺物が主体となって出土した。また、五領ヶ台期の遺物が極少量出土している。阿玉台期の遺物も五領ヶ台期同様、極少量出土している。中期初頭から前半にかけてが、栗谷遺跡における縄文時代の空白期であると言えるだろう。

後期に関しては、早期に次ぐ出土量がある時期で、中でも堀之内期の遺物が主体となっていた。後期の遺物が比較的多く出土した事については、包含層調査を実施した地区が後期の住居跡、土坑及びその他の遺構が検出された地区と重なっていたこともあり、その影響であると思われる。その他の遺構のなかでは、第1項でも触れたが、住居跡を思わせる例もあり、包含層からの出土状況と、遺構の検出状況から、堀之内期の集落が存在していた可能性があるだろう。

第3項 まとめ

以上雑駁な文章を連ねてきたが若干のまとめを行いたい。

早期 遺物包含層の遺物を中心に燃糸文期と条痕文期とに大別される。燃糸文期は夏島期を中心にしながら、栗谷遺跡全体にわたり井草期から稲荷台期に至るまで遺物が細々と出土している。但し、燃糸文終末期にあたる花輪台式の明確な遺物は出土しなかった。花輪台式期以降の空白を経て、早期の主体である条痕文期は、野島期を中心に展開し、条痕の細かい古い段階と、条痕の粗い新しい段階の2期に区分される。栗谷遺跡の条痕文系土器の特徴として、条痕の区画に微隆起ではなく沈線による区画を主な手法として用いている。

早期の遺構である炉穴・陥穴についても2分類でき、燃糸文期と条痕文期の時期差を反映しているようである。

前期 それまで主たる利用地点であった台地北側を離れ、黒浜期に台地南側縁辺部に利用地点を移し集落を営む。台地北側では浮島、興津期の遺物が細々と出土している状況になる。

中期 前半は、遺物として五領ヶ台期に僅かな痕跡があるものの阿玉台期に空白期があり、後半の加曾利E期になると再び、台地北側縁辺部に拠点が戻ってくる。

後期 早期同様、後期の遺物の出土量は多く、加曾利E期に引き続き台地北側縁辺部が拠点となる。主体をなす時期は堀之内期で、次いで称名寺期の遺物が多い。

中期、後期に関しては、加曾利E期の竪穴住居跡が2軒、堀之内期の竪穴住居跡が1軒検出されているが、遺物の出土状況その他の事柄から、本来的な住居数は更に多かったと推測される。

以上が栗谷遺跡の縄文時代の大きな変遷であるが、筆者の力量不足から充分な検討を加えることができなかった。同じ台地上に隣接して所在する上谷遺跡との関連を考慮に入れるとまた違った様相も見えてくるだろう。上谷遺跡と共に分析の深化をせねばならない。栗谷遺跡の整理は、まさに今、始まったばかりである。

第2節 弥生・古墳時代

弥生・古墳時代の遺構としては、まず、弥生時代中期宮ノ台期の遺構が堅穴住居跡5軒、方形周溝墓11基、土坑1基が調査されている。ついで弥生時代後期の住居跡94軒、土坑14基、その他の遺構5基が調査された。方形周溝墓は5基検出されたが確実なもの2基で、他の3基については、尚検討を要する。

古墳時代の遺構として前期の堅穴住居跡が23軒が調査され、ついで中期の住居跡5軒、後期の住居跡3軒が調査された。

第1項 弥生時代中期

弥生時代中期については第2分冊の段階で小結を行い、その要点をまとめると以下のとおりである。

- 1) 宮ノ台期の5軒の集落については、土器型式差として現れるほどではないが2時期に区分することが可能である。
- 2) 方形周溝墓群についても2時期の区分があり、集落の時期区分と墓域の時期区分とが対応関係にある。
- 3) さらに方形周溝墓群については3～4基が1単位となり、2系統の群に分かれる。
- 4) 方形周溝墓の墓域構成原理については、同世代構成員が死亡順に埋葬され最終的に3～4基、1単位を完成させる。その1単位は、首長墓というより家族墓的性格が強い。

次に問題となるのが栗谷遺跡の宮ノ台期の集落および墓域が他の遺跡とどのような関係にあるかということになる。若干の比較検討を行いたい。

まず、集落について参考となるのが佐倉市大崎台遺跡で(註4)、288号住の主な出土遺物と、栗谷遺跡1期にあたるA050及び次の段階(2期)にあたるA051の主な出土遺物を比較したものが図202、及び図204になる。大崎台288号住の壺形土器において櫛描の手法が残っている点、広口壺における櫛描文の施文形態、甕形土器における全体的な器形及び器面調整など栗谷A050と類似する点が多い。ただし壺形土器全般については、栗谷2期にあたるA051の壺形土器と類似する点が多いようである。調査・整理を担当された柿沼修平氏は大崎台遺跡の宮ノ台期の集落について4期区分をされ、288号住については、II期に該当するとされている(註5)。当然若干の時間差はあるだろうが、栗谷遺跡A050は大崎台288号住とほぼ並行関係にあると見て良いのではないだろうか。

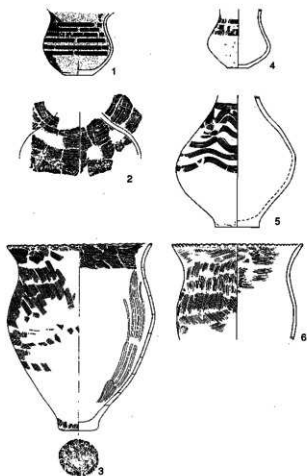


図206 1～3大崎台遺跡・4～6栗谷遺跡出土遺物

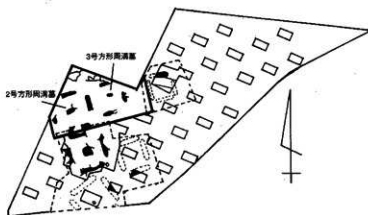


図207 逆水遺跡遺構配置図

次に方形周溝墓についてであるが、八千代市内の例として八千代市米本に所在する逆水遺跡(註6)の例を挙げたい。栗谷遺跡から直線距離にして約2.5kmという至近距離にあり、地形的には印旛沼の氾濫で形成された谷津によって栗谷遺跡とは区切られ、谷津を隔てた一つ西側の台地と言え、地形的に栗谷遺跡に非常に近似している。この逆水遺跡においても宮ノ台期の方形周溝墓群が検出されている。

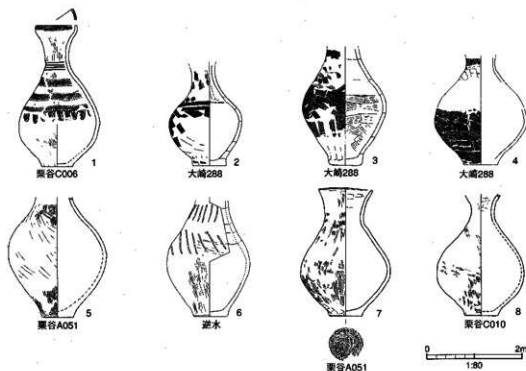


図208 栗谷遺跡1.5.7.8・大崎台遺跡2~4・逆水遺跡出土遺物6

遺構配置を示したものが図205になる。部分的な調査にとどまっている為、結論には高慎重にならねばならないが、ここでも4基1単位の墓域構成が見られる。また、出土遺物であるが、2号方形周溝墓から壺形土器が出土している。これを栗谷遺跡2期に当たるA051及びC006・C010出土の遺物、更に前述の大崎台遺跡288号住出土の遺物と比較したものが図206になる。逆水遺跡出土の壺(6)と栗谷遺跡A051出土の土器が記号文を持つ土器であることも注目されるが、A051及び大崎台288号出土の壺とはほぼ同時期の所産で栗谷2期に平行すると考えて良いだろう。

栗谷遺跡出土土器と大崎台288号住及び逆水遺跡1号方形周溝墓出土土器と比較した時、若干の時間差はあるものの、この3遺跡が極めて近い時期に同時に存在していた状況を窺い知ることができる。大崎台遺跡は宮ノ台期の環濠を持つ大集落として知られているが、大崎台288号が営まれていた頃(大崎台遺跡2期)、栗谷遺跡においても短い期間の中で取まる小規模集落が営まれていたと言える。逆水遺跡においては宮ノ台期の集落は検出されていないが、おそらくは同時期に集落が営まれていたであろう。

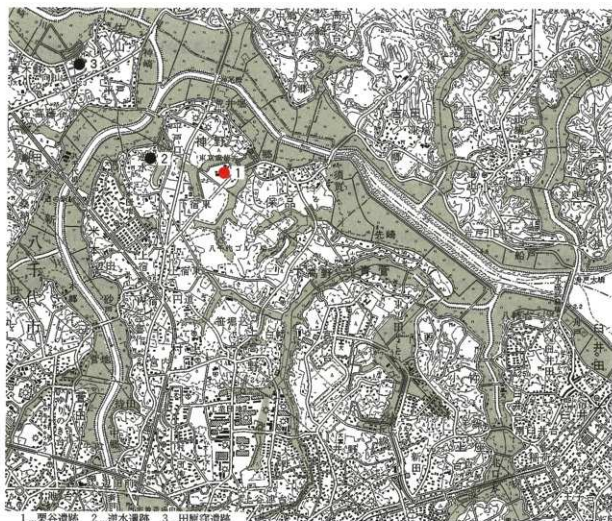


図209 弥生中期遺跡分布図

栗谷遺跡を中心に大崎台遺跡、逆水遺跡との若干の比較を行い、印旛沼南岸域における宮ノ台期の集落を概観し、3遺跡が宮ノ台期の中でもほぼ同時期に存在していたことを述べてきたが、八千代市内における宮ノ台期の集落として必ず考慮しなければならないのが、八千代市佐山所在の田原窪遺跡(註7)である。未整理のため詳細は不明であるが、宮ノ台期の45軒の環濠集落が調査されている。田原窪、逆水、栗谷遺跡がほぼ2.5km前後の等間隔に位置しているのに対し、栗谷遺跡と大崎台遺跡の間には距離があきすぎている。大崎台遺跡周辺の遺跡(註8)では六崎貴船台遺跡、臼井屋敷などがあり、宮ノ台期の方形周溝墓群が検出され、これらの遺跡と大崎台遺跡との距離も3km前後である。推論の域を超えないが、栗谷遺跡と大崎台遺跡の間に4もしくは5遺跡程度の宮ノ台期の遺跡が存在する可能性がある。環濠を持つ、持たないは、おそらく時期差に起因する事だろうが(註9)、こうした大集落、小規模集落が印旛沼南岸域においてほぼ等距離で同時存在の遺跡として展開する様相は興味深い。印旛沼北岸では宮ノ台期の遺跡が極めて少なく(註10)、同じ印旛沼周辺でも北岸と南岸では宮ノ台期の様相が一変している。印旛沼南岸の宮ノ台期の集落として大崎台遺跡が目されて久しいが、栗谷遺跡の調査、整理を通し、印旛沼南岸域の宮ノ台期の遺跡の状況が僅かでも明らかになり、南岸と北岸の状況差が何に起因するかと言った、新たな問題設定ができたことなど、栗谷遺跡の意義は大きい。最後になったが、八千代市を中心とした印旛沼周辺の宮ノ台期の遺跡の分布図を掲載し、弥生中期の考察を終わりたい。当地域における概期の研究の一助になれば幸いである。

第2項 弥生時代後期

弥生時代後期については、栗谷遺跡の中心となる時期であり、栗谷遺跡全体で竪穴住居跡92軒、方形周溝墓2基、土坑14基、その他の遺構5基が調査された。

(1) 弥生時代後期の出土遺物について

1 研究略史

栗谷遺跡の所在する印旛沼周辺の弥生後期の土器については、南関東系の土器とも北関東系土器ともつかない独特な土器が出土している。栗谷遺跡においてもその例外に漏れず、多種多様な土器が出土している、本文中にあって、「所謂、印手系土器」と総称して記述をしてきたが、この間の整理を経て感じたことを若干述べてみたい。

印旛沼及び手賀沼周辺の弥生後期の土器について注目したのは菊地義次氏であった(註11)。印旛沼、手賀沼周辺に関して、北関東とも南関東ともつかない独特な土器を出土する、まさに南関東と北関東との混交する地域であるとの指摘で、1961年のことであった。菊地氏の指摘は、この地域における弥生土器研究の出発点であった。注意されるのはこの時点では、印手系という語は使われていない。

その後1970年代に入り発掘調査が増加する中、「この種」の土器をめぐる、多種多様な評価が生まれる。注目すべき調査、報告等を列記していくと、1974年、佐倉市臼井南遺跡の調査において、頸部に輪積痕を残し胴部に附加条縄文を施文する土器が出土し、臼井南式の提唱の契機となった。当時はこの土器を久が原式の特徴な土器と捉えていたようである。1970年代後半に入ると、(財)千葉県文化財センターによる調査、整理成果から印手系という語が提唱されるに至った。この間、その他にも北関東類似の土器或いは長岡系土器等の呼ばれ方をされ、評価が定まらない状況が、今日に至るまで続いている。そうした状況の中、当時あって印旛沼南岸において最大級の弥生後期の集落遺跡(約60軒)として佐倉市江原台の調査がされ、江原台遺跡及び周辺遺跡の出土土器からこの地域の編年案が提示された。江原台編年では、出土土器について壺系統の土器、壺系統の土器として、それぞれをいくつかの類型に分類し、それぞれの系統ごとに編年している点にある。注意されるのは櫛描文系土器について後期の後半に位置づけていることである。何れにせよ、所謂、印手系土器の本格的な研究の始まりと見て良いだろう。

この間の他地域の研究として注目されるのが鈴木正博氏の一連の研究である。鈴木氏は茨城県を中心に弥生土器の編年研究のなかで、多系統の土器が時間的、空間的に多種多様の複合を重ね連鎖していく状況を首尾一貫して説かれている。この視点は印旛沼周辺の後期弥生土器を考える上でも必要な視点と思われる。

1980年代に入り、大沢孝氏は、それまで後期後葉と位置づけられていた縦スリットをもつ櫛描文系土器を、佐倉市大崎台遺跡その他の出土土器の分析を通し中期末から後期初頭の所産である見解を提示し、さらには、印旛沼周辺を更に4つの小文化圏を設定し、混沌とする後期弥生土器の整理を試みている。大沢氏の研究は、当地域において、大崎台タイプの提唱につながり、それまでの後期櫛描文系土器を中期末から後期初頭の間に位置づけた点に意義がある。大沢氏以降の論点としては、所謂、印手系土器の諸様相が、果たして、地域差によるものか、時期差によるものかという点が問題になる。

その後も資料の蓄積だけは着実に増加する中、栗谷遺跡の所在する八千代市内においても市域中央を流れる新川の西岸にあたる萱田遺跡群において弥生後期の大集落(註12)が調査され、所謂、印手系土器とされていたものの一部が、古式土器と共伴する例が報告される。こうした事例が増えるにつれ、印手系土器が時期的変遷をたどれるという見解が強まっていく。

表115 印手系土器研究略史

八千代市及び周辺地域における‘印手系土器’研究略史	
年 代	〔論文・報告書等〕……コメント等
1961	斎地 義次 『印手・手賀沼周辺地域の弥生文化』（『印手手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』早稲田大学出版部） ……印手系土器研究の出発点、印手系土器という語はまだない。
1974	祐沼 修平 『印手沼周辺地域の弥生時代遺跡』（『奈良』13） 古内 茂 『房総における北関東系土器の出現と展開』（『ふさ』5・6合併号） 熊野 正也 『南関東における弥生文化の研究（1）』（『史観』4） 『千葉県後子市佐野原遺跡発掘調査報告』 佐倉市教育委員会・佐倉市遺跡調査会 『原重』 生谷境谷遺跡（後期住居跡6軒） 飯重新垣遺跡（後期住居跡5軒）
1975	（房総資料刊行会） 『阿玉北』……中期末～後期初頃の遺跡。蓋形土器（栗谷・吉見台型）の出土。 佐倉市教育委員会・佐倉市遺跡調査会 『臼井南』……臼井南式の提唱の契機。当時は久が塚式の特徴な土器と捉えていた。 波戸A地点（後期住居跡3軒） 石上I地点（後期住居跡4軒） 石上III地点（後期住居跡2軒） 八千代市教育委員会・おおびた遺跡調査団 『おおびた遺跡』……北関東系土器（長岡・十王台式）の影響と捉える。（後期～古墳前期住居跡7軒）
1976	鈴木 正博 『十王台式理解のために（1）』（『常総台地』7） 『十王台式理解のために（2）』（『常総台地』8）……常陸地域からの研究 吉高家老地遺跡調査会 『吉高家老地遺跡』（後期住居跡5軒）
1977	（財）千葉県文化財センター 『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書。一第1次・第2次調査』（後期住居跡7軒） 『東寺山石神遺跡』……（あじき台型）蓋形土器の出土。（後期住居跡8軒） 野間台・占屋敷遺跡調査団 『野間台・占屋敷』 野間台遺跡（後期住居跡7軒） 占屋敷遺跡（後期住居跡7軒）
1978	熊野 正也 『佐倉市・臼井南遺跡出土の後期弥生式土器の意味するもの』（『MUSEUMらび』9） 齊木勝・深沢克友 『房総における弥生文化の摂取とその後について』（『研究紀要』3（財）千葉県文化財センター） ……‘印手系’という語が使われ始める。 （財）千葉県文化財センター 『佐倉市飯合作』（後期住居跡41軒）
1979	高野寺畑遺跡調査団 『高野寺畑遺跡』……東中梗式～十王台式を連める出土例。‘寺畑複合’（後期住居跡1軒） 鈴木 正博 『高野寺畑の弥生土器について』（『高野寺畑遺跡』高野寺畑遺跡調査団） 鈴木 正博 『十王台式理解のために（3）』（『常総台地』10） 江原台第1遺跡調査団 『江原台』……当時あって、印手沼南岸最大級の弥生時代後期の集落遺跡（約65軒） ‘印手系’土器の本格的な研究の始まり。 （財）千葉県文化財センター 『千葉市城の藤・西風敷遺跡』（後期住居跡15軒） 八千代市遺跡調査会 『室田町川崎山遺跡』（後期住居跡1軒）
1981	飯塚 博和 『千葉県柏市笹原遺跡』……北関東からの視点の重要性を指摘。 飯原遺跡調査会 『千葉県柏市飯原遺跡』（後期住居跡3軒） 吉高入谷遺跡調査会 『吉高入谷遺跡』（後期住居跡4軒）
1982	川崎 純徳 『勝田市史別編 東中梗遺跡』 五十嵐利勝 『宇都宮市雀宮町内原発見の弥生土器の紹介と若干の考察』（『下野考古学』4） ……所謂、二軒匠式の区分について

1983	<p>大沢 孝 「下総地方における北関東系土器と称される後期弥生式土器について」(『史観』14) ……大崎台タイプの提唱。印旛沼を中心に4つの小分布圏を設定。</p> <p>小林 清隆 「生成期の印手式土器について」(『研究連絡誌』2(財)千葉県文化財センター)</p> <p>加藤 修司 「印手式子壺一型式としての印手式へー」(『研究連絡誌』4(財)千葉県文化財センター)</p> <p>浜田 晋介 「印旛沼周辺地域における弥生時代後期の様相—あじき台遺跡出土土器を中心として—」(『物質文化』41) ……印旛沼北岸の様相と蓋形土器について</p> <p>(財)千葉県文化財センター 『関戸遺跡』『成田新線建設事業地内埋蔵文化財報告書』…中期～後期の遺跡あじき台遺跡調査図</p> <p>『あじき台遺跡—千葉県印旛郡栄町所在の調査—』…(あじき台型)蓋形土器の出土。(後期住居跡20軒)</p>
1984	<p>八千代市遺跡調査会 『阿蘇中学校東側遺跡』(後期住居跡10軒)</p> <p>(財)千葉県文化財センター 『八千代市権現後遺跡』…古式土師と印手系との併存例(後期住居跡73軒)</p>
1985	<p>(財)千葉県文化財センター 『八千代市北海道遺跡』(後期住居跡1軒)</p> <p>平賀遺跡群発掘調査会 『平賀』(後期住居跡20軒)</p>
1986	<p>小高 孝雄 「『北関東系土器』の様相と性格」(『研究紀要』10(財)千葉県文化財センター)……D総型の提唱</p> <p>藤岡 孝司 「印旛沼南岸地域における後期弥生集落の一形態」(『研究紀要』10(財)千葉県文化財センター)</p> <p>(財)印旛郡市文化財センター</p> <p>第2ユーカリテ丘宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書—上庫矢橋遺跡—(弥生後期～古墳前期住居跡27軒)</p> <p>(財)千葉県文化財センター 『八千代市ツサル山遺跡』(後期住居跡34軒)</p> <p>八千代市教育委員会 『平戸遺跡』(後期住居跡9軒)</p>
1987	<p>川崎 純徳 「北関東の彌生紋土器」(『弥生文化の研究』4)</p> <p>(財)千葉県文化財センター 『八千代市赤戸遺跡』</p>
1988	<p>神沢 勇一 「シボジウム房輪の弥生文化—後期北関東系土器の分布と変遷—」(『房総風土記の丘年報』12)</p>
1990	<p>鈴木 正博 「新木先史土器研究の課題(1)」(『古代』89)……新木県東河田遺跡出土資料の解年の位置づけ (所説、二形器式と十五台式等の編年的關係について)</p> <p>柿沼 修平 「宮ノ台文化の進出と変革」(『京和』28)</p>
1991	<p>小倉 淳一 「北総地域における弥生時代後期の土器様相について」(『法政考古学』16)</p> <p>(財)千葉県文化財センター 『八千代市白崎前遺跡』(後期住居跡17軒)</p> <p>(財)印旛郡市文化財センター 『天神台・ヤジタ遺跡発掘調査報告書』</p>
1992	<p>小森 哲也 「第6章第2節 成果と問題点—弥生時代—」(『三ノ谷東・谷野野北遺跡』(財)栃木県文化振興事業 部埋蔵文化財センター)</p> <p>川井 止一 「2弥生時代の福午」(『茨城歴史資料』茨城県立歴史館)</p> <p>(財)栃木県文化振興事業部埋蔵文化財センター 『三ノ谷東・谷野野北遺跡』</p> <p>(財)印旛郡市文化財センター 『トヶ前遺跡発掘調査報告書』(後期住居跡11軒)</p>
1993	<p>海老沢 聡 「十浦市原田北遺跡群における南関東系土器と地域交流」(『研究ノート』2(財)茨城県教育財団)</p> <p>(財)印旛郡市文化財センター 『高岡遺跡群』高岡大福寺遺跡(後期住居跡12軒) 高岡大山遺跡(後期住居跡24軒)</p>
1994	<p>小沢 秀成 「東関東における後期弥生土器の成立過程」(『史観』25)</p> <p>(財)印旛郡市文化財センター 『宮内遺跡発掘調査報告書』(後期住居跡6軒)</p> <p>『印旛村道平賀橋予定地内埋蔵文化財調査報告書』山田諏訪遺跡(後期住居跡1軒)</p> <p>『古高浅間古墳』(後期住居跡3軒)</p>
1995	<p>(財)印旛郡市文化財センター 『八木字山遺跡発掘調査報告書』(後期住居跡4軒)</p> <p>『井ノ崎遺跡』(後期住居跡7軒)</p>

1996	(財)印旛都市文化財センター 『臼井屋敷遺跡』(後期住居跡1軒)
1997	深谷 昇 『臼井南式土器について』(『弥生土器シンポジウム-南関東の弥生土器』弥生土器を語る会)・…あじき台式の埴輪 石川日出志 『御新田式土器をめぐる』(『弥生土器シンポジウム-南関東の弥生土器』弥生土器を語る会) (財)印旛都市文化財センター 『古見台遺跡B地点』…蓋形土器(栗谷・吉見台型)の出土。(後期住居跡15軒)
1998	(財)印旛都市文化財センター 『平賀山D10号墳』(後期住居跡1軒)
1999	高花 宏行 『印旛沼周辺地域における弥生時代後期の土器の変遷について』(『和紀』37) 八丁代市川崎山遺跡調査会 『八丁代市川崎山遺跡』(後期-終末期住居跡23軒) (財)印旛都市文化財センター 『ちばろく遺跡』(後期住居跡5軒) (財)千葉県文化財センター 『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連遺構文化財調査報告書』 印西市嶋神山遺跡(弥生後期-古墳前期住居跡21軒) 臼井谷奥遺跡(後期住居跡1軒)
2000	(財)印旛都市文化財センター 『萩原長者遺跡 狛谷塚群』・萩原長者遺跡(後期住居跡19軒) 八丁代市遺跡調査会・八丁代市ヒノ山遺跡調査会 『上ノ山遺跡b地点・c地点発掘調査報告書』(後期住居跡2軒)
2001	高花 宏行 『臼井南遺跡出土弥生土器の再評価』(『佐倉市史研究』14)
2002	小玉 秀成 『通井遺跡の板井式土器-板井式土器の南下と阿玉台北式および周辺型式の設定-』(『玉里村立資料館報』7)

90年代に入り、研究は新たな段階に入る。他地域からの研究であるが、小玉秀成氏は、広く東関東という視点から、茨城県と千葉県北部を含めた常総地域の後期土器の成立過程を検証されるなかで、千葉県の後期土器成立過程にも触れている。小玉氏は、大崎台タイプと呼ばれる縦スリットをもつ柳井文系土器の中にも変遷が見られ、その変遷等は、印旛沼単独のものではなく利根川南岸、北岸域で運動して行われていることを明らかにし、後期土器成立過程において、足洗式土器と福島県の天神原式土器、或いは栃木県の縄文施文の複合口縁をもつ土器群等が深く関与しているとしている。小玉氏も前述の鈴木氏同様、各地域の後期土器成立背景の要因として、系統、系譜の違いを挙げ、どの系統のどの属性を継承するか、その結果が時間差と成り、各地域の地域差として現れるとした。印旛沼周辺の土器群の研究としては、高花宏行氏は臼井南遺跡出土土器に特徴的な輪積痕を有する甍形土器の分析を通じ、それらの甍が印旛沼南岸のみならず、北岸からも出土する事などから、輪積痕を有する甍形土器が地域差ではなく時期差を示しているものとして、当地域の甍形土器を類型別に4段階設定を試みている。

印旛沼、手賀沼周辺出土の土器に特徴的な分布圏があると言うより、印旛沼、手賀沼周辺に多系統の土器が混在していると考えの方が妥当であろう。印手系土器或いは印手式土器の名称は、印旛沼、手賀沼周辺から出土する特徴的な土器と言うことで、系統の差、時期の差の峻別が不鮮明の段階では一定の呼称として機能してきたが、系統差、時期差が明らかに成るにつれ見直しが必要と思われる。一方、印手系土器が時期的変遷がたどれることが明らかに成るに従い、臼井南式土器が再評価される動きが見られる。輪積痕を持ち、(S字状結節文と)附加糸縄文を施文する系統の土器を臼井南系として、所謂、印手系土器の中から峻別していくことには意味があるだろう。そうした意味で高花氏の研究は当地域における一定の水準を表すものと思われ、小玉氏の研究成果と合わせ考えるに、当地域における後期土器の様相にはいくつかの系統があり、それぞれの系統で時間差が生じ一見複雑な状況を呈していると考えられる。所謂、印手系土器の検討をする場合、印旛、手賀沼周辺の弥生土器を分析の対象とするのではなく、もう少し広い範囲で、例えば、利根川下流域といった枠組みで当地域の後期弥生土器を見つめ直す必要がある。また、一般に土器群の複雑な様相は、その大抵の場合成立の背景と成立の過程を明らかにする事によって、理解がしやすくなることと同じく当地域の後期弥生土器の様相を知る手がかりは、中期末の段階まで遡って考える必要がある。当地域の弥生土器の編年研究が曖昧となっていることの原因の1つに、そうした対象地域の設定の狭さと対象とする時間幅の狭さも挙げられるだろう。

2 分類の視点

こうした研究史を踏まえて、栗谷遺跡の出土遺物の検討を加えていきたい。前項までに述べてきたことと矛盾する事になるが、本報告は、あくまでも栗谷遺跡の調査報告であるため、まずは、栗谷遺跡出土の後期弥生土器を対象に検討していきたい。中でも多種多様の土器が出土しているのでも対象とする土器を甕形土器としたい。壺型土器、鉢形土器も出土しているが、これらの土器は久が原、弥生町式に代表される南関東系の土器の為、当然共伴関係の中で参考とはするが、対象からはずしたい。また、栗谷遺跡においては、蓋形土器が出土しているが、時期区分の指標になるほどの出土数が無い。つまりは、出土土器の中から、南関東系の土器を除き、出土数が多く、文様、器形の変化に富むものを対象とする。栗谷遺跡出土の後期弥生土器と思われる土器の内、285点が対象となる。

分類の基準としては、

口唇部の施文の有無、

口縁部の形態差（複合、単純）と施文の有無、

頸部の施文方法（1 輪積痕、2 無文、3 櫛描、4 捻糸、5 縄文、6 附加条縄文）、

胴部の施文方法（1 無文、2 捻糸、3 縄文、4 附加条縄文）

として行ってみた。胴部の施文方法として櫛描も理論上あり得るのだが、栗谷遺跡出土土器の中に胴部櫛描文を持つ土器が無いため、これも分類の基準対象外とした。尚、印旛沼周辺出土の後期弥生土器の底部には、木葉痕がある場合が多いが、これは、文様として意図的に施文されたというより、土器制作上で結果として残されるものと考え、これも分類の基準からはずした。その結果を示したものが、表117になる。分類をした土器の内、破片資料等を除き、全体の器形及び文様構成が類推可能なものを抜粋したものが、表116になる。

この作業結果で、感じたことを若干述べていきたい。まず、共通する項目としては、胴部の文様であるが、捻糸、縄文、附加条縄文の原体の差はあるが、文様構成として斜縄文になり、羽状構成をとるのが極めて少ない。そして口縁部で複合口縁のものには、縄文(有文)を施文する場合が多い、ということである。相違点については、頸部については、無紋のもの、櫛描文のもの、輪積痕のものに分かれ、櫛描文と無紋のものは口縁が複合口縁となる場合が多い。と同時に、櫛描文を持つ土器は輪積み痕及びS字状結節文やS字状結節による区画文が、文様構成上同一の土器に現れてこない。逆に輪積み痕を持つ土器は、S字状結節文やS字状結節による区画文が同一の土器に現れ、櫛描文が同じ土器に現れてこない(註13)。更に、輪積痕を持つ土器は、胴部が無文のものと胴部に縄文施文が行われるものに細分可能である。しかし、互いに文様構成を異にする土器であるが、両者が同じ住居跡の中で共伴関係をもって出土する事はある。

以上の観察の結果、栗谷遺跡出土の甕形土器について2系統があるということが導き出される。一つは複合口縁を作りS字状結節文とは結びつかないタイプの土器である。頸部に櫛描文を有するものと無紋のものとで2細分が可能である。このタイプの土器で近似している土器としては、千葉県本埜村の宮内遺跡出土の土器が挙げられる。もう一つは、輪積痕を有し、しばしばS字状結節文と結びつくタイプ。白井南出土の土器にみられる系統の甕である。このタイプの土器も、胴部の文様の有無によって2細分が可能である。以後、説明の便宜上、以下のように記述する。

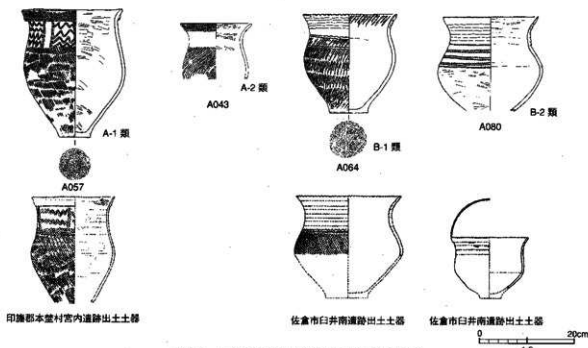


図210 栗谷遺跡弥生後期土器の類別と類例

A類、複合口縁を作りS字状結節文とは結びつかないタイプの土器。

A-1類、頸部有文（櫛描）のもの

A-2類、頸部無文のもの

B類、輪積痕を有し、しばしばS字状結節文と結びつくタイプの土器。

B-1類、胴部有文のもの

B-2類、胴部無文のもの

3 編年案の提示と問題点

この2系統に土器についてそれぞれに時期を検討してみたい。まず輪積痕を持つタイプの土器であるが、比田井克人氏は、輪積痕については、多段のものから徐々に段数が減り、やがて痕跡的になる傾向があるとの指摘をされている(註14)。また、櫛描文をもつ土器のタイプは、前述した小王氏の一連の研究結果から、中期末葉から後期初頭に於いて常総地域の土器に関して縦方向の区画文をもち、大きな連弧文を施文するタイプの土器が、縦スリットに変化し、縦スリット間を充填する文様は、横走文もしくは振幅の小さな波状文に変わる過程を検証している(註15)。これら2点の見解は、前者では、A080・A083・A069・A013・A155等に、後者ではA057・A151・A053等で、それぞれに栗谷遺跡においても追認できる状況といえる。

また、A142については、良好な相伴関係を見だしていないが、口縁部下にイボ状突起があるため、後期の中でも後半に位置づけた(註16)。

更に、同じ住居跡から出土している土器の相伴関係を検討し、系統差間の同時代(同時期)性を抽出してみたい。図209を参照されたい。以下、遺物の番号は報告書掲載番号同一である。

まず、A043であるが、2は複合口縁をもち、櫛描の縦区画のある土器(A-1類)で6と相伴する形で出土している。6は2と同じく複合口縁をもち、頸部が無文の土器(A-2類)である。この2点については同時期として認めて良いだろう。

表116 栗谷遺跡 弥生後期土器分布表(抜粋)

遺構 遺物	口 唇		口 縁				頸 部					胴 部				備 考			
	無 文	有 文	単 純		複 合		輪 郭 痕	無 文	構 指	摺 糸	縄 文	附 加 糸	区 画	無 文	摺 糸		縄 文	附 加 糸	
			無 文	有 文	無 文	有 文													
A013-1	○							○						○					
A017-9	○			J					波状							○		南関東系共伴	
A017-10	○		○					○						○					
A017-27	○		○					○								○			
A017-28								○								○			
A033-3		押圧		LRJ				○											
A043-2	○					RLJ			4本							RL			
A043-6		押圧				RLJ		○								RL			
A064-1		波状	○				○	○					S結			○			
A069-3			○				○							○					
A072-3	○		○					○										○	
A072-5	○			波状		輪郭		○						○					
A072-6						附加糸		○										○	
A080-3									○									○	
A080-5		押圧	○				○						S結						
A081-1									波状									○	
A081-2				附加糸状					連弧									○	
A081-4		波状	○				○	○					S結					○	
A081-5	○		○					○					S結			○			
A081-6							○							○					
A081-7							1段							○					
A081-8		押圧	○				1段	○						○					
A081-9								○					S結					○	
A081-17									○										○
A083-2							○						円形 刺突 円形 刺突	○					
A083-3							○							○					
A083-4							○							○					
A091-1	○					摺糸		○							○	○			
A091-2									○										○
A096-2																			○
A141-1																			○
A142-1		附加糸		両面より 波状部								○							
A142-2													S結		○				
A146-1		J	○								S結 区画		S結	○					
A151-3																			○
A151-4		附加糸			附加糸				3本										○
A154-1	○							○											○
A155-1		押圧	○				1段	○					刺突	○					
A155-2		押圧	○					○						○					白附箋
A155-3		附加糸	○					○					S結						○
A156-13													S結						○
A160-2					○			○						○					

J：縄文 S結：S字状結節 押圧：原体押圧

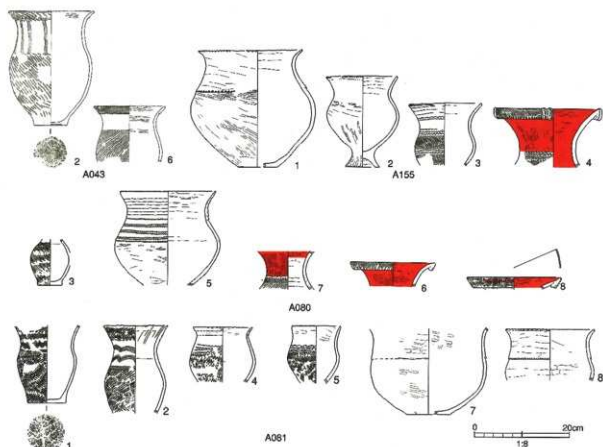


図211 A043・A080・A081・A155 主要出土遺物

次にA080を見る。3は口縁部分は欠損しているが、胴部の上半に櫛描を用いている。この3に共伴する状態で、輪積痕をもち、S字状結節文と結びつく土器5(B-2類)が共伴している。これらも同時期として認めたい。

更にA155であるが、1は、輪積を1段のみもつ甕(B-2類)で、輪積痕の無い台付甕2(B-2類)が共伴している。同時に1は3(B-1類)の甕とも共伴関係にある。同様に同時期と考えて良いだろう。

また、A155とA080の関係は、それぞれ南関東系土器が共伴している。ほぼ同様の土器だが、B-2類土器における輪積痕の少なさから若干、A155の方が後出的と捉えた。本来、共伴例を増やして検討すべきだが、栗谷遺跡における数例から、A-1類とA-2類、B-1類とB-2類はそれぞれ、時期差として現れるのではなく、系統差として現れてくるのが類推可能である。以上のことを考慮し甕の2系列を整理したものが図210になる。

ここで、若干の問題点にも触れておきたい。最大の事柄はA-1類とB-2類とが、それぞれの典型的な土器と共伴していないことである。系統としての差は認められるとしても、同時性が弱く、時期差として現れる可能性を否定できない。また、A081出土の土器にも注意が必要である。A081-2は連弧文系の櫛描文土器でS字結節文と輪積みを用いていないことから、A-1類に入りそうであるが、B-2類のA155-1類似の土器と共伴もしている。A081出土の(7)・(8)を重視するならば、新しい段階のものとなるが、栗谷遺跡出土の櫛描文系土器の中で連弧文の系譜が追えない。連弧文系の土器をまた別の系統として設定した方が良いのかもしれない。

また、全体的な事柄として、各系統ごとの変遷はある程度追えるにしても系統間の相対的な位置関係について、論証不足の感がある。他遺跡出土の土器等と比較検討をし、検証を深めていきたい。

4 まとめ

以上、個々の土器についての論証不足もあり、いくつかの事象についての前提条件を認めた上で初めて成り立っている変遷観となったが、栗谷遺跡出土の後期弥生土器のまとめとしては、2系統の土器があり、1つは、櫛描文系土器の系統で、もう1つは、臼井南式に代表される、輪積み痕とs字状結節文を持つ系統である。そして、櫛描文系の土器については、縦スリットに櫛描波状文を充填する形態が、退化する方向で、輪積み痕系の土器については、輪積みが退化する方向でそれぞれ2から3段階に区分できると言えよう。そして、最後の段階に口縁下にイボ状突起を持つ土器が出現する段階に至る。全体として4段階程度に区分することができよう。

A-1類	A-2類	B-1類	B-2類

図212 栗谷遺跡 弥生後期における木製厨土器家屋

表117 栗谷遺跡 弥生後期土器分析表

遺構 遺物	口 唇		口 縁				頸 部					胴 部				備 考		
	無文	有文	單 純		複 合		輪 指 痕	無 文	樹 指 痕	摺 糸	繩 文	附 加 索	区 画	無 文	摺 糸		繩 文	附 加 索
			無文	有文	無文	有文												
A013-1	○							○						○				
A013-2		刻目				○												口縁片
A013-3													○					底部片
A016-1													○					底部片
A016-2	○					○		○										
A016-3																○		羽状
A016-4								○									○	
A017-9	○			J					波状						○			南関東系共存
A017-10	○		○					○					○					
A017-27	○		○					○							○			
A017-28								○							○			
A018-1													○					
A018-2															○			
A020-1																		器種不明
A020-2															○			
A020-3														○				
A020-4																	○	
A020-5															○			
A020-6															○			
A020-7																	○	
A020-8				RLJ														
A020-9																		○
A023-1															○			
A023-2	○					○												
A023-3		刻目					RLJ											
A023-4									3本									
A023-5																○		
A023-6																		○
A023-7		刻目																
A029-1							J											摺糸
A029-2																		○
A029-3		○					摺糸											
A029-4															○			
A029-5		刻目	○															
A029-6															○			
A030-1			○					1段	○									
A030-2																		○
A030-3																		○
A031-1		刻目													○			
A031-2						J		○								○		
A031-3								○								○		○
A033-3		刻目		LRJ				○								○		
A035-1															○			
A035-2															○			
A036-1															○			
A036-2															○			

遺構 遺物	口唇		口縁				頸部					胴部					備考		
	無文	有文	単純		複合		輪郭集	無文	輪描	摺糸	縄文	附加糸	区画	無文	摺糸	縄文		附加糸	
			無文	有文	無文	有文													
A036-3																		○	
A036-4															○				
A043-2	○					RLJ			4本								RL		
A043-3																	RL		
A043-4															R				
A043-5															○				
A043-6		刻目				RLJ		○									RL		
A045-1																		○	
A045-2																		○	
A045-3	LRJ					LR													
A045-4																			○
A046-1																	LR・RL		羽状
A046-2		○		輪描															
A046-3																	LR・RL		羽状
A046-4																	LR		
A047-4																		○	
A047-5																		○	
A047-6									○										
A047-7		LR				LRJ													
A047-8									○										○
A047-9									○									RL	
D006-1																		RL	
D006-2														○					
A055-1	○					LRJ		○									LR		
A055-2						附加糸													
A055-3																			胴部格子目文
A055-5																			胴部格子目文
A056-1																			○
A057-1		刻目				J+H			○									○	○
A058-1	○				○			○											○
A062-3														○					
A063-1														○					
A063-2																			○
A063-3																			○
A063-4																			○
A063-5																			○
A064-1		波状	○				○	○					S結						○
A064-2																			○
A064-3																			○
A065-2																			○
A065-3																			○
A066-2		波状	○				○												○
A066-3																			○
A066-6														○					
A067-2														○					○
A067-3													○						○
A068-1																			○

遺構 遺物	口 唇		口 縁				頭 部					胴 部				備 考		
	無 文	有 文	単 純		複 合		輪 襷	無 文	櫛 櫛	熱 糸	縄 文	附 加 条	区 画	無 文	熱 糸		縄 文	附 加 条
			無 文	有 文	無 文	有 文												
A068-2						附加条		○										
A068-3																	○	
A068-4																	○	
A068-5																	○	
A068-6		○																
A069-3			○				○							○				
A069-11																		
A071-1																		
A071-2																	○	
A071-3																	○	
A071-4																		
A072-2								○						○				
A072-3	○		○					○										○
A072-4												○						○
A072-5	○			波状		輪襷		○					○					一部羽状S字結節
A072-6						附加条		○										○
A072-7			○					○										○
A072-11																		○
A072-12																		○
A073-1							○							○				
A074-2														○				
A074-3																		○
A074-4																		○
A074-5																		○
A074-6																		○
A076-2																		○
A076-3																		○
A077-1														○				
A077-2													○	○				S字結節
A077-3																		○
A077-4																		○
A077-5	○					附加条												
A077-6																		○
A079-1																		南関東系共件
A079-2							○							○				
A079-3							○							○				
A079-4																		
A079-5																		
A080-3								○										○
A080-4																		○
A080-5		刻目	○				○							S結				
A081-1									波状									○
A081-2						附加 羽状			連弧									○
A081-3													○					○
A081-4		波状	○				○	○						S結				○
A081-5	○		○					○						S結		○		
A081-6							○							○				
A081-7							1段							○				

遺構 遺物	口唇		口縁				頸部					胴部				備考		
	無文	有文	単純		複合		輪 縁 復	無文	梯 描	撚 糸	縄 文	附 加 糸	区 画	無文	撚 糸		縄 文	附 加 糸
			無文	有文	無文	有文												
A081-8		刻目	○				1段	○						○				
A081-9								○					S結					○
A081-10								○										○
A081-11														○				
A081-12														○				
A081-13	○				○			○										
A081-17									○									○
A081-22																		
A082-4																		○
A083-1																		
A083-2								○					同形 網窓 四形 網窓	○				
A083-3								○						○				
A083-4								○						○				
A084-1																		○
A085-1																		○
A085-2																		○
A086-3																		○
A086-4														○				
A087-1									○									
A087-2									○									
A087-3									○									
A087-4															○			
A087-5															○			
A088-4																		○
A088-5															○			
A088-6															○			
A088-8													○					
A089-4																		○
A089-6															○			
A089-7									○									
A089-9															○			
A089-10									○									○
A089-11									○						○			
A089-15															○			
A090-1																		○
A091-1	○						撚糸	○							○	○		
A091-2									○									○
A091-4																		○
A091-6															○			
A091-7																		○
A091-8															○			
A091-9							撚糸								○			
A091-10							J											
A091-11									○									○
A091-12															○			
A092-1																		○
A092-2		附加糸					附加糸											
A092-3							附加糸											

造 構 遺 物	口 唇		口 縁				頸 部					胴 部					備 考	
	無 文	有 文	単 純		複 合		輪 縁 状	無 文	摺 摺	摺 糸	縄 文	附 加 条	反 覆	無 文	摺 糸	縄 文		附 加 条
			無 文	有 文	無 文	有 文												
A036-3																		○
A036-4															○			
A043-2	○					RLJ		4本								RL		
A043-3																RL		
A043-4															R			
A043-5															○			
A043-6		刻目				RLJ	○									RL		
A045-1																○		
A045-2																○		
A045-3	LRJ					LR												
A045-4																		○
A046-1																LR-RL		羽状
A046-2		○		摺摺														
A046-3																LR-RL		羽状
A046-4																LR		
A047-4																		○
A047-5																		○
A047-6								○										
A047-7		LR				LRJ												
A047-8								○										○
A047-9								○								RL		
D006-1																		RL
D006-2														○				
A055-1	○					LRJ	○									LR		
A055-2						附加条												
A055-3																		胴部格子目文
A055-5																		胴部格子目文
A056-1																		○
A057-1		刻目				J+H		○								○		○
A058-1	○				○			○										○
A062-3														○				
A063-1														○				
A063-2																		○
A063-3																○		
A063-4																		○
A063-5																		○
A064-1		波状	○				○	○					S結					○
A064-2																		○
A064-3																		○
A065-2																		○
A065-3																		○
A066-2		波状	○				○											南国東系共伴
A066-3																		○
A066-6														○				
A067-2														○				南国東系共伴
A067-3												○						○
A068-1															○			

(2) 集落について

1 形態分類と群構成について

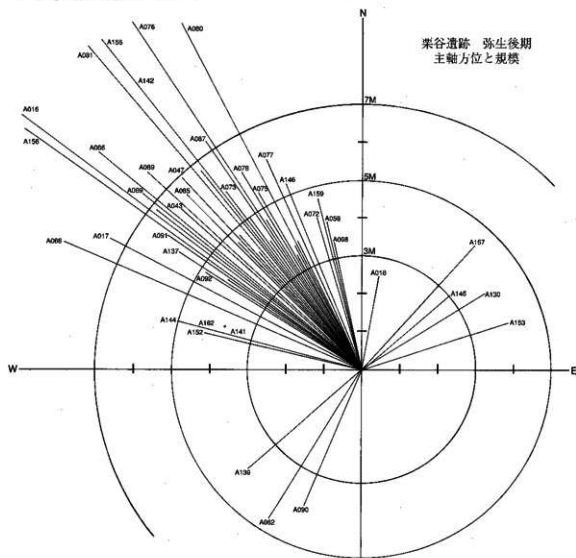


図213 栗谷遺跡弥生後期主軸方位と規模

栗谷遺跡における弥生時代後期の竪穴住居跡は総数92軒が調査された。形態・規模等についてであるが、基本的に2種類に分類できる。1つは、小判形或いは隅丸長方形の平面形で、典型的な4本柱のもので、炉が住居跡中央からやや壁際により、反対方向に出入口施設を持つタイプで、I類とする。11m前後の大型と7m前後の中型及び4.5m前後の小型の住居跡に細別され、それぞれI-a類、I-b類、I-c類とする。代表的なものとして、I-a類がA016・A080、I-b類がA017・A023、I-c類がA046・A045などが相当する。もう1つは、隅丸方形或いは不整形のもので、中心からやや壁際により反対方向に出入口施設を持つタイプで、明確な支柱穴を持たない場合が多い。このタイプをII類とし、何れも小型の住居跡が主体となるが、4.5m前後のものをII-a類とし、3.5m前後のものをII-b類とし細別する。代表的なものとして、II-a類がA033・A035、II-b類A013・A029・A031などが相当する。当然、何れにも当てはまらない、或いはどちらにも該当する折衷型のタイプもあるわけだが、これらの住居跡群が有機的に折り重なり、栗谷遺跡の弥生時代後期の集落を形成している。規模、主軸方位を表したものが図211で、代表的な類型別の住居跡を示したものが図212及び図213になる。

また、弥生後期と考えられる92軒の住居跡であるが、台地全体にいくつかの群を構成している。当然、時期差を考慮に入れなければならないが、隣接している住居跡は何らかの形で関係していると思われるので、栗谷遺跡に広がる集落を小群単位で検討していく視点が必要となる。

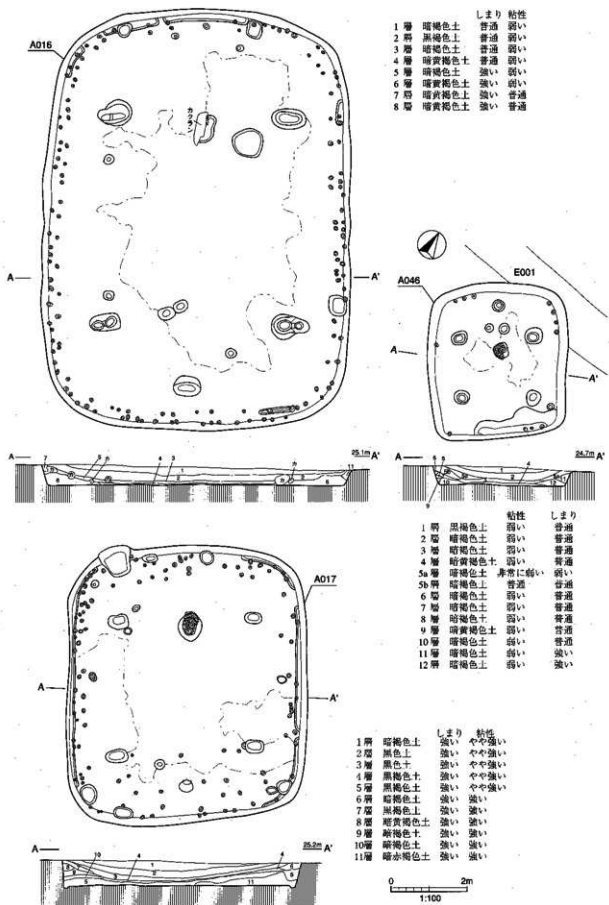


図214 A016・A017・A046

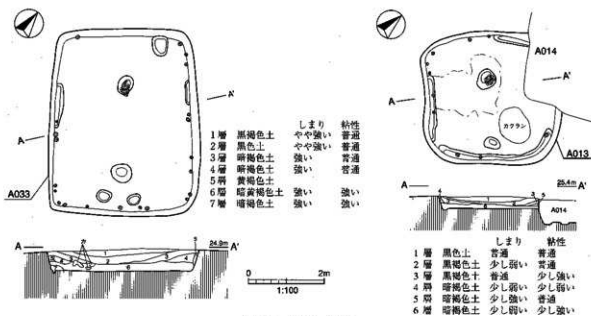


図215 A013・A033

表118 弥生後期群別一覧表

	I-a類 主柱穴4本 主軸11m前後	I-b類 主柱穴4本 主軸7m前後	I-c類 主柱穴4本 主軸4.5m前後	II-a類 主柱穴なし 主軸4.5m前後	II-b類 主柱穴なし 主軸3.5m前後	その他
YA群		A151	A055・A056 A057		A058	
YB群		A091・A132	A131		A092	
YC群	(A071) (A074) A076・A080 A081・A155 A156	A061・A066 A068・A069 A073・A077 A079・A087 A158・A160	A064・A065 A082・A093 A095・A159	A059・A072 A075・A085 A086・A152 A153・A157	A060・A062 A063・A067 A083・A096 A097・A098 A099・A154	A070・A084 A161
YD群	A142		A143 A144・A150	A133・A135 A136・A148	A138・A139 A140・A141 A145・A147	A137・A146 A149
YE群		A043・A047 A087・A089	A045・A046 A088		A090・A130	A129
YF群	A016	A017・A023		A020		A013・A018
YG群			A030	A033・A035 A036	A029・A031	

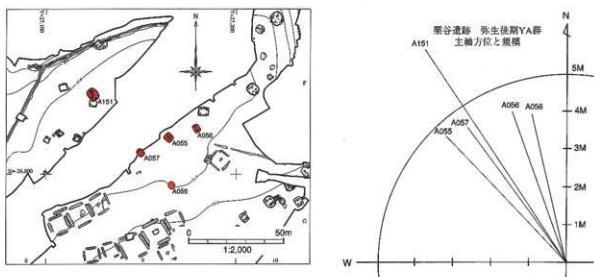


図216 栗谷遺跡弥生後期YA群・YB群 遺構配置と主軸方位と規模

以下、形態分類と群構成から栗谷遺跡の弥生時代後期の集落構成及びその変遷について追ってみたい。

まず、群構成として

YA群をA055、A056、A057、A058、A151の5軒

YB群をA091、A092、A131、A132の4軒

YC群をA059、A060、A061、A062、A063、A064、A065、A066、A067、A068、A069、A070、A071、A072、A073、A074、A075、A076、A077、A079、A080、A081、A082、A083、A084、A085、A086、A093、A095、A096、A097、A098、A099、A152、A153、A154、A155、A156、A157、A158、A159、A160、A161の43軒

YD群をA133、A134、A135、A136、A137、A138、A139、A140、A141、A142、A143、A144、A145、A146、A147、A148、A149、A150の18軒

YE群をA043、A045、A046、A047、A087、A088、A089、A090、A129、A130の10軒

YF群をA013、A016、A017、A018、A020、A023の6軒

YG群をA029、A030、A031、A033、A035、A036の6軒

とする。更にこの群構成に先ほどの形態分類の考察を加えたものが、表118になる。

まず、YA群についてであるが、5軒で構成されるが、一部、未調査区域も含まれる為、実際の軒数は更に増えると考えられる。台地先端部からやや奥まった地点で展開する。YA群の中ではA151が他の住居跡と較べ突出した規模を持ち、遺物の出土量も比較的多い。注目すべきは縄文系土器を主体に出土していることである。更に、同じYA群のA057においても同様に縄文系土器(栗谷A-1類)を出土している。また、A058では縄文系土器は出土していないが、複合口縁を有し、輪積痕を持たない甕(栗谷A-2類)が出土している。A057については、出土遺物の検討からYA群の中でも若干先行する可能性がある。同様にA058は出土遺物の検討から、YA群の中でも若干後出である。更には、立地、形態についても他の住居群が4本柱のI類出あるのに対して、A058は明確な主柱穴を持たないII類であり他とは違和感がある。これらの事から、まずA057が、そしてA151を中心にA055・A056の段階、そしてA058へと変遷が追えそうである。

以上のことから、YA群は、栗谷遺跡の弥生後期集落のなかでも比較的早い段階で定着した集団で、輪積痕+S字状結節文(栗谷B類)の甕を使用しない系統の集団の集落と考えられる。何れにしても前代の宮ノ台期の墓域を避けるように立地していることも興味深い。

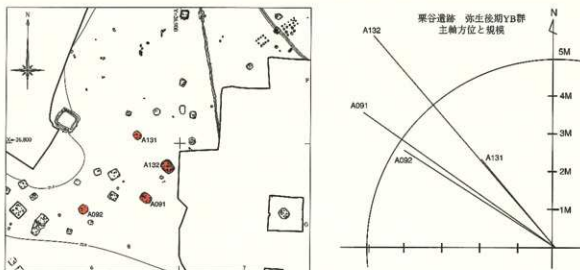


図217 栗谷遺跡弥生後期YB群 遺構配置と主軸方位と規模

次にYB群であるが、4軒で構成されている。台地北側に入り込む小支谷の谷頭付近で展開している。主軸方向をほぼ同じくする大小の住居跡2組で構成されている。YB群に関してA091で櫛描文系土器(栗谷A-1類)を出土し、その他の住居跡も破片資料ではあるが、櫛描文系土器を出土している。YA群同様、櫛描文系土器を持つ集団の集落と考えられ、さらに、破片資料ではあるが、出土した櫛描文系土器の検討から、YA群のA151とほぼ同時期にあると考えられる。

また、YA群、YB群の共通した特徴として、中規模から小規模の住居跡で3～4軒程度の小群を構成し、輪積痕を有する南関東系の土器を共伴しない傾向にある事が挙げられる。

YC群は台地南側縁辺部に展開し、栗谷遺跡最大の住居跡密集地区である。YA群同様、未調査の部分もあるので、軒数は更に増えると思われる。立地の傾向として、標高24m付近に密集する西側一群と北へ下る緩斜面を隔てた東側の一群に大別できる。恐らくは全体として2～3群の分離も可能と思われる。調査を行った総数44軒のうち、10mを越す大型住居が5軒あり、その中に中小型の住居跡が混在する。大型住居跡としてA076・A080・A081・A155・A156が相当するが、恐らくこれらの住居跡は、突出した規模と豊富な遺物を出土する事から、集落の中でも中心的な役割を果たしていたと思われる。よってこれらの大型住居跡を中心に検討を進めてみたい。大型住居跡A081と隣接するA082はYC群の中で他の住居跡と主軸方位が大きく異なる。互いの住居跡間の距離の短さと、主軸方位の不一致から考えて、これら2軒が同時存在するとは考えづらく、時期差があると考えられる。同様にA081と隣接するA079も、互いの住居跡間の距離の短さから2軒が同時存在するとは考えづらい。A079が輪積痕を数段残す堦が出土しているのに対して、A081は輪積痕が1段のみの堦を出土している事からもA079とは時期差を考えるのが妥当であり、A081の方がやや後出的であろう。堦の輪積痕に着目すれば、A079はA080とほぼ同時期と考える事ができるだろう。また、A069はA079・A080同様、輪積痕を数段残す堦が出土しているが、覆土中から刷毛目調整の堦も出土していることから、A079・A080よりやや後出的であると考えられる。これらのことは、YC群全体を通して言えることであり、空間的な細分に加えて、時期的にも2～3期程度に分離できるであろう。

この地区は、それまでのYA群、YB群と様相が変わる。YA群、YB群の出土遺物が櫛描文系土器を主体に出土しているのに対して、YC群では、輪積痕が数段残る土器を主体にし南関東系の土器群と共伴するようになる。注目されるのは、輪積痕が数段残る土器を主体とする住居群の中で、A081のように櫛描文(連弧文)系土器を出土する住居跡が存在することである。連弧文系土器の系譜を考える上で重要で

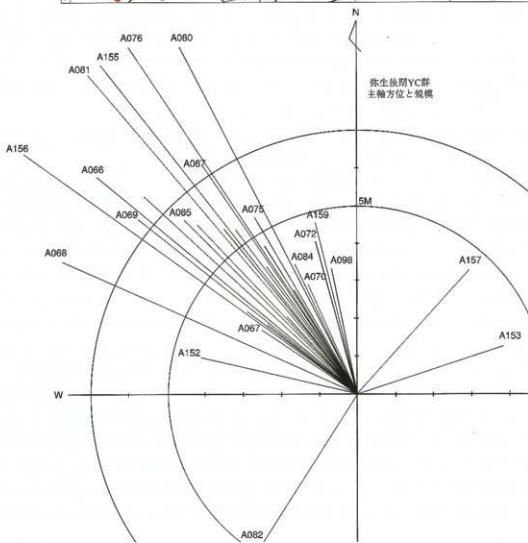
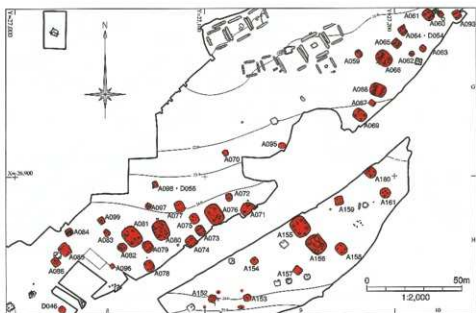


図218 栗谷遺跡弥生後期YC群 遺構配置と主軸方位と規模

ある。隣接する住居跡、A079・A080・A083は全て輪積痕を数段残す段階の土器を出土している。A081とこれらの住居跡群は時期差として、また、A079・A080・A083は土器様相と住居跡間の距離などから同時存在の住居として現れてきそうである。

YD群は、台地北側縁辺に展開する、栗谷遺跡のなかでもYC群に次いで住居跡が密集している地区で中型から小型の住居跡18軒で構成される。実際にはYC群同様、更に2～3群に分離可能と考える。この地区は、それまでのYA群YB群ともYC群とも様相が変わる。櫛描文系土器の出土割合が激減し、輪積痕が痕跡的に残る段階の住居が増える。A142においては、口縁下部にイボ状突起を持つ土器を出土し、A134においては古式土師器の出土割合が増えている。この地区に展開した集団は、後期後半から終末に居住した非櫛描文系土器(非A-1類)を持つ集団と言えよう。

YE群は台地中央に広く広がる10軒の構成だが、群構成として規制の弱い一群である。A129については、刷毛目調整の甕を共伴しているので他の住居跡群よりも後出的であり、除外して考えた方が良いかもしれない。他の住居跡については、概ね、隅丸長方形の平面形で、出土遺物の傾向として櫛描文系土器(栗谷A-1類)及びA-2類土器を比較的多く出土していると言えるだろう。

YF群は台地北側縁辺に展開する1群で6軒で構成される。住居跡によって櫛描文系土器及び輪積痕の土器を出土する双方があり、傾向をつかみづらい。

YG群は台地北側縁辺部かつ舌状台地基部に近い地点に展開する1群で、小型の住居跡6軒で構成される。全般に出土遺物が少なく特徴がつかみづらいが、A033では、前節までで記述したA-2類の甕と南関東系の土器が共伴する状態で出土している。また、YF群とYG群は、その立地から或いは一つの小群として捉えても良いかもしれない。

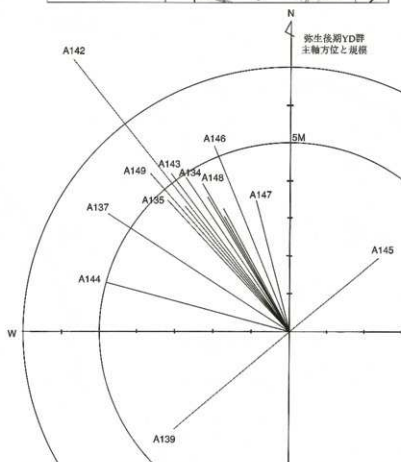
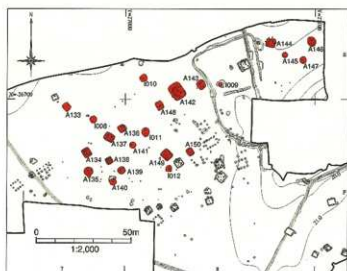


図219 栗谷遺跡弥生後期YE群・YF群 遺構配置と主軸方位と規模

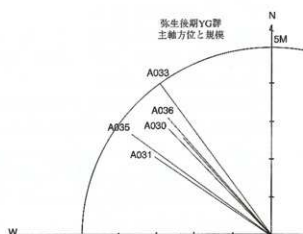
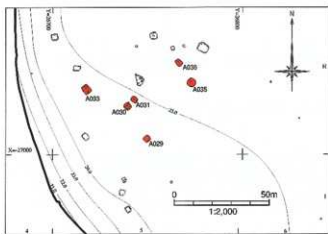
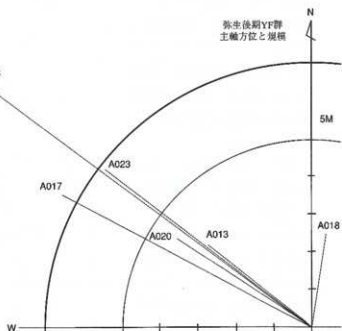
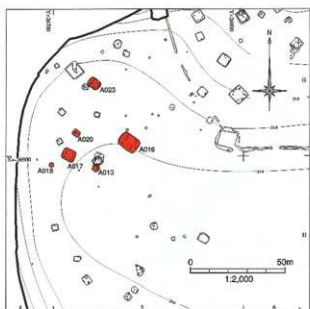
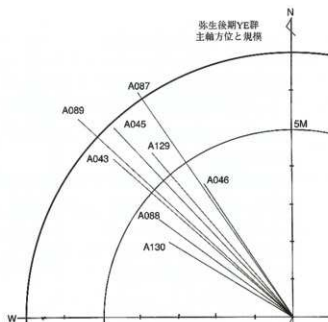
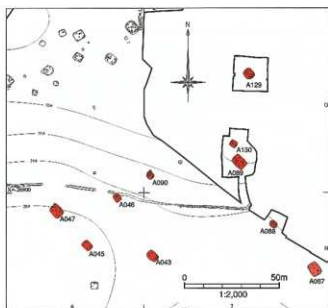


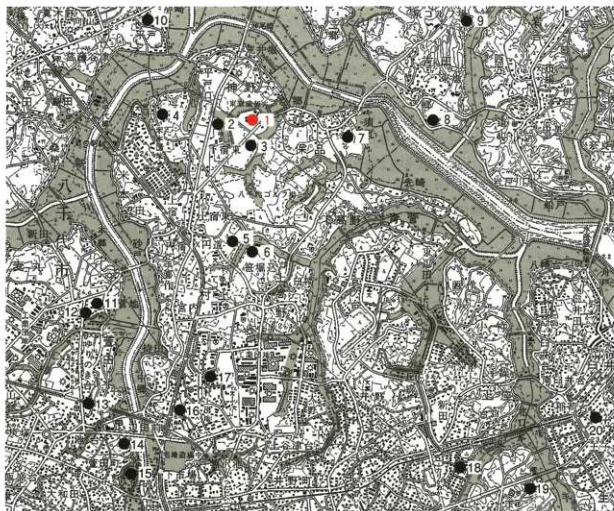
図220 栗谷遺跡弥生後期YG群 遺構配置と主軸方位と規模

2 まとめ

以上、栗谷遺跡の弥生後期の集落を雑然と概観してきたが、若干のまとめをする以下の通りである。栗谷遺跡の92軒の集落はA～Gの7群程度に分けられる。その中で大きな集落となるC群とD群についてはさらに2から3の小群に分けられ、時期的にも2時期ほどに分けられる。各々の小群は、櫛描文系土器、輪積痕系の土器、それぞれを主体的に出土する群に分類でき、系統の差が各群によって浮き彫りにされている。櫛描文系土器を出土する群は、3～6軒程度の小規模な集落を構成し、中型から小型の住居跡で構成される。また、輪積痕系の土器を出土する群は、大規模な集落を構成し大型住居で構成される傾向があった。遺物からの検討では、櫛描文系土器と輪積痕系土器との系統差があり、この2系統が、それぞれに3から4段階程度に区分できることを明らかにしたが、この2系統が集落構成にも反映されていた状況が明らかとなった。こうした状況の中、遺物の検討から、櫛描文系土器の方がやや先行的であること及びイボ状突起を持つ土器が後出的であること前提として、時期的な変遷を追うならば、まず櫛描文系土器を有する集団が、中期、宮ノ台期の集落、墓域をさけるような形で、台地上に展開し始める。YA群、YB群などが該当し、栗谷遺跡における弥生後期集落の始まりと言えるだろう。集落の規模は、前述のとおり、3～6軒程度の小規模な集落を構成していたと思われる。これは、前代の宮ノ台期の集落が5軒で構成されていたことに類似する。次の段階になると、YC群にみられるような、輪積痕を数段持つ土器を出土する大型住居跡が大規模に展開し、更に次の段階になるとYD群に見られるような、輪積痕が痕跡的になり、中には口縁下にイボ状突起を持つ土器を有する集団が台地北側縁辺部に展開してゆくと思われる。また、今回の集落の分析に当たり、竪穴住居跡の規模と主軸方位を、その手がかりとして、小群単位で時期的変遷を行ったが、本来、集落の分析には、その特徴的な出土遺物や竪穴住居跡の平面形そのものを分析の要素に加えて検討すべきである。今回の分析では、そこまで至らなかったが、全体の整理を通して感じたことは、隅丸長方形の竪穴住居跡から櫛描文系土器が出土する傾向があった。漠然としたイメージであるが、最後に付け加えておきたい(註17)。

92軒という竪穴住居跡数は弥生時代後期の印旛沼南岸域では、最大級のクラスとなるが、櫛描文系土器と輪積痕系土器の違いに着眼するならば、集落の様相も理解しやすくなるのではないだろうか。

また、栗谷遺跡に所在する八千代市においては、弥生後期櫛描文系土器を出土する遺跡が極少ない。特に市域中央を南北に流れる新川西岸になると激減し、萱田遺跡群の権現後遺跡等で数例見られるのみで、川崎山遺跡に至っては、1点も出土していない。栗谷遺跡の東側、佐倉市方面になると、出土数が増え、印旛村萩原長原遺跡など印旛沼北岸では、比較的多く見られる(註18)。栗谷遺跡を境に、周辺地区での櫛描文系土器の出土の頻度が変わっていく状況が捉えられる。これは、前代の宮ノ台期の遺跡が印旛沼北岸では激減している状況と対照的で、中期後半から後期前半期にかけての土器様相を考える上で重要な問題が含まれていると思われる。しかし、今回そうした包括的な考察までではできなかった。同時に、栗谷遺跡における大まかな弥生後期の変遷は捉えることはできても、櫛描文系土器(栗谷A類)と輪積痕系土器(栗谷B類)両者の関係が時期的な差として現れるのか、系統差として平行して集落展開するのかも、同様に検証するには至らなかった。筆者の力量不足によるところが大きい。今後の課題になると言えよう。最後に八千代市を中心とした弥生時代後期の遺跡分布図を掲載し、弥生時代後期の考察を終わりたい。



- | | | | | |
|------------|-------------|--------------|--------------|---------------|
| 1...栗谷遺跡 | 2...役山東遺跡 | 3...上谷遺跡 | 4...逆水遺跡 | 5...阿蘇中学校東側遺跡 |
| 6...平沢遺跡 | 7...おおびた遺跡 | 8...トヶ前遺跡B地点 | 9...トヶ前遺跡A地点 | 10...平戸道地遺跡 |
| 11...榎原後遺跡 | 12...ヲサル山遺跡 | 13...白幡前遺跡 | 14...川崎山遺跡 | 15...上ノ山遺跡 |
| 16...浅間内遺跡 | 17...村上遺跡群 | 18...上座矢橋遺跡 | 19...飯合作遺跡 | 20...臼井南遺跡群 |

図221 栗谷遺跡弥生時代後期遺跡分布図

第3項 古墳時代前期

(1) 方形周溝墓

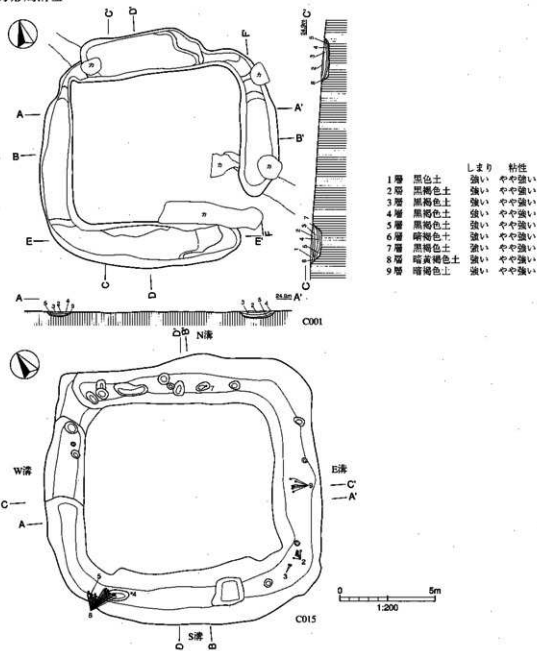


図222 C001・C015

栗谷遺跡の古墳時代前期については、堅穴住居跡23軒、方形周溝墓2基を検出しているが、集落については、第2分冊で若干触れた経緯もあり、本項では、これまで触れていなかった古墳時代前期(弥生時代終末)の方形周溝墓を中心に考察したい。栗谷遺跡における方形周溝墓は弥生時代中期宮ノ台期のものが11基、弥生時代終末～古墳時代前期のものが2基調査された。古墳時代の周溝墓は、C001とC015の2基である。形態・規模については、C001が12mクラスで、南東コーナーに一箇所、陸橋部を持つタイプである。その他のコーナーに陸橋部は無いが周溝が細く浅くなっている。台状部に主体部は検出されなかった。C015は14mクラスの陸橋部を持たないタイプである。北西コーナーがやや浅くなっている。C001同様、台状部に主体部は検出されていない。立地は2基の方形周溝墓とも古墳時代前期の集落を避けC001は集落の南西のはずれ、C015は集落の北東のはずれに位置している。宮ノ台期のものと比べ、規模は大きくなり、陸橋部の意識がなくなっている。

(2) 時期的検討

時期的な検討をすれば、栗谷遺跡に展開する古墳時代前期の集落にはほぼ並行するものと思われる。C015からは網目状摺り糸文を主体とした装飾壺(3)が出土しており、共伴する遺物として在地系の甕(8)と東海系の有稜高壺(9)が出土している。弥生時代の終末から古墳時代初頭と考えて良いだろう。また、A109出土遺物の中にも装飾壺(5)と東海系の有稜高壺(8)・(9)が出土している。C015とA109がほぼ同時期の集落と墓と捉えることができよう。C001についても装飾壺が出土しているが、共伴する土器に二重口縁壺(6)が出土しており、甕についてはハケ調整、口縁刻み目の台付甕が出土している。これらことからC001はC015よりはやや後出的である。C015では出土していなかった小型器台がC001では出土していることもこのことを有利にしているだろう。

また、甕に着目をすれば、A001においてハケ調整、単純口縁の台付甕が出土している。C001の次の段階の住居跡と考えられる。A001においてC001では出土していなかった小型丸底塔が共伴している事も、そのことを裏付けている。また、共伴している高坏の検討から、千葉県特有のハケ調整の平底甕もこの段階になると考えている。

これらの事を比較、整理したものが図219になる。C015と対応する住居跡がA109を中心とした集落で、他にA002・A003・A005等があげられる。装飾壺を出土する段階のものである。次に来るのがC001造営に関与したと思われる集落でA006・A101・A106、等があげられる。同じく装飾壺を出土する段階であるが、ハケ調整口縁刻み目の台付甕、小型器台が伴う段階と考えられる。更に3段階目として、装飾壺が消え、ハケ調整単純口縁の台付甕と小型器台、小型丸底塔が共伴する時期を考えられる。A001・A008・A102・A103等が該当すると思われる。また、第2分冊の段階で述べてたが、小型器台の変遷に着目すれば、小型器台が出土する段階で更に数期の小画期を区分することも可能かと思われる。

以上のように見てくると、2基の方形周溝墓とが、装飾壺を出土する時期を中心に、集落と対応しながら、集落の変遷とほぼ同時期であることが判る。

弥生時代中期～古墳時代前期の墓制の展開に注目すると、中期宮ノ台期の集落が5軒に対し11基の方形周溝墓が検出されているのに対し、古墳前期になると、23軒の堅穴住居跡に対し2軒の方形周溝墓となり、集落と墓城の比率が著しく異なってくる。前節で宮ノ台期の方形周溝墓を家墓的性格があるとしてきたが、古墳時代前期に至り、その性格が変化してきたのであろう。恐らくは、1期4～5軒程度の堅穴住居跡が一つの単位集団を構成し、その中の特定の首長層の墓としての性格が強まってきたことに伴う現象と捉えられる。

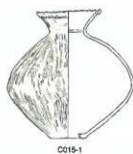
(3) まとめ

弥生時代中期と古墳時代前期の方形周溝墓における性格の変化を家族墓的な墓から首長層の墓と捉えることができたが、問題となるのは、弥生時代後期の墓制がいかなるものであるかということになる。栗谷遺跡における最大の集落展開期において墓域がどこで、どのような様相を呈していたかである。残念なことに栗谷遺跡において弥生時代後期と特定できる墓が2例と極めて少ない。1つは台地北側縁辺の弥生時代の集落YD群内に存在するD085で土器棺を埋納した土坑墓である。土器は南関東系の土器が埋納されていた。もう一つは、台地南側縁辺に展開する弥生時代の集落YC群内に位置するD087でD085同様、土器棺を埋納した土坑墓である。やはり、南関東系の土器が埋納されていた。当然、土器棺墓だけでなく、遺物を含まない土坑墓も考えられるので、実際の墓は増えると思われる。これらの周囲にある土坑は、或いは弥生時代後期の土坑墓で、土器棺を埋納するものとしないうちで、階層の分化がはじまったのかもしれない。いずれにしても集落の最盛期である弥生時代後期において墓域が明瞭に検出できないのも栗谷遺跡の墓制を考える上で1つの問題になるだろう。注目すべきは、これらの土坑が、輪積痕壺(栗谷B類)土器を出土する集落から検出されていることである。栗谷遺跡の墓制の変遷を追うと、宮ノ台期においては家族墓的性格を帯びる方形周溝墓で、後期に至り輪積痕壺(栗谷B類)土器出土の集落において南関東系の土器を埋納する土器棺墓の墓制が展開する。宮ノ台期の墓制が消え北関東系の墓制が採用されるものの、埋納される土器が南関東系の土器が使用されていた(註19)。更に古墳時代前期に至ると、再び方形周溝墓が首長墓的性格を帯びて出現するのである。この一連の現象は、時期による南関東文化と北関東文化それぞれの文化の浸透度の違いと、時期ごとの社会状況の質的な違いを表していると思われる。

栗谷遺跡における墓制を考える時、集落ほどの事例を積み上げていくことはできないが、集落と同様、系統の差と時期による変遷が追えると思われる。近隣の遺跡との比較検討も当然必要であるが、今回の考察ではその概要のみで、詳細までは検討し得なかった。おそらくは、集落の展開と同調していると思われる。こうした問題を指摘することで本項を終わりたい。

壺系統

C015

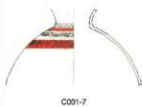


A109



II

C001



III

A001














甕系統	高環・器台系統
 <p>A109-8</p>	 <p>C015-9</p>
 <p>A109-1</p>  <p>A109-2</p>  <p>A109-15</p>  <p>A109-3</p>  <p>A109-4</p>	 <p>A109-6</p>  <p>A109-9</p>
 <p>A106</p>  <p>C001-5</p>	 <p>C001-2</p>
 <p>A001-13</p>  <p>A103</p>  <p>A102</p>  <p>A001-07</p>  <p>A001-15</p>	 <p>A102</p>  <p>A001-1</p>  <p>A001-2</p>  <p>A001-3</p>  <p>A001-18</p>  <p>A001-4</p>

図223 栗谷遺跡 弥生終期～古墳前期における土器変遷

第3節 奈良・平安時代

(1) 集落について

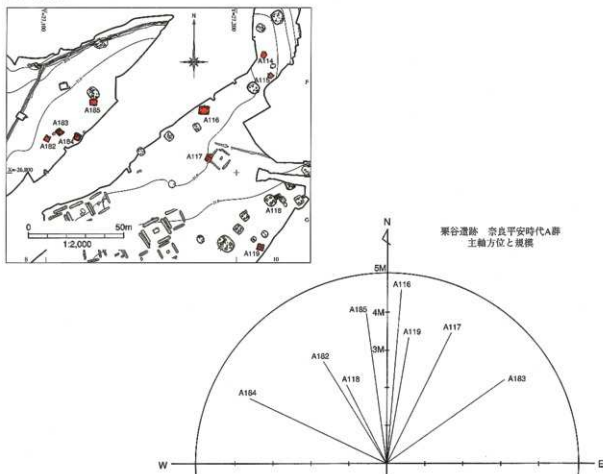


図224 栗谷遺跡 奈良・平安時代A群 遺構配置と主軸方位と規模

栗谷遺跡における奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡が55軒、掘立柱建物跡13棟、土坑24基、その他の遺構10基を検出している。奈良・平安時代の住居跡は総数55軒になるが、弥生時代の集落と同様、いくつかの群を構成している。

台地先端部に展開するA群、南側縁辺部に展開するB群、西側に展開するC群、北側に展開するD群とする。具体的には

A群は、A114、A115、A116、A117、A118、A119、A182、A183、A184、A185の10軒、

B群は、A039、A040、A041、A042、A044、A186、A187、A188、A189、A120、A121、A122、A123、A124、A125、A126、A127とB001、B002、B003、B004、B005、B006の竪穴住居跡17軒と掘立柱建物跡6棟、

C群は、A010、A012、A014、A019、A021、A022、A024、A025、A026、A027、A034の11軒

D群は、A165、A166、A167、A168、A169、A170、A171、A172、A174、A175、A176、A177、A178、A179、A180、A181とB007、B008、B009、B010、B011、B012、B013の竪穴住居跡16軒と掘立柱建物跡7棟

で構成される。

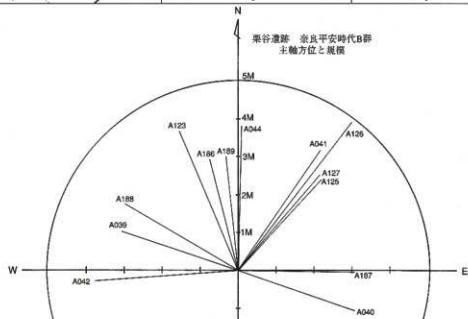
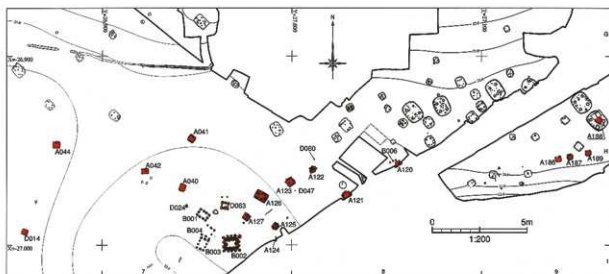


図225 栗谷遺跡 奈良・平安時代B群 遺構配置と主軸方位と規模

A群は台地先端に展開している一群で、竪穴住居跡10軒のみで構成されているが、未調査の部分もあるので、住居跡、掘立柱建物跡それぞれ増えると思われる。規模的には、3.5m前後の竪穴住居跡が多いが、主軸方向等、一定のまとまりが無く、傾向が掴みづらい一群である。南側の一群と北側の一群とに分離できる可能性もある。

中央に位置するA116は出土遺物の検討から、他の住居跡群より古手の様相を示している。また、同様にA117は、他の住居跡群より新しい土器様相を示し、B群のA042・A040と同時期と思われる(註20)。

B群は南側縁辺部に展開している一群で、A群同様、未調査の部分もあるので、住居跡、掘立柱建物跡それぞれ増えると思われる。東西で更に2群程度に分けられるかもしれない。主軸方位からも2群程度に分類が可能である。また、A039・A044については、B群からはやや離れて立地しているが、適当な小群が見つからない為、B群に含めた。集落としては、一部上谷遺跡の竪穴住居跡を含んで構成されるとと思われる。A120とB006は遺構が近接しているため時期差を考えた方が良好だろう。B群全体での主軸方向の差は、時期差として現れるかもしれない。主軸方向が大きく異なるA042・A040は出土遺物からの検討から他の住居跡群より新しいと思われる。また、B群の特徴の一つとして四面庇を思わせる掘立柱建物跡が検出されていることがとして挙げられる。

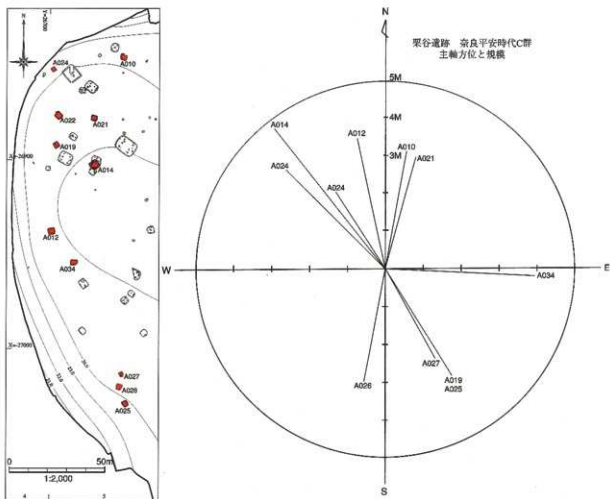


図226 栗谷遺跡 奈良・平安時代C群 遺構配置と主軸方位と規模

C群は台地西側に展開している一群で竪穴住居跡住居跡11軒で構成され、掘立柱建物跡をその構成の中に含んでいない。A025・A026・A027の南側の3軒は、立地の上からは、C群から分離する事も可能かと考えられる。出土遺物の検討から、栗谷遺跡における奈良・平安時代の集落の中でも最も古い段階のものと考えられる(註21)。A034は南側コーナーに竈を持つタイプの住居跡で、墨書土器「竹野」を出土している。この地区は、南側コーナーに竈を持つタイプの住居跡が11軒中5軒で最も多い一群で、栗谷遺跡の中でも異彩を放っている。

D群は台地北側に展開する一群で、東西で2群に分類可能である。掘立柱建物跡も東西に2群に分かれて立地している。西側の一群6軒は、3軒がコーナーに竈を持つタイプの住居跡で、A168はA034同様、南側コーナーに竈を持つタイプの住居跡で、墨書土器「竹野」を出土している。上谷遺跡A063では、コーナー竈の住居跡で、墨書土器「竹」を出土している。「竹」・「竹野」とコーナー竈の住居跡は何らかの相関関係があるかもしれない。東側の一群は、住居跡10軒で構成され(註22)、その中に鍛冶工房址と考えられる住居跡、A165・A177が検出されていることが、特徴的である。また、墨書土器で「具」を出土する住居跡が多い。

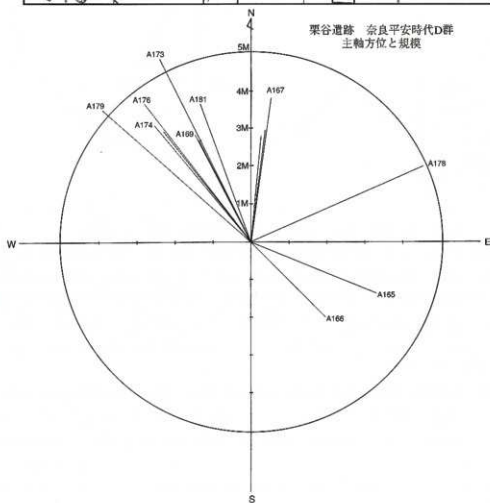
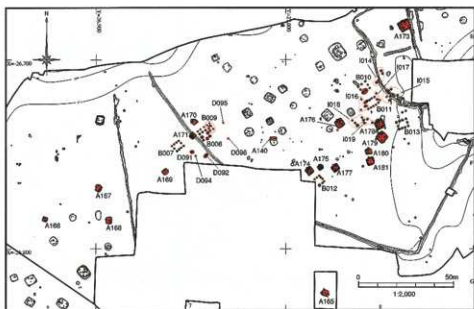


図227 栗谷遺跡 奈良・平安時代D群 遺構配置と主軸方位と規模

(2) まとめ

栗谷遺跡の奈良・平安時代の集落55軒を各小群ごとに概観したが、集落間の変遷を追うならば、まずC群とした集落の一部が一番古そうであり、奈良時代末頃に位置づけられるだろう。その後、A・B・D群の集落が遅れて展開していったと考えられる。集落の展開としてはA・B・D群の時期が最も大きく展開した時期で、その中心期は9世紀代と思われる。集落としては10世紀代に急速に衰退するようで、A・B群の一部がこれにあたる。

集落が最も大きく展開した9世紀の全体的な傾向として言えるのは、各群、竪穴住居跡2～3軒に掘立柱建物跡1棟の割合で構成される。当然時期的な差を考慮に入れなければならないが、竪穴住居跡2～3軒に掘立柱建物跡1棟の構成が集落の最小単位で、この単位が数単位でA～D群の小群を構成していると考えた時、竪穴住居跡2～3軒を律令体制下の郷戸と考えるのは論理的飛躍だろうか。

こうした問題は、本来、遺物の詳細な検討を経てタイムスケールを構築した後に検討すべき問題であるが、今回、そこまでの分析ができなかった。今後、更なる栗谷遺跡の奈良・平安時代の集落を分析することによってそうした様相も明らかになるだろう。

最後に栗谷遺跡出土の文字資料を、上記の群別にまとめた表を掲載して奈良・平安時代の考察の終わりとしたい。

表119 栗谷遺跡出土文字資料一覧表

群	遺構・遺物番号	種別	釈文	器種	部位	方向	備考
A	A116-9	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
	A182-2	墨書	富	土師器 坏	体部 外面		
	A182-3	墨書	富	土師器 坏	体部 外面		
	A183-1	墨書	仲	土師器 坏	体部 外面		
	A184-4	線刻	□	土師器 坏	体部 外面		
	A184-17	線刻	力	土師器 坏	体部 内面		
	A184-18	線刻	万	土師器 坏	体部 内面		
	A184-19	墨書	因	土師器 坏	体部 外面		
	A184-20	線刻	万	土師器 坏	体部 外面		
	A184-21	墨書	力	土師器 坏	体部 外面		
	A184-22	墨書	□	土師器 坏	底部 外面		
	A184-23	墨書	×	土師器 坏	底部 外面		
	A184-24	墨書	因	土師器 坏	体部 外面		
	A184-25	墨書	因	土師器 坏	体部 外面		
B	A039-5	墨書	西	土師器 坏	体部 外面		
	A039-5	墨書	西	土師器 坏	底部 内面		
	A039-5	ヘラ書	//	土師器 坏	底部 外面		
	A041-1	墨書	寿	土師器 坏	体部 外面		
	A041-2	墨書	人	土師器 坏	体部 外面		
	A041-3	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
	A041-13	墨書	□	土師器 坏	体～底部 外面		
	A042-11	ヘラ書	□	土師器 壺	底部 外面		
	A044-1	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
	A044-9	墨書	因	土師器 坏	体部 外面		
	A044-9	墨書	因	土師器 坏	体部 外面		
	A044-10	線刻	□	須恵器 壺	底部 外面		
	A120-4	墨書	□	土師器 坏	底部 外面		

群	遺構・遺物番号	種別	釈文	器種	部位	方向	備考
28	B	A121-3	墨書 久	土師器 坏	体部 外面	正位	
29		A121-3	墨書 久	土師器 坏	底部 外面		
30		A121-4	線刻 加	土師器 坏	底部 内面		
31		A121-6	墨書 久	土師器 坏	体部 外面	正位	
32		A121-9	線刻 □	土師器 坏	底部 外面		
33		A121-19	墨書 久	土師器 坏	体部 外面	正位	
34		A121-20	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
35		A121-21	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
36		A121-22	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
37		A121-23	線刻 □	土師器 坏	底部 外面		
38		A122-8	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
39		A125-2	墨書 □	土師器 甕	胴部 外面		
40		A126-1	線刻 ×	須恵器 坏	底部 外面		
41		A126-2	墨書 □	須恵器 坏	底部 外面		
42		A127-1	線刻 ×	須恵器 甕	外面		
43		A127-2	線刻 ×	須恵器 坏	底部 外面		
44		A187-1	線刻 罇	土師器 甕	底部 内面		
45		A187-7	線刻 在	土師器 坏	底部 外面		
46		A187-8	線刻 万	土師器 坏	体部 外面		
47		A187-13	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
48		A189-2	墨書 罇	土師器 坏	体部 外面		
49		A189-6	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
50		A189-6	墨書 □□	土師器 坏	体部 外面		
51	C	A021-2	線刻 ×	土師器 坏	底部 外面		
52		A025-3	墨書 加木有□	須恵器 甕	体部 外面		
53		A034-1	墨書 竹野	土師器 坏	底部 外面		
54		A034-5	墨書 □	土師器 甕	底部 外面		
55	D	A166-1	墨書 竹野	土師器 坏	底部 外面		
56		A169-2	墨書 具	土師器 坏	体部 外面		
57		A169-5	墨書 具?	土師器 坏	体部 外面		
58		A169-6	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
59		A174-4	墨書 □	土師器 坏	底部 外面		
60		A174-4	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
61		A174-5	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
62		A174-5	墨書 □	土師器 坏	底部 外面		
63		A175-1	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
64		A176-1	墨書 具	土師器 甕	体部 外面		
65		A176-2	墨書 富	土師器 坏	体部 外面		
66		A176-3	墨書 富	土師器 坏	体部 外面		
67		A176-4	墨書 得	土師器 坏	体部 外面		
68		A176-6	ヘラ書 □	土師器 坏	底部 外面		
69		A176-14	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
70		A177-3	墨書 □	土師器 坏	底部 外面		
71		A177-3	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
72		A177-18	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		
73		A177-19	墨書 □	土師器 坏	体部 外面		

群	遺構・遺物番号	種別	釈文	器種	部位	方向	備考
74	D A177-20	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
75	A177-21	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
76	A177-22	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
77	A178-1	墨書	□□□□	土師器高台付皿	体部 外面		
78	A178-1	墨書	□□□□	土師器高台付皿	底部 外面		
79	A178-3	線刻	×	土師器 坏	体部 外面		
80	A178-8	線刻	×	土師器 坏	底部 外面		
81	A178-8	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
82	A178-26	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
83	A178-27	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
84	A178-28	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
85	A178-29	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
86	A178-30	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
87	A178-31	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
88	A178-33	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
89	A178-34	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
90	A178-35	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
91	A178-32	墨書	真	土師器高台付皿	底部 外面		
92	A178-21	線刻	//	土師器 坏	底部 外面		
93	A179-2	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
94	A179-3	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
95	A179-6	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
96	A179-10	墨書	富	土師器 坏	体部 外面		
97	A179-11	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
98	A179-13	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
99	A179-14	墨書	具?	土師器 坏	体部 外面		
100	A179-15	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
101	A179-16	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
102	A179-19	墨書	具?	土師器 坏	体部 外面		
103	A179-22	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
104	A179-23	線刻	ノ	土師器 坏	底部 外面		
105	A179-25	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
106	A179-26	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
107	A179-55	ヘラ書	□	土師器 坏	底部 外面		
108	A179-42	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
109	A179-43	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
110	A179-44	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
111	A179-45	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
112	A179-46	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
113	A179-47	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
114	A179-48	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
115	A179-49	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
116	A179-50	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
117	A179-51	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		
118	A179-52	墨書	具	土師器 坏	体部 外面		
119	A179-53	墨書	□	土師器 坏	体部 外面		

群	遺構・遺物番号	種別	釈文	器種	部位	方向	備考
120	D	A179-54	墨書	□	土師器 坏	体部 外面	
121		A179-56	線刻	□	土師器 坏	体部 外面	
122		A180-13	墨書	□	土師器 坏	体部 外面	
123		A181-10	墨書	冪	土師器 坏	体部 外面	
124		A181-8	墨書	□	土師器 坏	体部 外面	
125		B013-1	墨書	刀	土師器 坏	体部 外面	
126		D091-1	墨書	□	土師器 坏	体部 外面	
127		I014-1	墨書	□	土師器 坏	体部 外面	
128		I014-2	墨書	□	土師器 坏	体部 外面	

註

- (1) 松戸市教育委員会 峰村 篤氏のご教示による。今回、峰村氏には多大なるご教示と整理作業において具体的なご協力も賜った。記して感謝する次第である。
- (2) 『登谷遺跡』 2002 茂木町教育委員会
中村信博 2003 「栃木県茂木町登谷遺跡における陥穴の時期と使用」 『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』
- (3) (財)千葉県文化財センター 小笠原永隆氏のご教示による。
- (4) 『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅱ』 1986 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会
- (5) 柿沼修平 1991 「大崎台遺跡の研究Ⅱ」 『奈和』29
- (6) 『八千代市市内遺跡発掘調査報告書—平成8年度』 1997 八千代市教育委員会
- (7) 『平成6年度八千代市埋蔵文化財調査年報』 1995 八千代市教育委員会
『八千代市埋蔵文化財調査年報—平成6年度版』 1996 八千代市教育委員会
- (8) 『六崎貫船台遺跡発掘調査報告書』 1991 財団法人印旛郡文化財センター
『臼井屋敷遺跡』 1996 財団法人印旛郡文化財センター
- (9) 安藤広道 1991 「弥生時代集落群の動態横浜市鶴見川・早淵川流域の弥生時代中期集落群を対象に—」 『調査研究集録』8 横浜市埋蔵文化財センター
- (10) 白井町教育委員会、高花宏行氏、印旛村歴史民俗資料館、能瀬幸枝氏のご教示による。
- (11) 以下、本文中に引用されている報文、論文等は本文中に掲載されている別表を参照されたい。
- (12) 八千代市権現後遺跡で73軒、八千代市ヲサル山遺跡で34軒が調査された。
- (13) 比田井克人 1997 「弥生時代後期における時間軸の検討」 『古代』103
- (14) 小玉秀成 2002 「涌井式遺跡の桜井式土器—桜井式土器の南下と阿玉台北式および周辺型式の設定—」 『玉里村立資料館報』7
- (15) 高花宏行 1999 「印旛沼周辺地域における弥生時代後期の土器の変遷について」 『奈和』37
- (16) 久が原式土器の成立が房総であるという。比田井克人氏の見解は非常に示唆に富む。また、楯橋文系の集落における墓域と墓制はいかなるものか。残念ながら栗谷遺跡の今回の整理分析では明らかにし得なかった。
比田井克人 「久が原式土器成立考」 2003 『法政考古学』
- (17) A173は時期が古墳時代後期から奈良時代に当たると考え、D群から除外した。またA165はD群からやや離れているが、他に含める適切な地区が無いのでD群に編入した。

第3編 役山東遺跡

第1章 役山東遺跡の調査の概要

第1節 役山東遺跡の概要

役山東遺跡は、千葉県八千代市保品字中台谷に所在し、地形的には、栗谷遺跡同様、下総台地の北西部に立地し、印旛沼南岸に位置する。地形的特徴については、第1編栗谷遺跡の第1章を参照されたい。役山東遺跡は、栗谷遺跡の北側、東西に走る小支谷を隔て、対岸の台地に位置する。本遺跡が所在する地点の標高は、約18m～23m谷津に展開していた水田面との比高は約46mである。

役山東遺跡の周辺遺跡として小支谷を隔て、対岸の台地に前述した栗谷遺跡があり、役山東遺跡が所在する台地北側に小支谷を隔て向境遺跡がある。さらには、それぞれ小支谷を隔て向境遺跡、境堀遺跡、神野群集塚等が展開し、開発事業範囲外には、縄文時代中期から後期の神野貝塚等が所在する。これらの遺跡は、栗谷遺跡を含め隣接しながら大きく広がり、印旛沼南岸西端における遺跡群を形成している。役山東遺跡は、その所在する台地東端の縁辺部から斜面地の調査となった。検出された遺構は次の通りである。縄文時代の遺構については、早期の炉穴が7基、遺構1基。弥生時代については、竪穴住居跡3軒が検出された。奈良・平安時代に至ると、竪穴住居跡1軒、土坑1基、土坑3基が検出され、中世以降の遺構としては、土坑4基が検出されている。遺跡の本来の広がりから考えると、調査はその一部を実施したのみであるため遺跡の性格を特定する事は尚早であるかもしれないが、調査された遺構から判断すれば、栗谷遺跡同様、弥生時代及び奈良・平安時代の集落に、早期を中心とした縄文時代の遺構・遺物が展開していると考えられる。さらに栗谷遺跡と異なる点は、中世以降の土坑群が散見する事である。

遺跡の基本層序であるが、栗谷遺跡と同様となり、第I層が表土層、第II層が黒色土層、第III層が暗褐色土層、第IV層がソフトローム漸移層、第V層がソフトローム層となる。遺構検出作業にあたっては、第IV層下面あるいは第V層上面で行った。

以上、役山東遺跡の概要について、検出された遺構数を中心に述べてきたが、個別の遺構における詳細な報告及び考察等については次章以降で触れることとする。ここでは役山東遺跡における野外調査時の遺構番号(旧番号)と本書掲載の遺構番号(新番号)の新旧番号対照表を載せて本章を終わりたい。

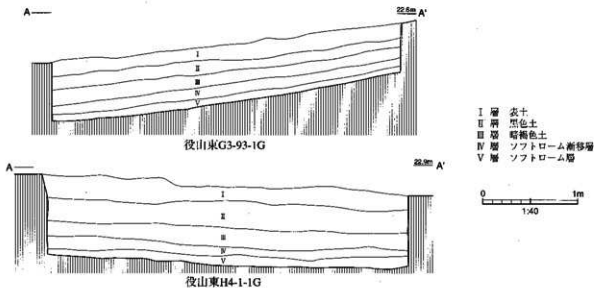


表120 役山東遺跡
新旧遺構番号対照表

新番号	旧番号
縄文時代	
炉穴	
F001	I-001
F002	I-002
F003	I-003
F004	I-004
F005	I-005
F006	I-018
F007	I-020
遺構	
I001	I-006
弥生・古墳時代	
竪穴住居跡	
A001	I-007
A002	I-008
A003	I-009
奈良・平安時代	
竪穴住居跡	
A004	I-010
土坑	
D001	I-013
D002	2-011
D003	2-014
D004	2-015
中近世以降・時代不明	
土坑	
D005	I-012
D006	I-019
D007	I-016
D008	I-017

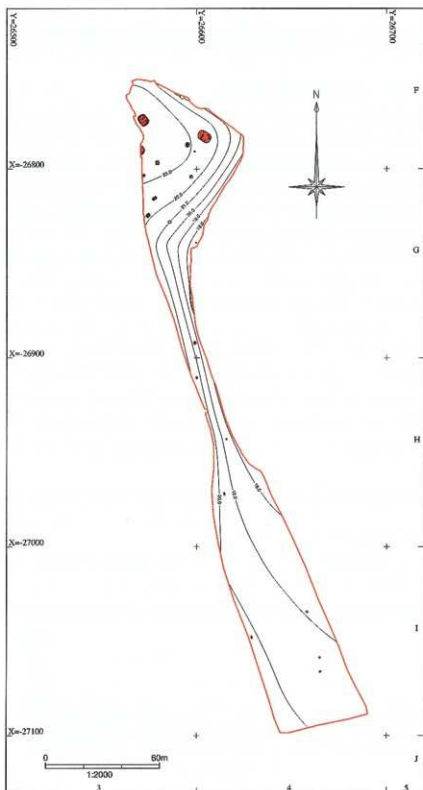


図229 役山東遺跡遺構検出状況図

第2章 遺構と遺物

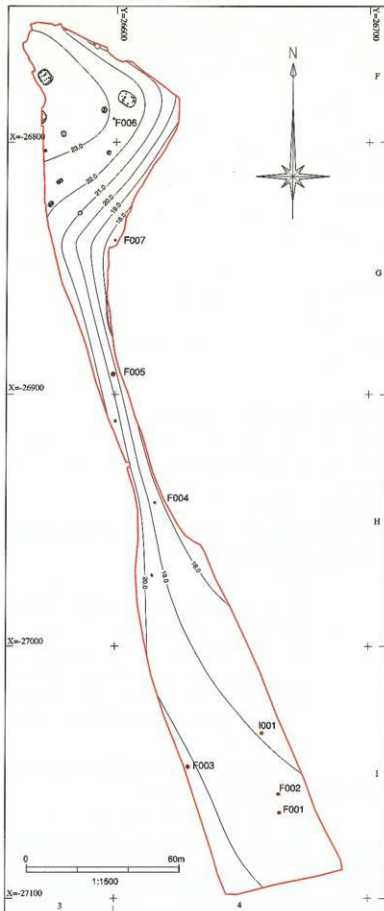


図230 縄文時代遺構配置図

第1節 縄文時代

役山東遺跡における縄文時代の遺構は、炉穴7基、その他の遺構1基が検出されている。今回、報告する地区は、役山東遺跡が所在する台地の東側縁辺部に位置するが台地縁辺から斜面に沿って縄文時代の遺構が立地している。遺構の密度としては散漫と言える。

役山東遺跡で検出された炉穴の特徴として、斜面に立地すること、掘り込みが浅い皿状の形態であることがあげられる。

役山東遺跡では縄文時代の遺物包含層は検出されていないが、弥生時代の竪穴住居跡の調査時に遺構覆土から比較的多量の縄文土器が出土している。栗谷遺跡で調査された包含層ほどではないにしろ、東側の谷津を隔てた栗谷遺跡、北側の谷津を隔てた向境遺跡において調査されたものと同時期の包含層が合った可能性がある。役山東遺跡の検出された遺構が炉穴であることから、本遺跡の縄文時代における中心時期は、早期になると考えても良いだろう。

役山東遺跡の調査成果は、印旛沼から入り込む樹枝状の谷津を中心に、縄文時代早期の段階において、役山東遺跡、栗谷遺跡、向境遺跡に居住した人間の複雑な動態を窺い知る資料となると思われる。

以下、個別の遺構についての報告に移りたい。詳細は以下の記述、遺構一覧表、及び遺物観察表等を参照されたい。

(1) 炉穴

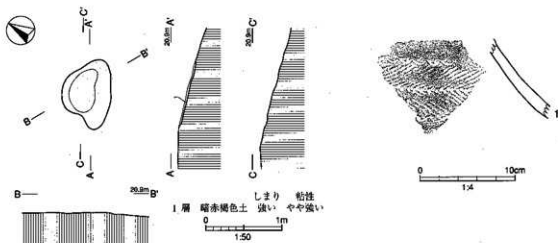


図231 F001

表121 F001遺物観察表

(単位:mm)

No	種別形	注量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-X-X- 破片上端に沈線? 胴部上半ナデ→結節1段→LR+RLの波状 胴部下半横成→結節1段→ナデ	海	粗砂粒含	胴部片	

F001

検出地区 I4-67G。台地南側斜面地に位置する。周辺の遺構としてF002がある。

遺構 不整形の平面形で、浅い凹み状の炉穴である。底面はロームの傾斜に沿った平坦な底面で、緩やかに立ち上がる。明瞭な火床は検出していないが、底面は熱を受け劣化し、わずかに赤化していた。覆土は最下層の1層のみで焼土を多く含んでいた。

遺物 覆土中から弥生土器の壺、頸部片が1点出土した。

所見 出土遺物は弥生土器1片であったが、斜面に立地していることから、弥生時代の住居跡の炉とは考えずらく、遺構の形状、覆土の状況等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

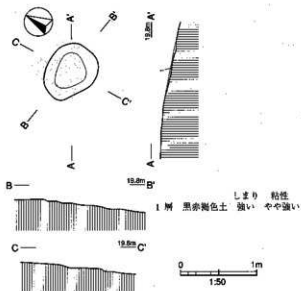


図232 F002

F002

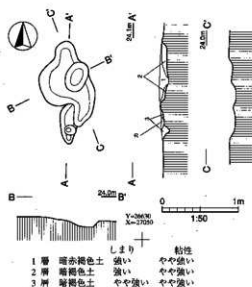
検出地区 I4-66G。台地南側斜面地に位置する。周辺の遺構としてF001がある。

遺構 不整形の平面形で、浅い凹み状の炉穴である。底面はロームで、傾斜に沿った平坦な底面である。壁は、緩やかに立ち上がる。明瞭な火床は検出していないが、底面は熱を受け劣化し、わずかに赤化していた。

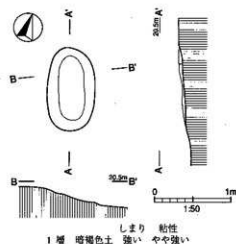
覆土は最下層の1層のみで焼土を多く含んでいた。全体の状況はF001と近似する。

遺物 遺物は出土しなかった。

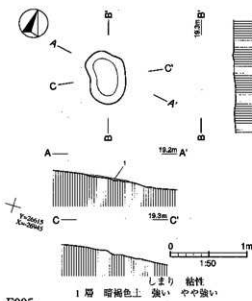
所見 遺物は出土していないが、斜面に立地していることから、住居跡の炉とは考えずらく、遺構の形状、覆土の状況等から縄文時代早期の炉穴と判断した。



F003



F004



F005

図233 F003・F004・F005

F003

検出地区 I4-25G。台地縁部、平坦面に立地する。周辺の遺構としてD001がある。

遺構 不整形の炉穴で、他の土坑と重複関係にある。比較的しっかりとした掘り込みを持ち、底部は概ね平坦である。明瞭な火床は検出していないが、底面は熱を受け劣化し、わずかに赤化していた。

覆土は色調を基本に3層に分層。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが遺構の形状、覆土の状況出等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

F004

検出地区 H4-18G。台地縁辺、斜面に立地する。周辺の遺構から離れ孤立して立地する。

遺構 楕円形の平面形で、浅い凹み状の炉穴である。底面はロームで、傾斜に沿った平坦な底面である。壁は緩やかに立ち上がる。明瞭な火床は検出していないが、底面は熱を受け劣化し、わずかに赤化していた。

覆土は最下層の1層のみで焼土を多く含んでいた。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状、覆土の状況出等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

F005

検出地区 H4-15G。台地縁辺、斜面に立地する。周辺の遺構から離れ孤立して立地する。

遺構 楕円形の平面形で、浅い凹み状の炉穴である。底面はロームで、傾斜に沿った平坦な底面である。壁は緩やかに立ち上がる。明瞭な火床は検出していないが、底面は熱を受け劣化し、わずかに赤化していた。

覆土は最下層の1層のみで焼土を多く含んでいた。

全体の状況はF001と近似する。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状、覆土の状況出等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

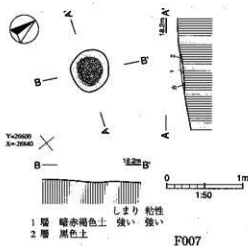
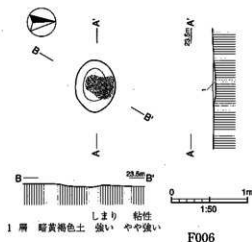
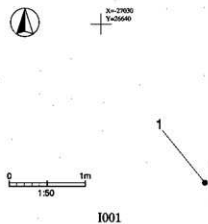


図234 F006・F007

(2) その他の遺構



F006

検出地区 F3-100G。台地縁辺部、平坦面に立地する。周辺の遺構としてD002がある。

遺構 楕円形の平面形で、浅い凹み状の炉穴である。底面はロームの底面ではほぼ平坦。壁は、緩やかに立ち上がる。明瞭な火床は検出していないが、底面は熱を受け劣化し、わずかに赤化していた。覆土は最下層の1層のみを検出した。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状、覆土の状況等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

F007

検出地区 G3-94G。台地縁辺部、斜面にさしかかった地点に立地する。周辺の遺構としてD002がある。

遺構 楕円形の平面形で、浅い凹み状の炉穴である。底面はロームで、傾斜に沿った平坦な底面である。壁は、緩やかに立ち上がる。明瞭な火床は検出していないが、底面は熱を受け劣化し、わずかに赤化していた。

覆土は色調を基本に2層に分層。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 遺物は出土していないが、遺構の形状、覆土の状況等から縄文時代早期の炉穴と判断した。

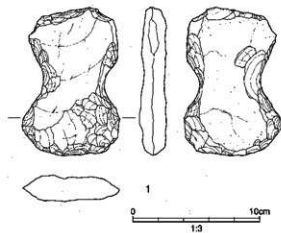


図235 I001

表122 I001遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	石器 打製石斧	長軸117×短軸48×器厚20 重量253.2g 分銅形打製石斧。中央部のくびれは比較的強い。片面に礫面を残す。周縁部の調整はそれほど急角度ではない。磨耗激しい。			完形	

I001

検出地区 I4-44G。台地縁辺部、斜面にさしかかった地点から打製石斧が単体で出土。周辺の遺構としてF001・F002・F003がある。

出土状況はソフトローム上に置かれるような状態で出土した。出土地点周辺の精査を試みたが、打製石斧に伴う遺構は検出できなかった。

台地縁辺で傾斜が始まろうとする、地形的に特徴的な地点からの出土ということで、そこに何らかの意味があるのかもしれない。

表123 縄文時代遺構一覧表

(単位m)

遺構番号	検出 調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆上の状況 遺物の状況	その他 備考
F001	I4-67-4	不整形 0.65×0.64×0.02 主軸 N-60°-E 浅い凹み状の炉穴。底面はわずかに赤化	色調を基本に1層に分層 弥生土器一片出土	斜面に立地
F002	I4-66-2	不整形 0.70×0.68×0.02 主軸 N-61°-E 浅い凹み状の炉穴。底面はわずかに赤化	色調を基本に1層に分層 出土遺物なし	斜面に立地
F003	I4-25-4	不整形 1.35×0.70×0.06 主軸 N-3°-W 底面はわずかに赤化	色調を基本に3層に分層 出土遺物なし	他の土坑と重複
F004	H4-18-1	不整形 1.09×0.64×0.06 主軸 N-15°-W 浅い凹み状の炉穴。底面はわずかに赤化	色調を基本に1層に分層。覆土を多く含む 出土遺物なし	斜面に立地
F005	H4-15-3	楕円形 0.70×0.48×0.01 主軸 N-17°-W 浅い凹み状の炉穴。底面はわずかに赤化	色調を基本に1層に分層 出土遺物なし	斜面に立地
F006	F3-100-3	楕円形 0.70×0.54×0.03 主軸 N-87°-W 浅い凹み状の炉穴。底面はわずかに赤化	色調を基本に1層に分層 出土遺物なし	
F007	G3-94-4	楕円形 0.56×0.50×0.03 主軸 N-51°-W 浅い凹み状の炉穴。底面はわずかに赤化	色調を基本に2層に分層 出土遺物なし	
I001	I4-44-1G	打製石斧出土地点		

第2節 弥生時代

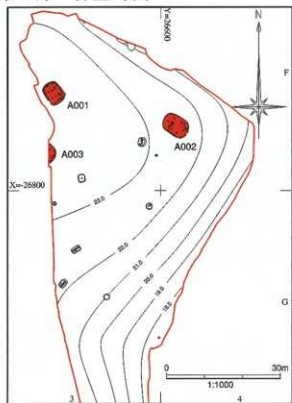


図236 弥生・古墳時代遺構配置図

役山東遺跡における弥生時代・古墳時代の遺構についてであるが、堅穴住居跡3軒が検出されている。時期的にはすべて後期の所産で、弥生時代終末～古墳時代初頭まで下るものは無かった。

弥生時代の遺構が検出された地区は、いずれも調査区域北側に広がる台地平坦面で、調査範囲外にも集落が展開している様相が伺える。今回、調査できた住居跡は3軒にとどまったが、役山東遺跡本来の弥生時代の集落は、さらに大きく展開していると言えるだろう。北側の谷津を隔てた向境遺跡では、弥生時代の集落が少なく、東側の谷津を隔てた栗谷遺跡では、弥生時代の大集落が展開していることは集落間の立地、展開を考える上で興味深い。さらには上谷遺跡の弥生集落との関連も興味深い。

以下、個別の遺構についての報告に移りたい。詳細は以下の記述、遺構一覧表及び遺物観察表等を参照されたい。

(1) 堅穴住居跡

A001

検出地区 F3-78G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。周辺の弥生時代の遺構としてA002・A003がある。

遺構 小判型の中型住居跡。床はロームを踏み固めた床で、硬化面が住居跡中央で広範囲に検出された。壁もロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。支柱穴は4本柱で、周溝は約3/4周する。炉は住居跡中央からやや北に寄った場所に位置し、地床炉である。

覆土は、色調を基本に12層に分層。覆土下層にて焼土を検出しているが、概ね、自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。覆土中から縄文土器の破片が比較的多く出土した。

所見 2・4が床面直上から出土していることから弥生時代後期の住居跡と判断した。所謂、印手系土器を主体に出土する住居跡である。

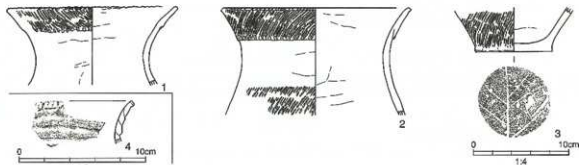


図237 A001

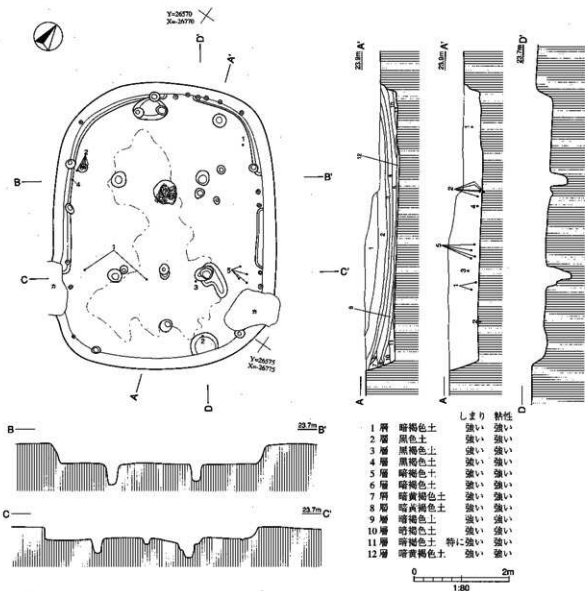


図238 A001(2)

表124 A001遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 染成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	(180)×-(×)(84) 口縁附加条縄文 口唇及び下端に縄文原体の押圧 頸部ナデ	暗褐色	粗砂粒 多含	口縁片	外面一部にコゲ 状付着物微量
2	弥生 甕	(200)×-(×)(113) 口縁から折り返し 外反 口縁・口唇ともに附加条 縄文 下端に刻み目 頸部ナデ 胴部上平 附加条縄文	橙褐色	砂粒多含	口縁片	
3	弥生 甕	-×80×(47) 胴部附加条縄文 底部木葉痕	褐色	砂粒多含	底部片	
4	弥生 甕	-×-×- 口縁外反 口縁・口唇に刻み目 輪襷み痕4段を有する	褐色	砂粒多含	口縁片	
5	石器 石皿	長軸389×短軸225×器厚86 重量9.5kg 平面形は長楕円形を呈する。大型の石皿。全体に良好な磨痕があり特に 上面は浅く凹む。				完形

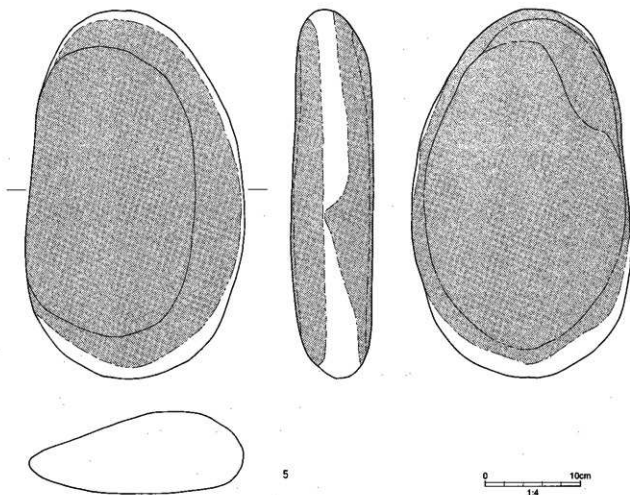


図239 A001 (3)

A002

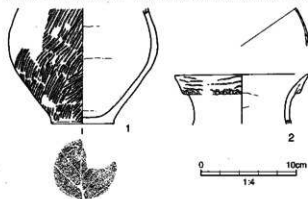
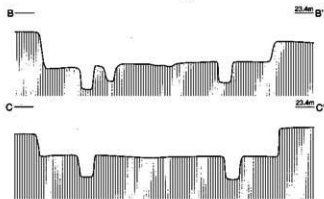
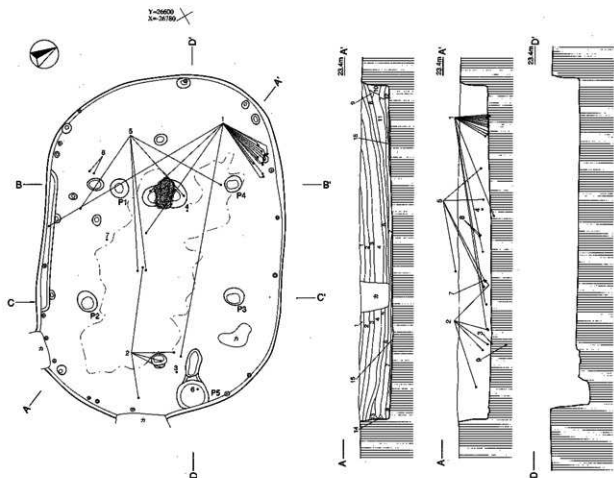
検出地区 F4-9G。台地北側先端部、平坦面に位置する。周辺の弥生時代の遺構としてA001・A003がある。

遺 構 小判型の中型住居跡。床はローンを踏み固めた床で、硬化面が住居跡中央はやや軟弱である。壁もローンの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴は4本柱で、P1～P4が相当する、P5は貯蔵穴と考えられる。周溝は一部で検出された。炉は住居跡中央からやや北に寄った場所に位置し、地床炉である。自然堆積による埋没が想定される。

覆土は、色調を基本に15層に分層。自然堆積による埋没が想定される。貯蔵穴P5についても覆土の観察から自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。土製紡錘車2点出土。そのうち6については、貯蔵穴から出土で示唆に富む。また2については、壺型土器の複合口縁部を横回転の燃糸文を施紋している珍しい例と言えるだろう。また、覆土中から縄文土器の破片が比較的多く出土した。同じく覆土中から有舌先頭器が出土した。

所 見 出土遺物から、弥生時代後期の住居跡と判断した。



- | | | | |
|-----|-------|----|------|
| 1層 | 褐色土 | 強い | 強い |
| 2層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 3層 | 黒褐色土 | 強い | 強い |
| 4層 | 黒色土 | 強い | 強い |
| 5層 | 黒褐色土 | 強い | 強い |
| 6層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 7層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 8層 | 暗黄褐色土 | 強い | 強い |
| 9層 | 暗褐色土 | 強い | やや弱い |
| 10層 | 暗褐色土 | 強い | やや弱い |
| 11層 | 暗黄褐色土 | 強い | やや弱い |
| 12層 | 暗褐色土 | 強い | やや弱い |
| 13層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 14層 | 暗黄褐色土 | 強い | 強い |
| 15層 | 暗黄褐色土 | 強い | 強い |

しまり 粘性

図240 A002

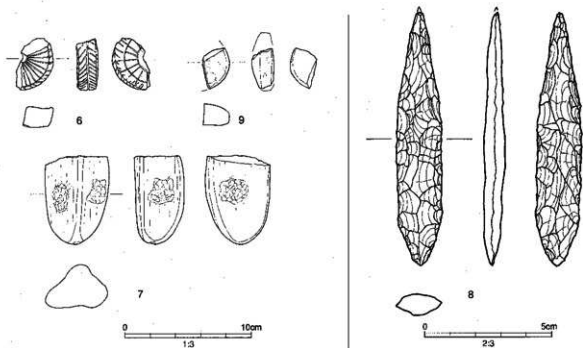
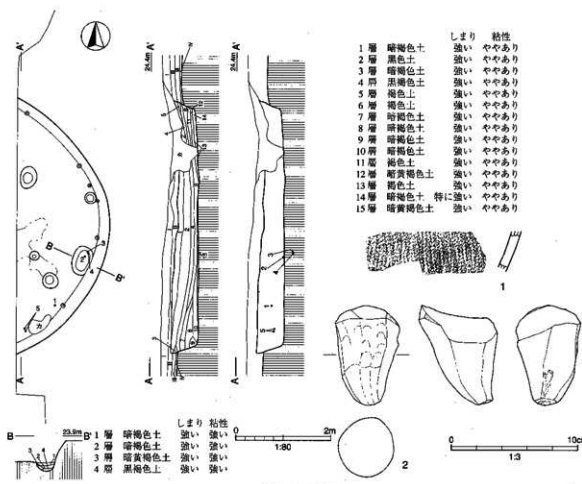


図241 A002(2)

表125 A002遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	粘土	遺存	備考
1	弥生 甕	—×66×(122) 胴上半に膨らみをもつ 胴部附加条縄文 底部木葉痕	砂赤褐色 暗褐色	砂粒多含	1/3	外面スス及びコゲ状付着物
2	弥生 甕	(140)×—×(52) 口縁へ折り返し 口縁・口唇とも熱承文 下縁給飾縄文施文後捺状工具で押圧 頸部ナデ	暗褐色	粗砂粒 多含	口縁片	頸部外面 コゲ状付着物
3	弥生 甕	—×—×— 胴部下半附加条縄文	暗赤褐色	砂粒多含	胴部片	外面に微量の コゲ状付着物
4	弥生 甕	—×—×— 口縁 ナデ後上端に縄文原体の押圧 頸部縦ハケ 内面 口唇へ口縁横ハケ 頸部斜めのハケ	橙褐色	砂粒少含	口縁片	
5	弥生 甕	—×—×(142) 最大径(240) 胴部楕円状に膨らむ 外面 胴部上半縦ハケ 下半横ハケ 下縁斜めのハケ 内面 胴部上半横ハケ 下半・下縁ナデ	橙褐色	砂粒多 橙色粒多 含	胴部片	外面コゲ状付着 物
6	土製品 紡錘車	径(210)×厚さ170 推定径4 中央部に厚みをもつ 丁寧にナデ調整され若干の磨痕を残す				断片
7	石器 凹石	長軸71×短軸51×器厚33 重量171.9g 長楕円形を呈すると思われる 全体に弱い磨痕が見られる 三角形状の各面に凹をもつ				1/2
8	石器 尖頭器	長軸100×短軸18×器厚8 重量15.8g 尖頭を欠くが細牙の長槍形尖頭器である 両面全面調整が施されている				略完形
9	土製品 紡錘車	上部径(210)×底部径(200)×器厚160 推定口径6 厚手の作り 使用痕不明瞭 上部 縁辺に沿って沈線をめぐらし内部は孔に向かって放射状沈線 底部 縁辺やや内側と孔の周りに二重沈線 上部には幅広の断続的放射状沈線 側面 中央部の沈線を挟んで両側に矢羽状の沈線				断片



- | 層 | 土質 | しまり | 粘性 |
|-----|-------|------|------|
| 1層 | 暗褐色土 | 強い | ややあり |
| 2層 | 黒色土 | 強い | ややあり |
| 3層 | 暗褐色土 | 強い | ややあり |
| 4層 | 黒褐色土 | 強い | ややあり |
| 5層 | 褐色土 | 強い | ややあり |
| 6層 | 褐色土 | 強い | ややあり |
| 7層 | 暗褐色土 | 強い | ややあり |
| 8層 | 暗褐色土 | 強い | ややあり |
| 9層 | 暗褐色土 | 強い | ややあり |
| 10層 | 暗褐色土 | 強い | ややあり |
| 11層 | 褐色土 | 強い | ややあり |
| 12層 | 暗黄褐色土 | 強い | ややあり |
| 13層 | 褐色土 | 強い | ややあり |
| 14層 | 暗褐色土 | 特に強い | ややあり |
| 15層 | 暗黄褐色土 | 強い | ややあり |

図242 A003

表126 A003遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-X-X- 胴部上半部糸文		明橙褐色	少雑多含	胴部片	
2	石器 磨石?	長軸79×短軸48×器厚57 重量200.9g 断片のため全体の形状は不明。残存部は角状を呈している。全体に研磨痕を残す上部の一部が面取り状を呈しており、さらに下部の磨耗が激しいことから、有脚石製品の脚部であった可能性も考えられる。					石製品脚部?

A003

検出地区 F3-80G。台地北側縁部、平坦面に位置する。周辺の弥生時代の遺構としてA002・A003がある。

遺構 小判型の中型住居跡と考えられるが、遺構の大部分が調査区外に伸びているため、規模形態については不明である。床はロームを踏み固めた床で、一部やや軟弱な部分もあるが全体的には平坦なしっかりした床である。壁もロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。PIは主柱穴で、恐らく4本柱と思われる。周溝は検出されなかった。壁際の小穴は礎柱穴と考えられる。炬は検出されなかった。

覆土は、色調を基本に15層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて少量出土。縄文土器と弥生土器が混在するような状況で出土しているが、流れ込みに因るものと思われる。

所見 出土遺物から弥生時代後期の住居跡と判断した。糸文を施している弥生土器が床面直上～覆土下層レベルで出土していることから後期でも古い段階の住居跡の可能性もある。

表127 弥生時代遺構一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模：長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
A001	F3-78-1	小判形 6.08×4.70×0.34 主軸 N-35°-W 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。覆土中から縄文土器出土	床面 ロームを踏み固めた床で住居中央で硬化面が広範囲に検出 壁 斜めに直線的に立ち上がる 色調を基本に12層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される	地床炉 住居中央からやや北による 周溝 約3/4周する 主柱穴 4本柱
A002	F4-9-1	小判形 7.03×5.10×0.58 主軸 N-60°-W 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土。土製紡錘車2点出土	床面 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央はやや軟弱 壁 ほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に15層に分層。自然堆積による埋没が想定される	地床炉 住居中央からやや西による 周溝 一部検出 主柱穴 4本柱
A003	F3-80-1	(小判)形 -×-×0.60 床面直上から覆土上層にかけて少量出土。縄文土器と弥生土器が混在して出土	床面 ロームを踏み固めた床で、全体的にしっとりしている 壁 斜めに直線的に立ち上がる 色調を基本に15層に分層。自然堆積による埋没が想定される	一部のみ調査 周溝 検出されず 主柱穴 不明

第3節 奈良・平安時代

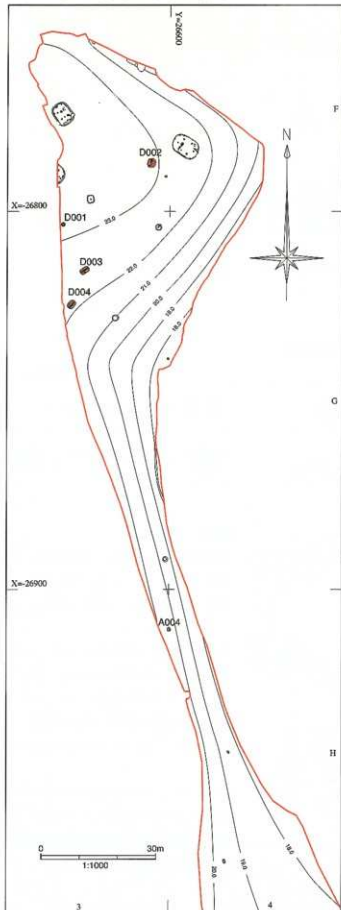


図243 奈良・平安時代遺構配置図

役山東遺跡における奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑1基、土塚墓3基が検出されている。検出された地区は住居跡については、調査区中央に位置する傾斜地部分で、土坑群については、調査区北側の台地平坦面に展開する。

奈良・平安時代の土坑が比較的多く検出されたことは、今回の成果の一部で、栗谷遺跡での検出例はなかった。ただし、遺跡の一部を調査したに過ぎないため、全体としての様相や、同時期の集落との関係等については、明らかにし得なかった。

以下、個別の遺構についての報告に移りたい。詳細は以下の記述、遺構一覧表、及び遺物観察表を参照されたい。

(1) 竪穴住居跡

A004

検出地区 H4-2G 台地先端斜面部に位置する。他の奈良・平安時代の遺構から離れ孤立して立地している。

遺 構 黒色土中に床面をもつ住居跡である。確認調査時の過誤により遺構検出面を過ぎてしまい、竈と床面・壁の一部を検出できたのみであった。

床面は西側の斜面上方の壁際の一部でロームの床、斜面下方では黒色土を踏み固めた床であった。共によく踏み固められており硬く平坦な床であった。壁は、黒色土の壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は検出せず、支柱穴は不明である。竈は両袖とも検出できたが、下半のみの検出となった。燃焼部奥壁に赤色化した部分が認められた。煙道部については不明である。

覆土は色調を基本に3層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 竈内から甕の大型破片が多数出土。

所 見 出土遺物から奈良・平安時代の住居跡と判断した。斜面に立地する住居跡で、珍しい例と言えるだろう。

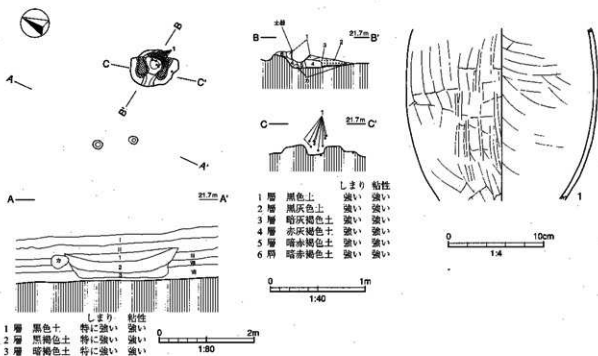


図244 A004

表128 A004遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法 址 成形・調整等の特徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 甕	一×一×(182) 最大径脚部(201) 外面 胴部縦斜めのヘラ削り後一部縦ヘラ削き 内面ナデ	赤褐色 暗赤褐色	砂粒多含	胴部片	外面下半に磁土の コゲ状付着物

(2) 土坑

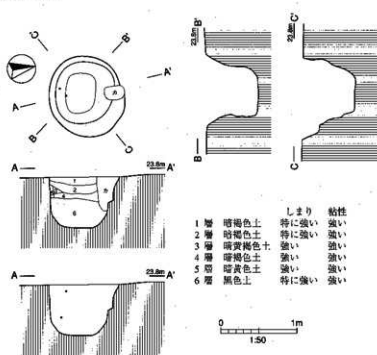


図245 D001

D001

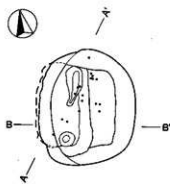
検出地区 G3-71G。台地中央、平坦面に位置する。奈良・平安時代の遺構として、D002・D003・D004がある。

遺 構 不整形の土坑。底部は、ロームの底部でほぼ平坦。壁も、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。

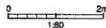
覆土は色調を基本に6層に分層。

遺 物 覆土中に小破片が数点出土。

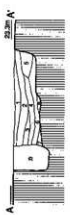
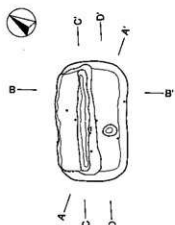
所 見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。形状、規模、覆土の状況などが掘建柱建物跡の柱穴に近似する。



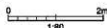
- | 層 | 土質 | しまり | 粘性 |
|-----|-------|------|----|
| 1層 | 褐色土 | 強い | 強い |
| 2層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 3層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 4層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 5層 | 暗褐色土 | 特に強い | 強い |
| 6層 | 暗褐色土 | 特に強い | 強い |
| 7層 | 暗黄褐色土 | 特に強い | 強い |
| 8層 | 褐色土 | 特に強い | 強い |
| 9層 | 褐色土 | しまり | 粘性 |
| 10層 | 暗黄褐色土 | 特に強い | 強い |
| 11層 | 暗褐色土 | 特に強い | 強い |
| 12層 | 暗黄褐色土 | 特に強い | 強い |
| 13層 | 暗褐色土 | 特に強い | 強い |
| 14層 | 暗黄褐色土 | 特に強い | 強い |
| 15層 | 暗黄褐色土 | 特に強い | 強い |



D002



- | 層 | 土質 | しまり | 粘性 |
|----|-------|-----|------|
| 1層 | 褐色土 | 強い | やや強い |
| 2層 | 暗褐色土 | 強い | やや強い |
| 3層 | 暗褐色土 | 強い | やや強い |
| 4層 | 暗褐色土 | 強い | やや強い |
| 5層 | 暗褐色土 | 強い | やや強い |
| 6層 | 暗褐色土 | 強い | やや強い |
| 7層 | 暗褐色土 | 強い | 強い |
| 8層 | 暗黄褐色土 | 強い | 強い |



D003

図246 D002・D003

表129 D003遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	—×—×— 口径平直 口縁内面 稜をもつ 口縁から口縁上端にかけて直下する短沈線3条。両側に口縁と平行する 沈線。渦巻き状隆帯両脇と口縁直下に沿って角押文が施文される。	橙褐色	砂粒多含	口縁片	

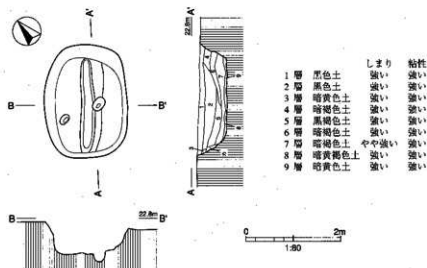


図247 D004

D002

検出地区 F3-99G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。周辺の遺構としてD001・D003・D004がある。

遺構 隅丸長方形の土坑で、一部オーバーハングしている。底面はロームの床で、一段テラス状の平場を持つ。双方とも全体的に硬い平坦な底面である。底面に小穴1基、溝1条を検出。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土は、色調を基本に15層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土中層から上層にかけて破片を中心に少量出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。土墳墓と考えられる。

D003

検出地区 G3-72G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。周辺の遺構としてD001・D002・D004がある。

遺構 隅丸長方形の土坑。底面はロームの床で、一段テラス上の平場を持つ。双方とも全体的に硬い平坦な底面である。底面に小穴1基を検出。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。底面に近いレベルで大きなロームブロックを検出。本来存在していた天井部が崩落したものと考えられる。本土坑にオーバーハングした天井部があるならば、D002と非常に近似した形状となる。

覆土は、色調を基本に8層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土中層から上層にかけて破片を中心に少量出土。

所見 縄文土器も出土しているが、全体の出土状況、遺構の形状、覆土の観察等から奈良・平安時代の土坑と判断した。D002同様、土墳墓と考えられる。

D004

検出地区 G3-73G。台地北側縁辺部、平坦面に位置する。周辺の遺構としてD001・D002・D003がある。

遺構 隅丸長方形の土坑。底面はロームの床で、一段テラス上の平場を持つ。双方とも全体的に硬い平坦な底面である。底面に小穴1基、溝1条を検出。底面に近いレベルでロームを多く含む層を検出。本来存在していた天井部が崩落したものと考えられる。壁もロームの壁で、斜めに立ち上がっている。

るが、本来は、ほぼ垂直に立ち上がっていたものと思われる。本土坑にオーバーハングした天井部があるならば、D002・D003と非常に近似した形状となる。

覆土は、色調を基本に9層に分層。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土中層から上層にかけて破片を中心に少量出土。

所見 出土遺物から奈良・平安時代の土坑と判断した。D002・D003同様、土壌墓と考えられる。

表130 奈良・平安時代遺構一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 礎土の状況	燃焼施設・位置 関係・備考
A004	H4-2-1	不明 -X-X- 主軸 N-100°-W	底面 黒色土の床で硬くしっかりとした床壁 一部で検出。黒色土の壁ではほぼ垂直に立ち上がる	カマド 1基 周溝 検出されず 土柱穴 不明 斜面地に立地
		カマド内から丸形土器の大型破片が出土	色調を基本に3層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
D001	G3-71-1	不整円形 1.06×1.00×0.68 主軸 N-81°-W	床面 ロームの底面ではほぼ平坦 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	独立柱建物跡の柱穴に近似
		覆土中から小破片が数点出土	色調を基本に6層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
D002	F3-99-4	隅丸長方形 2.10×1.88×0.55 主軸 N-10°-W	床面 ロームの底面ではほぼ平坦。小穴1基、溝1条を検出 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	オーバーハングしている。一段テラス状の平場をもつ
		覆土中層～上層にかけて少量出土	色調を基本に15層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
D003	G3-72-4	隅丸長方形 2.55×1.47×0.52 主軸 N-58°-E	床面 ロームの底面ではほぼ平坦。小穴1基、溝1条を検出 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	一段テラス状の平場をもつ
		覆土中層～上層にかけて少量出土	色調を基本に8層に分層。人為的な埋戻しが想定される	
D004	G3-73-1	隅丸長方形 2.40×1.76×0.55 主軸 N-42°-E	床面 ロームの底面ではほぼ平坦。小穴1基、溝1条を検出 壁 斜めに立ち上がる	一段テラス状の平場をもつ
		覆土中層～上層にかけて少量出土	色調を基本に9層に分層。人為的な埋戻しが想定される	

第4節 中世以降

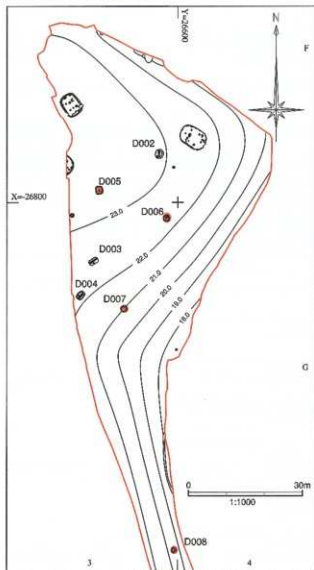


図248 中世以降遺構配置図

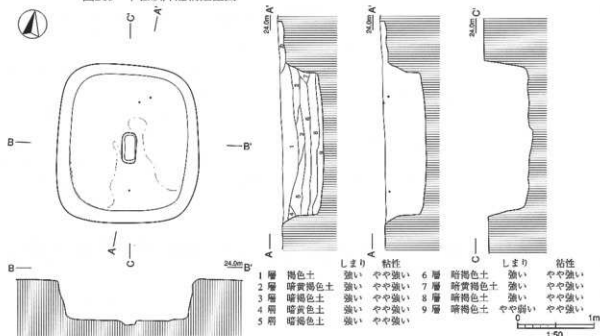


図249 D005

役山東遺跡における中世以降及び時期不明の遺構は、土坑4基である。

立地に関してであるが、D005・D006は台地側縁辺部の平坦面に立地し、D007・D008は台地縁辺部の斜面地に立地している。土坑の用途としては、いずれも土坑墓或いは炭焼き窯かと思われる。

以下、個別の遺構についての報告に移りたい。詳細は以下の記述、遺構一覧表、及び遺物観察表等を参照されたい。

(1) 土坑

D005

検出地区 F3-80G

遺構 隅丸方形のプランで、底部はロームの平坦で非常に堅い底面で、小穴を1基検出し、炭化物を広範囲で検出している。壁は斜めに急傾斜で立ち上がっている。

覆土は色調を基本に9層に分層。人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中層～上層にかけて小破片を少量出土。

所見 出土遺物、遺構の形状、覆土の観察等から中世以降の土坑と考えられ、類例としては栗谷遺跡D003(第1分層)が挙げられる。

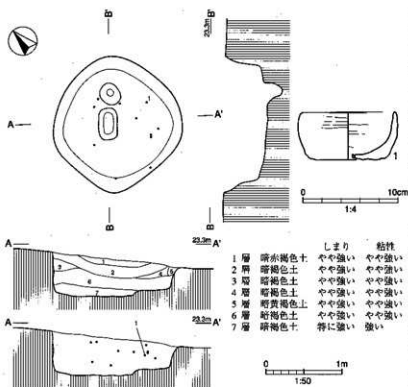


図250 D006

D006

検出地区 G3-93G

遺構 隅丸長方形のプランで、底部はロームで平坦な非常に堅い底面で、小穴を2基検出し、炭化物を広範囲で検出している。壁は斜めに急傾斜で立ち上がっている。

覆土は色調を基本に7層に分層。上層で焼土を検出し、人為堆積と考えられる。

遺物 覆土中層～上層にかけて小破片を少量出土している。

所見 出土遺物、遺構の形状、覆土の観察等から中世以降の土坑と考えられ類例としては栗谷遺跡D003(第1分冊)が挙げられる。

表131 D006遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 成	胎上	遺存	備考
1	土師器 杯	(100)×(80)×(50) 底部本葉痕へラ削り後横ナデ 口縁 内外面横ナデ 体部上半 内面横ナデ	暗褐色	砂粒少欠	1/4	

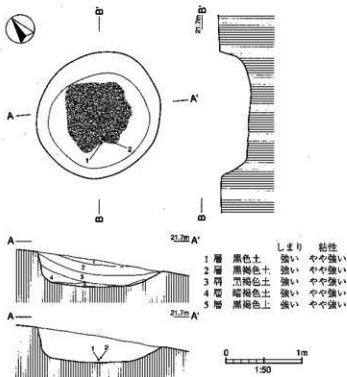


図251 D007

D007

検出地区 G3-84G。斜面地に立地。

遺構 不整円形のプランで、底部はロームの平坦な底面で、熱を受け、広範囲に赤化している。壁は斜めに立ち上がっている。

覆土は色調を基本に5層に分層。人為的堆積と考えられる。

遺物 覆土中から土師器の小破片が数点出土している。

所見 出土遺物、遺構の形状、覆土の観察等から中世以降の土坑と考えられ、遺構の立地、形態等はD008と類似する。

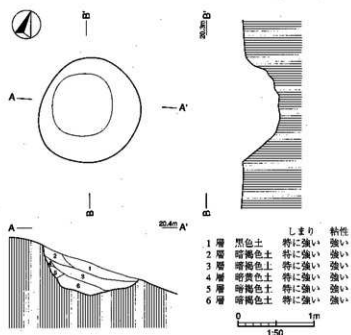


図252 D008

D008

検出地区 G3-100G. 斜面地に立地。

遺構 不整形のプランで、底部はロームの底面で、やや丸みを持ち、なだらかに立ち上がる。

覆土は色調を基本に6層に分層。自然堆積による埋没が想定される。

遺物 遺物は出土していない。

所見 遺物は出土していないが遺構の形状、覆土の観察等から中世以降の土坑と考えられ、遺構の立地、形態等はD007と類似する。

表132 中世以降土坑一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模；長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他考
D005	F3-80-4	隅丸長方形 2.10×1.88×0.55 底面 N-10°-W	色調を基本に9層に分層。人為的な埋没しが想定される	
		ロームの平坦な床で小穴を1基検出。急傾斜で立ち上がる	覆土下層から小破片が数点出土	
D006	G3-91-3	隅丸方形 1.80×1.70×0.51 底面 N-44°-E	色調を基本に7層に分層。覆土上層で焼土を検出。人為的堆積が想定される	
		ロームの平坦な床で小穴を2基検出。急傾斜で立ち上がる	覆土中から小破片が少量出土	
D007	G3-83-4	不整形 1.69×1.62×0.37 底面 N-37°-E	色調を基本に5層に分層。人為的堆積が想定される	斜面地に立地
		ロームの平坦な床で斜めに立ち上がる。底面は熱を受け赤化している	覆土中から土加器小破が数点出土	
D008	G3-100-3	不整形 1.40×1.35×0.57 底面 N-19°-W	色調を基本に6層に分層。自然堆積による埋没が想定される	斜面地に立地
		ロームの底面でやや丸みを持ち、なだらかに立ち上がる	出土遺物なし	

第5節 遺構外出土遺物

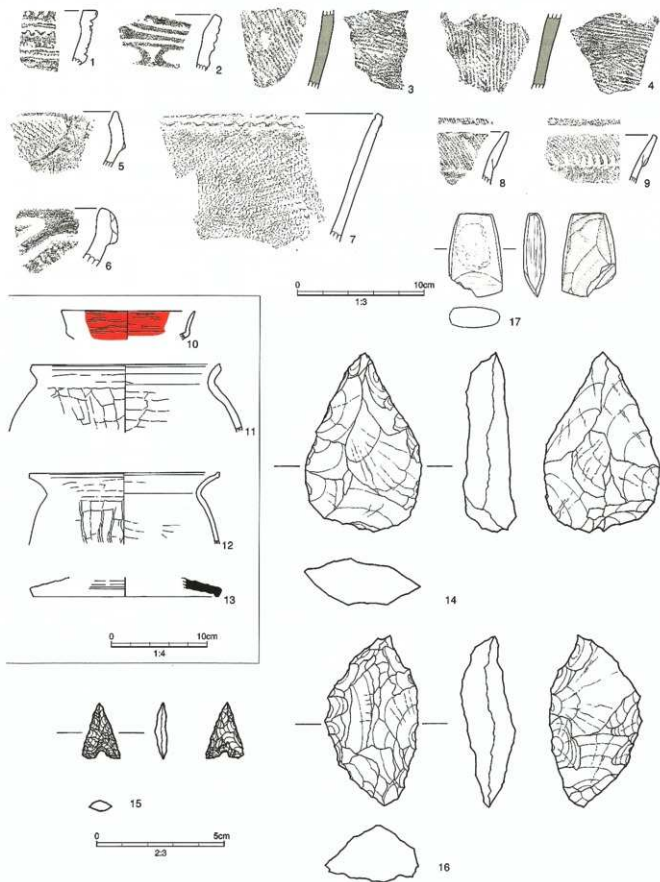


图253 遺構外出土遺物

表133 遺構外出土遺物一覧表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	縄文 深鉢	-X-X- 内面に稜をもつ 円形及び半円形に刺突列 隆帯の上下に沿って三角状の連続刺突が施される	砂椀褐 砂椀褐 良	粗砂粒多 金雲母多 含	口縁片	F4-9-1G
2	縄文 深鉢	-X-X- 波状口縁 内面に稜をもつ 断面角圓状 横位の沈線と杵状隆帯の貼付がみられる	椀褐 青	金雲母 多含	口縁片	G4-11-3G
3	縄文 深鉢	-X-X- 外面 斜位 内面 横位の条痕文	砂椀褐 砂椀 青	繊維多含	胴部片	G4-1-1G
4	縄文 深鉢	-X-X- 外面 縦位の条痕文が施文され、その間に狭い幅で斜位 の条痕文が施文される 内面 横位、斜位の条痕文	椀褐 青	繊維多含	胴部片	F4-10-1G
5	縄文 深鉢	-X-X- 口縁内湾 微隆起線文による区画内に無節縄文	暗褐 良		口縁片	G3-94-1G
6	縄文 深鉢	-X-X- 隆帯による三角状と曲線のモチーフ内にRL縄文施文	暗褐 青		口縁片	I4-81-1G
7	縄文 深鉢	-X-X- 平縁で断面角圓状を呈する。口縁下に紐線文を添付 紐線文下には横位に2条、以下斜位の沈線文を施す。地文はLR縄文、 L1縁内面直下に1条の沈線を施す。	砂椀褐 砂椀褐 青	粗砂粒 多含	口縁片	G4-81-1G
8	弥生 壺	-X-X- 口縁折り返し 11縁・11折附加条縄文	砂椀褐 砂椀褐 青	砂粒多含	口縁片	墨書「□」 体部外面 G4-1-1G
9	弥生 壺	-X-X- 口縁折り返し 口縁・口唇附加条縄文 下層縄文単体の押付 内面ナデ	砂椀褐 砂椀 青	砂粒多含	口縁片	F4-18-2G
10	弥生? 高坏?	(140)×-(X)(30) 坏部下半に括れをもつ 口縁やや内湾 内外面横ナデ後横ヘラ磨き	椀褐 青	粗砂粒 多含	口縁片	G3-87-3G 赤彩
11	土師器 壺	(196)×-(X)(72) 口縁受け口状 横ナデ 頸部横ナデ 胴部上半縁ヘラ削り 内面横ナデ	砂椀褐 砂椀 青	砂粒含	口縁片	H4-14-1G
12	土師器 壺	(200)×-(X)(76) 口縁上端部つまみ上げ 外面には凹線状の調整がされ る L1縁・頸部横ナデ 胴部上半縁ヘラ削り後縦ヘラ磨き 内面 ナデ	灰褐 青	砂粒多含	口縁片	H4-2-1G
13	須臾器 蓋	蓋径(194)×かえり径(188)×(20) ロク口成形 L1縁折り返し	灰褐 黒	砂粒少含	口縁片	F3-90-4G
14	石器 尖頭器	長軸70×短軸46×器厚19 重量59.5g やや厚手の三角形に近い形を呈する 縁辺調整を立体とした粗い作りで ある 後期旧石器時代末～縄文時代草創期初頃?				F3-76-2G
15	石器 石鏃	長軸22×短軸15×器厚4 重量0.8g 凹基無基鏃である 全面調整が施される			完形	G3-71-3G
16	石器 尖頭器	長軸68×短軸37×器厚28 重量45.1g 厚手の木葉痕 片面全面調整 もう片面は樹皮調整を主体とし素材面を 残す 後期旧石器時代末～縄文時代草創期初頃?			完形	F4-20-1G
17	石器 磨製石斧	長軸66×短軸41×器厚18 重量85.4g 断面隅丸長方形を呈する 定角式磨製石斧である 全体に良好な研磨痕を残すが片面には不明瞭ながら小さな敲打痕が認め られる				

第3章 考察

第1節 縄文時代

役山東における縄文時代の遺構は早期の炉穴が7基と打製石斧の出土地点が1箇所であった。7基の炉穴は、いずれも掘込みの浅く、明瞭な火床を持たないタイプで、栗谷分類でいうA類に相当する。炉穴7基の内6基が斜面に立地していた。斜面部をかなり調査したことにもよるが、平坦面より、斜面部でA類の炉穴が多く検出されていることは、今後の炉穴栗谷A類の立地、展開を考える上で、重要になってくると思われ、役山東遺跡における成果の1つと言えよう。また、遺構覆土内からの遺物や遺構外出土遺物の中に、草創期に遡る、尖頭器等が出土していることも、役山東遺跡検出の炉穴が、早期後半の条痕文期の所産と考えるより、早期前半の巻糸文期と考える方が、より妥当性があると思われる。栗谷遺跡と役山東遺跡を隔てる谷の兩岸に早期の遺跡が展開することは興味深い。今後、遺跡を越えた、縄文時代早期の展開を考える上で1つの手がかりになっていくだろう。

第2節 弥生時代

弥生時代の遺構は後期の住居跡3軒である。いずれも調査区北側に広がる台地縁辺部での展開である。狭い面積の中で3軒検出されたことは、調査区外に広がる役山東遺跡の台地に弥生後期の集落が広く大きく広がる予感をさせる。恐らく栗谷遺跡と同様、同規模で広がっていくイメージさえ持つ。栗谷遺跡と栗谷遺跡から谷を隔て他役山東遺跡、更に谷を隔てて栗谷遺跡の考察で取り上げた逆水遺跡の周囲は、弥生後期の遺跡の密集地帯といえ、恐らく印旛沼周辺の樹枝状に浸食された台地の上には、台地ごとにこのような状況があるのではないだろうか(註1)。役山東はそうしたイメージを持たせる遺跡である。出土遺物は少ないが、少ない出土遺物からの分析をすると、複合口縁プラス頸部無文帯系の土器(栗谷A-2類)が比較的単系で出土している。また、複合口縁部に燃り糸を横回転する土器も出土していることから、栗谷A-2類の比較的古い段階の集落展開が予想される。いずれにしても今後、周辺の調査例を増やして考察してゆかなければならない問題である。

第3節 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、堅穴住居跡1軒と土坑4基である。堅穴住居跡は斜面部での検出で、近年その類例が各地で報告されているが、まだ、珍しいタイプと言えよう。今後、これらの類例が増えることによって、これまでの奈良・平安時代の集落展開の見直しが迫られることにもなるだろう。

オーバーハンクしている土坑3例については、栗谷遺跡では検出されなかった例であるが、八千代市井戸向遺跡等(註2)で土坑墓として報告されている。今回の例は、井戸向と同タイプのものと思われる。役山東遺跡における、まだ見ぬ奈良・平安時代の墓域に相当するのかもしれない。今後、該期の集落展開と合わせ、類例を増やし考察していきたい問題である。

以上、考察というよりも、むしろ問題点の提示にとどまった感がある。最後に、役山東遺跡の調査は、比較的小規模な調査にも係わらず、様々な問題を提起した、そのような調査であったことを述べて、本編の考察を終了としたい。

註(1) そうした状況の中、役山東遺跡から更に小支谷を隔てた向境遺跡において、弥生時代の堅穴住居跡数が1軒のみであることは興味深い。

註(2) 『八千代市井戸向遺跡』 1987 (財)千葉県文化財センター

第4編 雷南遺跡

第1章 雷南遺跡の調査の概要

第1節 雷南遺跡の概要

雷南遺跡は、千葉県八千代市保品字上谷に所在し、地形的には栗谷遺跡・役山東遺跡同様、下総台地の北西部に立地し、印旛沼南岸に位置する。地形的特徴については、第1編栗谷遺跡の第1章を参照されたい。雷南遺跡は、栗谷遺跡の南側に展開する上谷遺跡のさらに南にのびる谷津によって栗谷遺跡・上谷遺跡と区分され、両遺跡の所在する舌状台地の基部にあたる部分に展開する。本遺跡が所在する地点の標高は、約23m～24m。谷津に展開していた水田面との比高は約10mである。

雷南遺跡の周辺遺跡として北側の谷津を隔て、対岸の台地に前述した上谷遺跡及び栗谷遺跡があり、西側には雷遺跡が展開する。雷・雷南遺跡のさらに南の開発事業範囲外には向割遺跡、下宿遺跡、下宿東遺跡などが綿々と連なり、これらの遺跡は、上谷遺跡・栗谷遺跡を含め隣接しながら大きく広がり、印旛沼南岸西端における遺跡群を形成している。

雷南遺跡は、その所在する台地北端の縁辺部から台地平坦面の調査となった。確認調査のみの地区と本調査まで実施した地区に分かれる。本調査区域において調査された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒、土坑1基、時期不明の溝3条である。確認調査で検出された遺構は縄文時代の炉穴1基、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡10軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡18軒、時期不明の土坑4基、溝1条である。遺跡の本来の広がりから考えると、調査はその一部を実施したのみであるにも拘わらず、弥生時代及び奈良・平安時代の竪穴住居跡が多数検出されたことは、本遺跡が栗谷・上谷両遺跡に勝るとも劣らない大集落遺跡であることを物語っている。

遺跡の基本層序であるが、栗谷遺跡と同様となるが、第I層が表土層・第II層が黒色土層・第III層が暗褐色土層・第IV層がソフトローム漸移層・第V層がソフトローム層となる。遺構検出作業にあたっては、第IV層下面あるいは第V層上面で行った。

以上、雷南遺跡の概要について、検出された遺構数を中心に述べてきたが、個別の遺構における詳細な報告及び考察等については次章以降で触れることとする。ここでは、雷南遺跡における野外調査時の遺構番号(旧番号)と本書掲載の遺構番号(新番号)の新旧番号対照表を載せて本章を終わりたい。

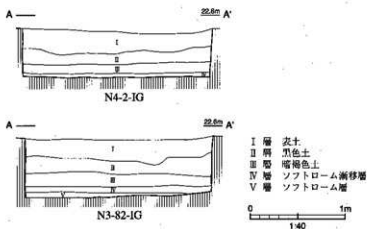


図254 雷南遺跡の基本土層図

表134 雷南新旧遺構番号対照表

新番号	旧番号
竪穴住居跡	
A001	I-001
土坑	
D001	I-006
溝	
E001	I-002
E002	I-003
E003	I-004,5

第2章 遺構と遺物

第1節 本調査区域

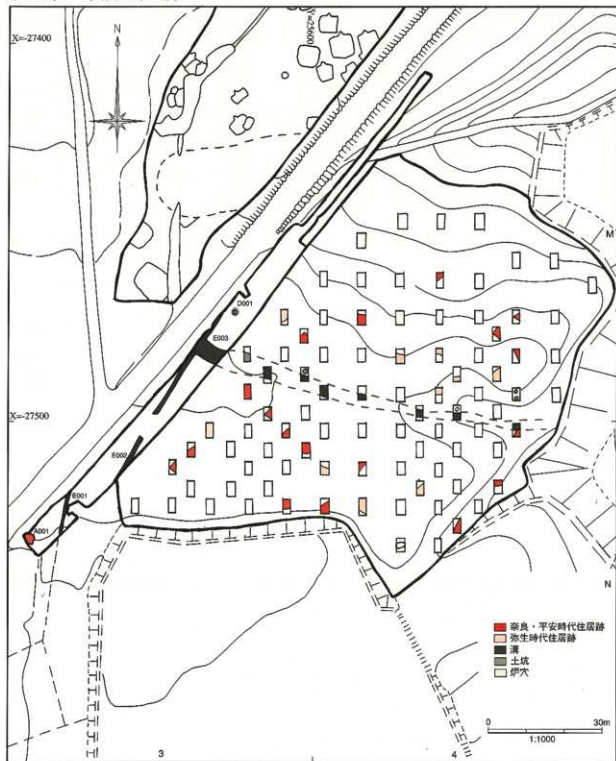


図255 雷南遺跡遺構検出状況図

雷南遺跡の本調査区域における調査された遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒、土坑1基、時期不明の溝3条である。

以下、個別の遺構についての報告に移りたい。詳細は以下の記述、遺構一覧表、及び遺物観察表等を参照されたい。

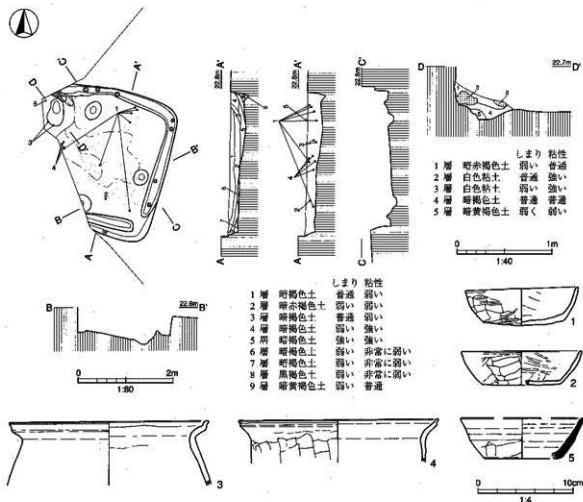


図256 A001

表135 A001遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 杯	118×82×41 やや丸みをもった平底 ヘラ削り後・部ヘラ磨き 口縁 横ナデ 内面 ヘラナデ後ヘラ磨き 体部 ヘラ削り後・部ヘラ磨き	にぶい赤 褐 普	砂粒含	4/5	
2	土師器 杯	(126)×(82)×36 底部平底ヘラ削り 口縁 横ナデ 内面 ヘラナデ後ヘラ磨き 体部 ヘラ削り	にぶい小 褐 普	砂粒含	1/4	
3	土師器 甕	(210)×—×(45) 口縁直立しつつやや外側に反る 外面凹線状の調整 口縁 外面横ナデ 内面 ヘラナデ	暗褐 普	粗砂粒 雲母含	口縁片	
4	土師器 甕	(210)×—×(45) 口縁 横ナデ 内面 ナデ 胴部上半縦ヘラ削り	暗褐 普	砂粒含	口縁片	
5	須恵器 杯	(130)×(80)×43 ロクロ成形 体部下端・底部ヘラ削り	灰 墨	雲母含	口縁～ 体部 1/5	

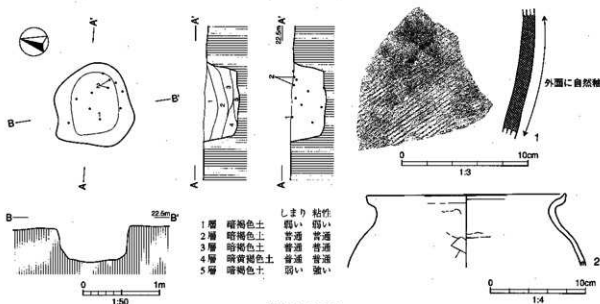


図257 D001

表136 D001遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	灰軸陶器 甕	-X-X- 胴部上半 平行タタキ 内面ナデ		赤緑灰 赤灰 青	砂粒含	胴部片	外面自然軸
2	土師器 甕	(110)×-×(76) 口縁つまみ上げで立ち上がる 胴部上半へ丸り 内面ナデ	口縁横ナデ	暗褐色 青	粗砂粒含	口縁片	

A001

検出地区 N3-23G。台地平坦面、調査区南端に位置する。周辺の遺構としてE001がある。

遺構 隅丸方形の平面形で、調査区外にも遺構が延びる。床はロームを踏み固めた床で住居跡中央で硬化面が広範囲に広がる。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。周溝は調査が行われた部分ではほぼ全周していた。主柱穴は不明である。竈は住居跡北西隅で検出。セクションで天井部を検出。遺構が調査区外に延びているため片袖のみの検出で、煙道がコーナーに作られているのか、壁に直角に延びているかなど詳細は不明である。

覆土は色調を基本に9層に分層。覆土下層に広範囲の焼土を検出。人為的な埋戻しが想定される。

遺物 覆土中から土師器、須恵器を中心に少量出土した。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断した。焼失家屋と考えられる。

D001

検出地区 M3-78G。平坦面に位置する。周辺の遺構としてE002がある。

遺構 不整形の土坑で底面はロームの底面でほぼ平坦。壁もロームの壁で斜めに急傾斜で直線的に立ち上がる。

覆土は色調を基本に5層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される。

遺物 覆土中から土師器、須恵器を中心に少量出土した。

所見 出土遺物から、奈良・平安時代の土坑と判断した。

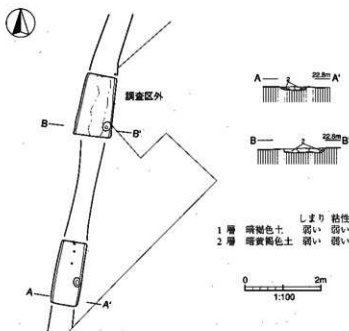


図258 E001

E001

検出地区 N3-33G外。台地平坦面に立地する。周辺の遺構としてA001がある。

遺構 比較的しっかりとした掘り込みを持ち、底部は概ね平坦で、硬化面を検出している。

覆土は色調を基本に2層に分層。自然堆積による埋没が考えられる。

遺物 覆土中から小破片が少量出土。

所見 硬化面を検出していることから、道路状の遺構と考えられる。

表137 雷南遺構一覧表

(単位:m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模：長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
A001	N3-23G	(隅丸方形) -X-X-	床面 ロームの平坦な床で、住居跡中央部で硬化面が検出される 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	カマド 1基 周溝 ほぼ全周する 支柱穴 不明
		覆土中から土師器片、須恵器片を中心に少量出土	色調を基本に9層に分層。焼土が広範囲で検出。人為的堆積が想定される	
D001	M3-78G	不整形 -X-X-	床面 ロームのほぼ平坦な底部 壁 ほぼ垂直に立ち上がる	
		覆土中から土師器片、須恵器片を中心に少量出土	色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
E001	N3-33G	幅0.9×深さ	床面 ロームのほぼ平坦な底部で、一部で硬化面を検出 壁 斜めに立ち上がる	
		覆土中から土師器片、須恵器片を中心に少量出土	色調を基本に2層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
E002	M3-70G 他	幅1.1×深さ0.51	床面 ロームのほぼ平坦な底部 壁 急傾斜で立ち上がる	
			色調を基本に5層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
E003	M3-96G 他	幅1.25×深さ0.3 幅1.88×深さ0.44	床面 洗い道上の断面形。2本の溝が平行してのびる	確認調査で検出した溝と同一と思われる
			色調を基本に3層に分層。自然堆積による埋没が想定される	

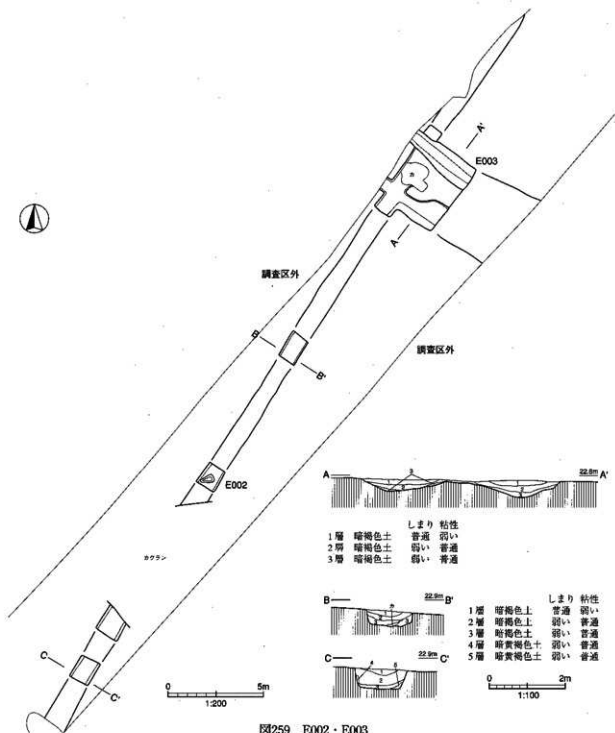


図259 E002・E003

E002・E003

検出地区 M3-96G外。台地平坦面に立地する。

遺構 E002はしっかりとした掘り込みを持ち、底部は平坦で斜めに直線的に立ち上がる。E003と交わるが新旧関係は明らかにし得なかった。E003は、なだらかな皿状の断面形で2本が平行して延びていた。

覆土は色調を基本に5層或いは3層に分層したが、いずれも自然堆積による埋没が想定される。

遺物 それぞれ覆土中から小破片が少量出土しているが時期を特定するには至らなかった。

所見 用途、時期不明の溝である。E003は確認調査区域で検出された溝と同一のものと思われる。

第2節 確認調査区域

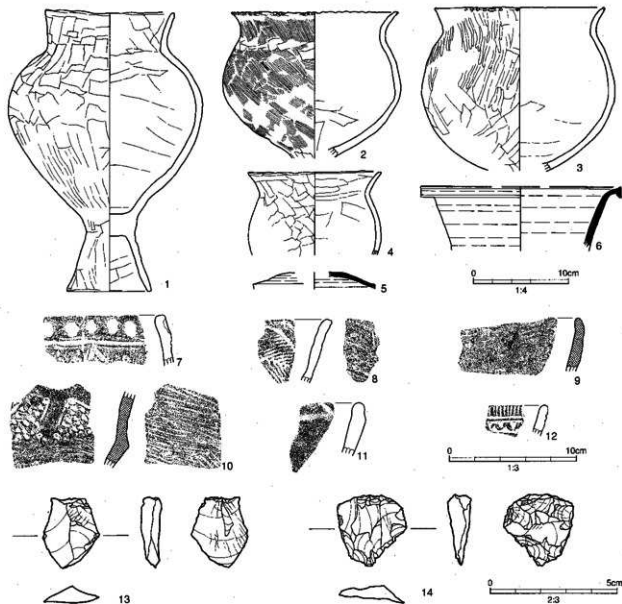


図260 グリッド別出土遺物

表138 グリッド別出土遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 1.1径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 成	胎上	遺存	備考
1	土師器 台付甕	136×90×296 最大径胴部205 口縁は素文で直立。胴上半に膨らみをもち、胴部との接合付近に向かってすぼまる。外面 口縁～胴部ヘラ削り 内面 口縁ヘラ削り 胴部ナデ	褐色	砂粒 褐色粒 多含	略完形	N4-13-1G
2	土師器 台付甕	174××(155) 最大径胴中部(186) 胴部へ屈曲 外面 口縁・胴部縦ハケ 口唇から押江 胴部横・斜めのハケ後ナデ底部・脚接合部ヘラ削り 内面 口縁弱いハケ	暗褐色 青	砂粒含	2/3	N4-13-1G
3	土師器 台付甕	178××(174) 最大径胴中部202 胴部縦やかな「く」の字状 胴部球胴状 外面 口縁・口唇ハケ状工具による刻み目胴部・胴部ハケ状工具によるナデ状の削り その後一部ヘラ磨き 内面 口縁・口唇横ヘラ磨き 胴部ナデ	暗褐色 青	砂粒含	2/3	N4-13-1G
4	土師器 小型甕	(144)××(88) 頸部縦やかな「く」の字状 外面 口縁横・頸部～胴部斜めのナデ状の削り? 内面 ヘラ削り後ナデ	暗褐色 青	砂粒含	口縁片	N4-13-1G 外面ス付着

5	平安 須恵器 蓋	葺掻(128)×かえり径(120)×器高(18) ロクロ 回転ヘラケズリ	灰色 青	粗砂粒含	M5-88-4G
6	奈良-平安 須恵器 広口壺	(210)×-(68) ロクロ ヨコナデ	赤灰褐色 ⑤緑灰色 良	口縁片	N4-14-1G
7	縄文 深鉢	-×-×- 口縁から内湾 内面に横をもつ 外面 円形刺突文を巡らし、横位に沈線を1条施文後、三角状の文様が 加えられる。内面 丁寧な磨き	暗褐色 青	砂粒含 口縁片	
8	縄文 深鉢	-×-×- 無節の羽状縄文をLR単節縄文による曲線で区画 内面は条痕文か?	暗褐色 青	粗砂粒含 口縁片	M5-50-3G
9	縄文 深鉢	-×-×- 汲状口縁 外面 口縁ナデ一部磨直 内面 ナデ	暗褐色 青	繊維含 口縁片	表採
10	縄文 深鉢	-×-×- 早期後半 器々扁台式 胴部に屈曲をもつ 外面 胴部 沈線による幾何学的区画。区画内刺突先端連結部には竹管 状工具による円形刺突が施される。屈曲部で横位の条痕文。 内面 横位、斜位の条痕文	⑤暗褐色 ⑥褐色 青	繊維含 胴部片	M4-59-1G M4-54-1G
11	縄文 深鉢	-×-×- 汲状口縁 後期前半 屈之内? 外面 口縁 直下に横位の沈線1条	暗褐色 青	粗砂粒含 口縁片	M4-33-4G
12	縄文 深鉢	外面 口縁上端に短沈線を縦位に施文 中期初頭 五領台か? 横位に巡らした沈線区画内に三角押文を交互に刺突	褐色 青	砂粒含 口縁片	M3-48-3G
13	割片 石器	長軸28×短軸22×器厚7 重量4.2g やや幅広い割片(Used flake) 湖底の基礎近くに使用痕を残す		完形	N4-23-1G
14	楔形石器 乃至 削器	長軸28×短軸27×器厚7 重量5.1g 楔状の不整な三角形を呈する。対 向する側面痕を残す。2カ所ほど磨耗痕が見られ、楔形石器もしくは削 器として使用された可能性が考えられる。		完形	N4-32-2G

第3章 考察

雷南遺跡において調査された遺構は奈良・平安時代の堅穴住居跡1軒と土坑1基及び時期不明の溝が3条であるが、注意すべきはむしろ確認調査区域で検出された遺構群である。

雷南遺跡は、栗谷遺跡・上谷遺跡が所在する舌状台地の基部に位置するわけだが、雷南遺跡の確認調査の結果と合わせ考えると、栗谷遺跡の遺構密度が低くなる地点を隔て、上谷遺跡を隔てている谷を取り巻く形で、新たな遺構群が展開している状況を知りうる。具体的な状況としては、栗谷遺跡と同様、弥生時代と奈良・平安時代の集落が展開しているが、注目すべきは、雷南遺跡確認調査範囲において古墳時代前期と思われる台付壺が出土していることである。古墳前期の集落の存在が想定されるが、古墳時代前期については、栗谷遺跡の台地北側の一角に展開する地点がある他、その他の地区においては、上谷・栗谷遺跡において検出されていなかった。栗谷・上谷両遺跡に限らず、視点をもう少し広く見ると、両遺跡が所在する台地上で、弥生時代中期以降、古墳時代前期までの集落が断絶無く営々と営まれていた状況を伺い知ることができるのである。栗谷遺跡で調査された古墳時代前期の集落と、雷南遺跡との関係がどうなるのか、引き続き古墳時代中期はいかなる状況となるのか、今後の課題は多い。

第5編 雷遺跡

第1章 雷遺跡の調査の概要

第1節 雷遺跡の概要



図261 雷遺跡遺構検出状況図

雷遺跡は、千葉県八千代市米本字雷に所在し、地形的には、栗谷遺跡、雷南遺跡同様、下総台地の北西部に立地し、印旛沼南岸に位置する。地形的特徴については、第1編栗谷遺跡の第1章を参照されたい。雷遺跡は、栗谷遺跡の所在する舌状台地の基部にあたる部分に展開する。本遺跡が所在する地点の標高は、約23m～24m。谷津に展開していた水田面との比高は約10mである。

雷遺跡の周辺遺跡として北方に役山東遺跡、北東に上谷遺跡及び栗谷遺跡があり、南西側には雷遺跡が隣接して展開する。雷南遺跡のさらに南の開発事業範囲外には向割遺跡、下宿遺跡、下宿東遺跡などが綿々と連なり、これらの遺跡は、雷遺跡、上谷遺跡、栗谷遺跡を含め隣接しながら大きく広がり、印旛沼南岸西端における遺跡群を形成している。

雷遺跡は、その所在する台地の平坦面に展開する。調査は、その平坦面の一部の確認調査を行った。確認調査によって検出された遺構は、弥生時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代後期の竪穴住居跡5軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡13軒、時期不明の竪穴住居跡5軒、溝2条、土坑1基である。遺跡の本来的な広がりから考えると、調査はその一部を実施したのみであるにも拘わらず、多数の住居跡が確認できたことは、今回の確認調査の成果の一つと言えるだろう。

遺跡の基本層序であるが、栗谷遺跡と同様となるが、第I層が表土層・第II層が黒色土層・第III層が暗褐色土層・第IV層がソフトローム漸移層・第V層がソフトローム層となる。遺構検出作業にあたっては、第VI層下面あるいは第V層上面で行った。

第2節 出土遺物

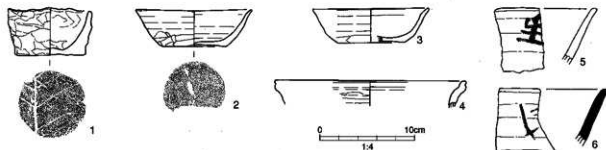


図262 確認面出土遺物

表139 確認面出土遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 小型鉢?		88×75×51	橙褐色	砂粒含	完形	1周辺
2	土師器 杯		(122)×68×39	橙褐色	砂粒含	2/3	1周辺
3	土師器 杯		(122)×(70)×36	暗橙褐色	砂粒含	1/4	外面ケール状付着物
4	土師器 甑		(200)××(27)	褐色	粗砂粒含	口縁片	1周辺
5	土師器 杯		—×—×—	橙褐色		口縁片	DD周辺 墨書
6	須恵器 杯		—×—×—	灰褐色	砂粒含	口縁片	1周辺 墨書

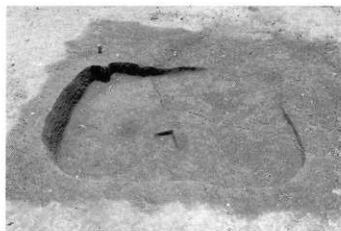
第3節 調査のまとめ

雷遺跡は、上谷遺跡と雷南遺跡との間に位置し、奈良・平安時代の集落を中心に展開している。その中で、確認調査で遺物からの確証を欠くが、古墳時代後期の住居が5軒検出されたことは注目される。栗谷・上谷遺跡において希薄であった古墳時代前期の集落が雷南遺跡において検出され、古墳時代後期の集落が、雷遺跡で検出され、更に後期の集落が、雷遺跡で検出された。上谷遺跡の北側で、古墳時代中期の集落が検出されていることを含めて考えると、栗谷・上谷遺跡周辺において、弥生時代中期以来古墳時代後期に至るまで集落が営まれたことになる。各時代の中心的な地区が何処になるかなど、今後

写 真 图 版



遺構検出状況



A048



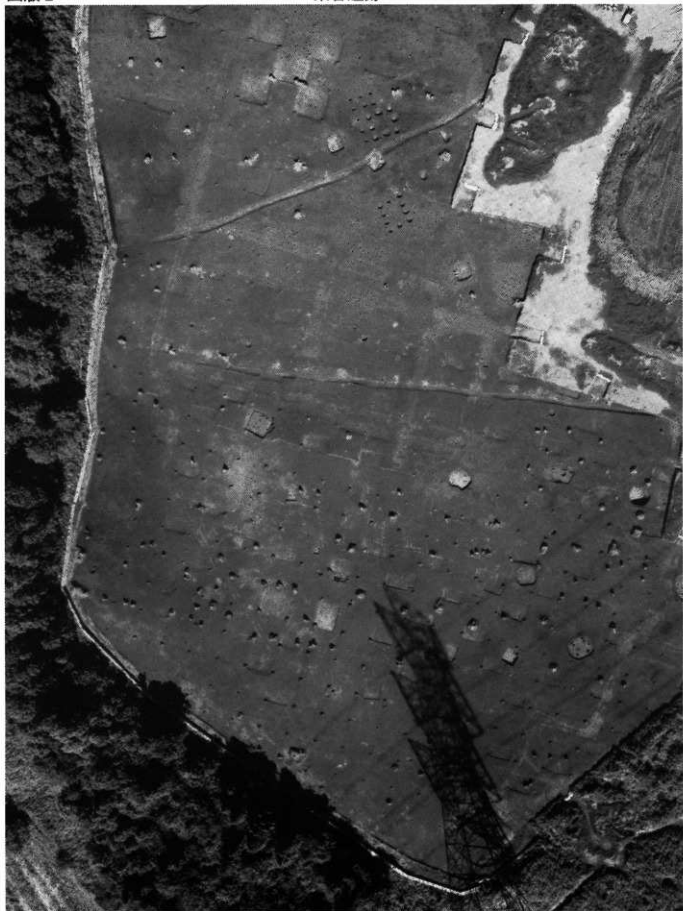
A128



A128(2)



F026



完掘全景



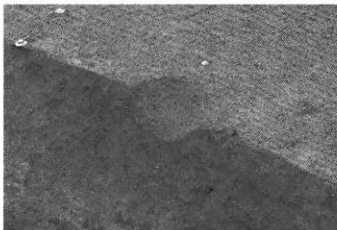
完掘全景(2)



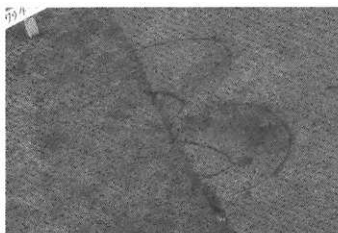
F026(2)



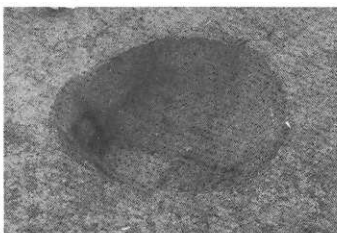
F027



F030



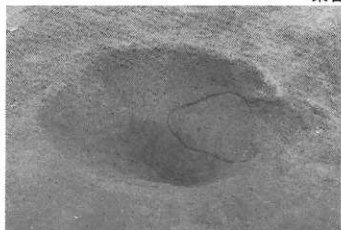
F031



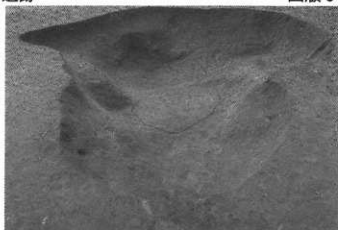
F032



F033



F034



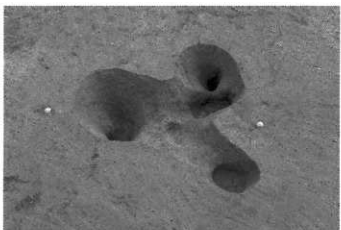
F036



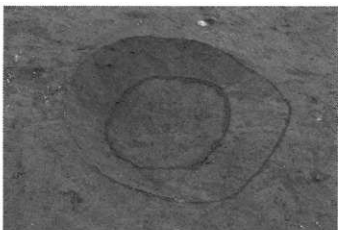
F037



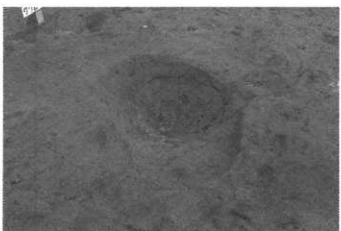
F038



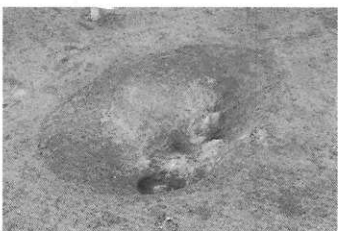
F039



F040



I002



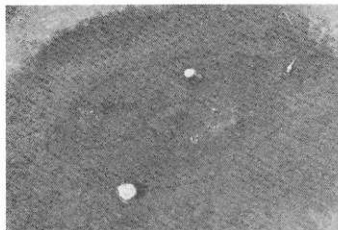
I003



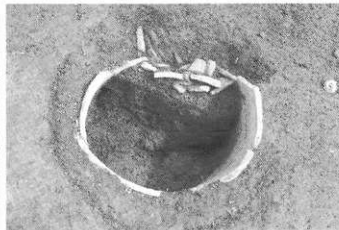
I003(2)



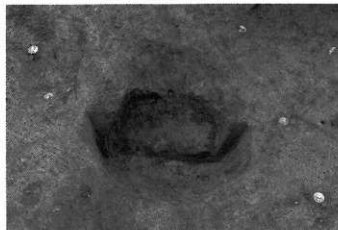
I004



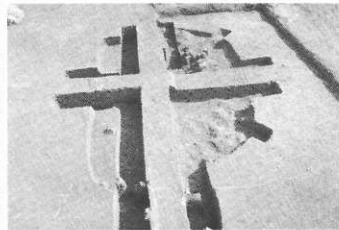
I005



I005(2)



I005(3)



I006



D076



D077



D078



D078(2)



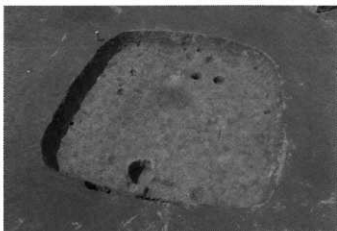
D083



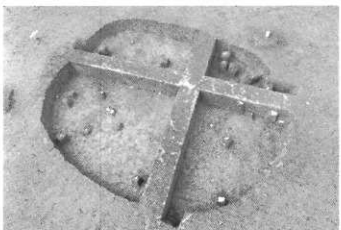
A129



A129(2)



A130



A131



A132